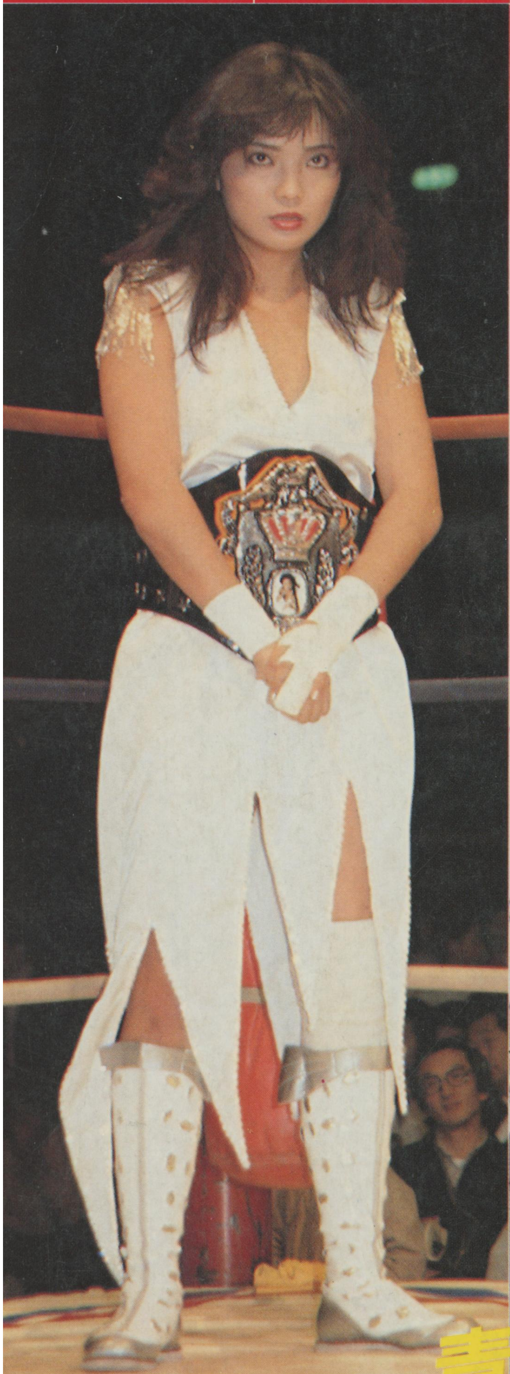
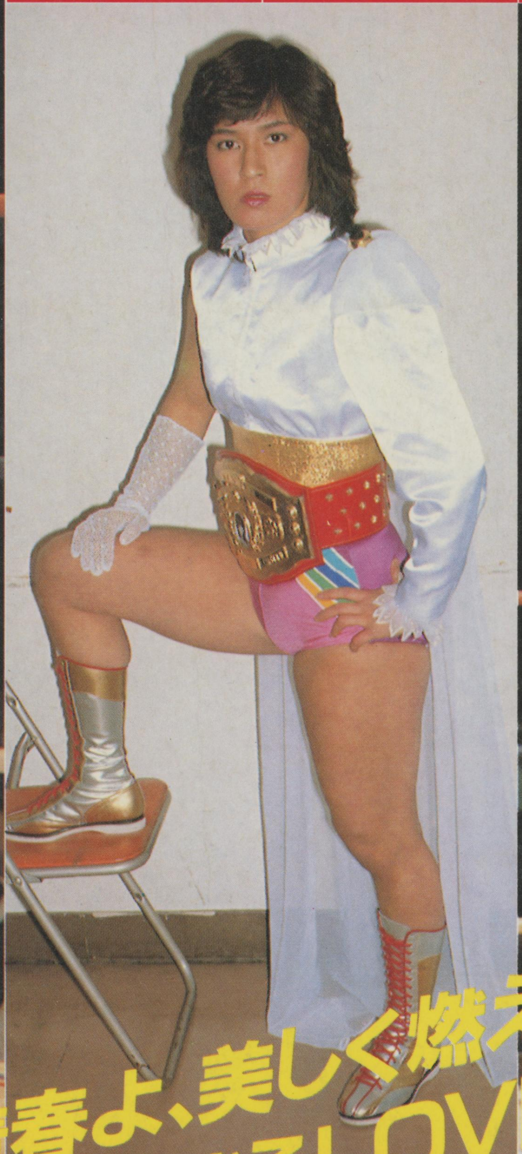
PRO WRESTLING ALBUM ㉑ ザッツ・レスラーVol.7

Women's Pro. Wrestling

リングに咲いた恋人たち

ポストカード付





青春よ、美しく燃えろ！
君に捧げるLOVEメモリー

定価490円
恒文社発行

CONTENTS ●もくじ●

この1冊は〝控室〟の扉を開けて始まった

●ベスト・アイドル

ミミ萩原の魅力 …… 3

女子実力世界一戦 …… 6

横田vs.モンスター

ジャガー横田〝女王への足跡〟 …… 8

●悪のヒロイン

ブラック軍団 …… 27

外人レスラーへのラブ・コール …… 30

さらば！ブームを飾った名優たち …… 55

新時代に翔け！フレッシュ・パワー …… 60

★ザ・ライバル　大森&飛鳥を徹底比較 …… 20

★BP時代のサバイバル　ナンシー久美 …… 22

★長与に魅せられた超フィーバー狂 …… 23

★新人王決定戦に見る出世度 …… 26

★偉大なるスーパースターよ、永遠に …… 44

★消えていったアイドル候補生 …… 47

★米マット界2大〝首領〟の手記 …… 50

★女子プロ・ディスコ・グラフィー …… 52

★公開に先がけミミ出演の映画紹介 …… 53

★いま振り返る感激の引退シーン …… 54

横田、ミミ、デビルに

11 …… 3元インタビュー

元担当記者が綴る

24 …… 女子プロレスの思い出

40 …… 女子プロレスの見方おしえます

42 …… 私と女子プロレス（実況アナ・志生野）

48 …… ルチャ・リブレの女子プロレス

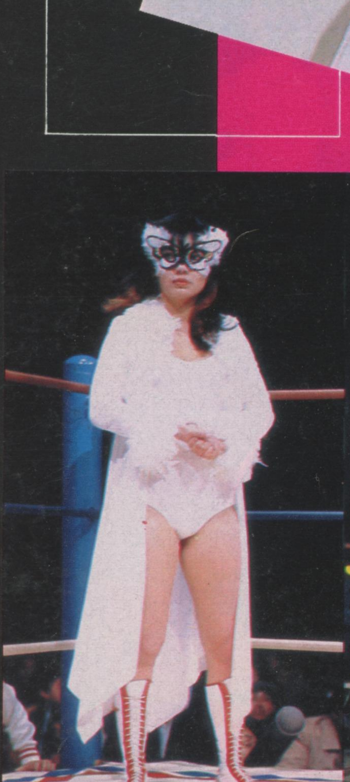
58 …… ポスター・コレクション

白

〝セクシー・パンサー〟ミミのイメージ・カラーは

ミミ萩原●その魅惑の世界

女として、エンターティナーとして抜きん出た存在…ミミ萩原、26歳。彼女の出現は、女子プロレス界のイメージを塗り変えた。さわやかな色気を発散させ、男性ファンを〝魅惑の世界〟へ誘い込むセクシー・パンサー…そんなベスト・アイドルに3つの角度（ファッション、ファイト、プライベート）から迫ってみた。

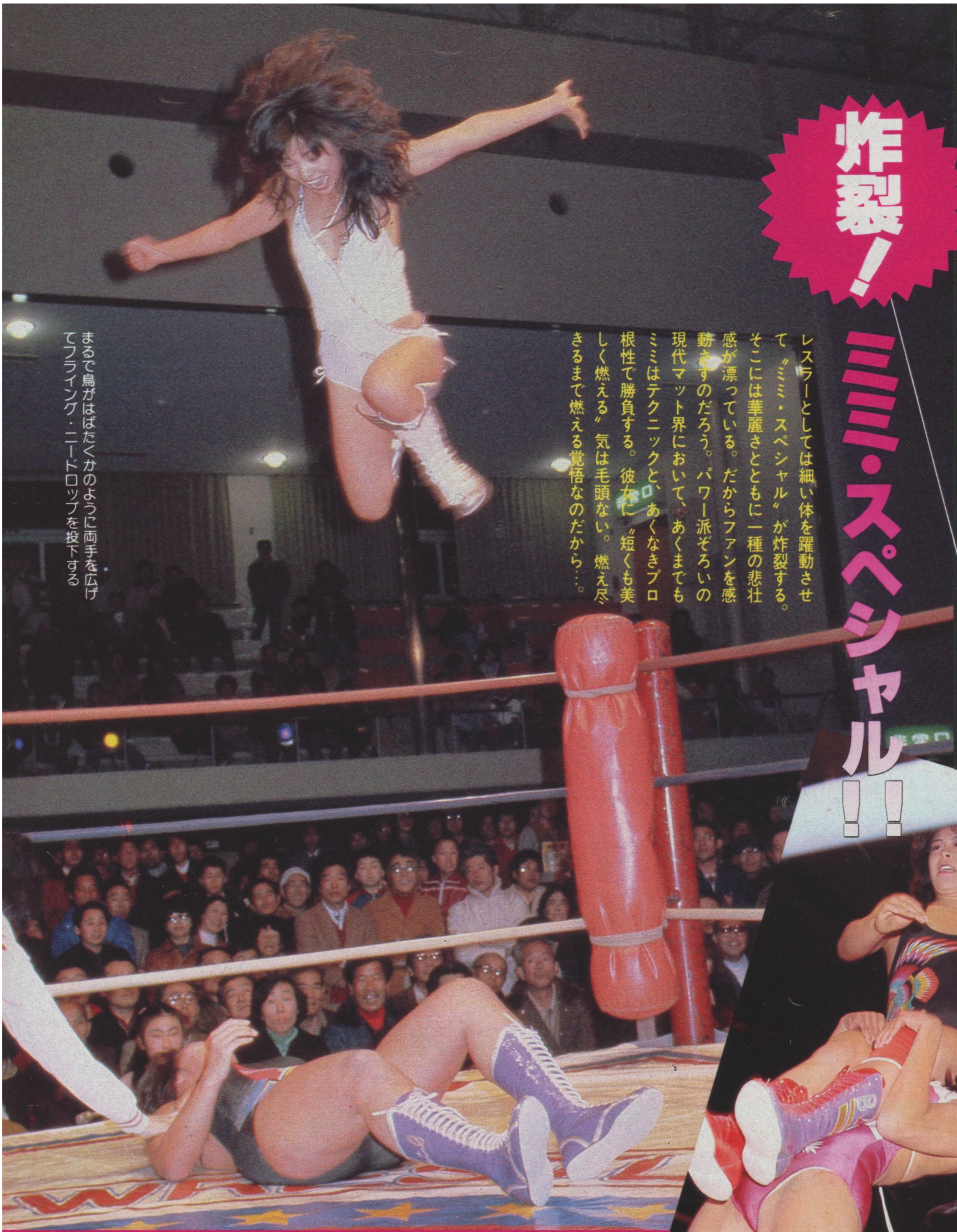


ミミ萩原

●その魅惑の世界

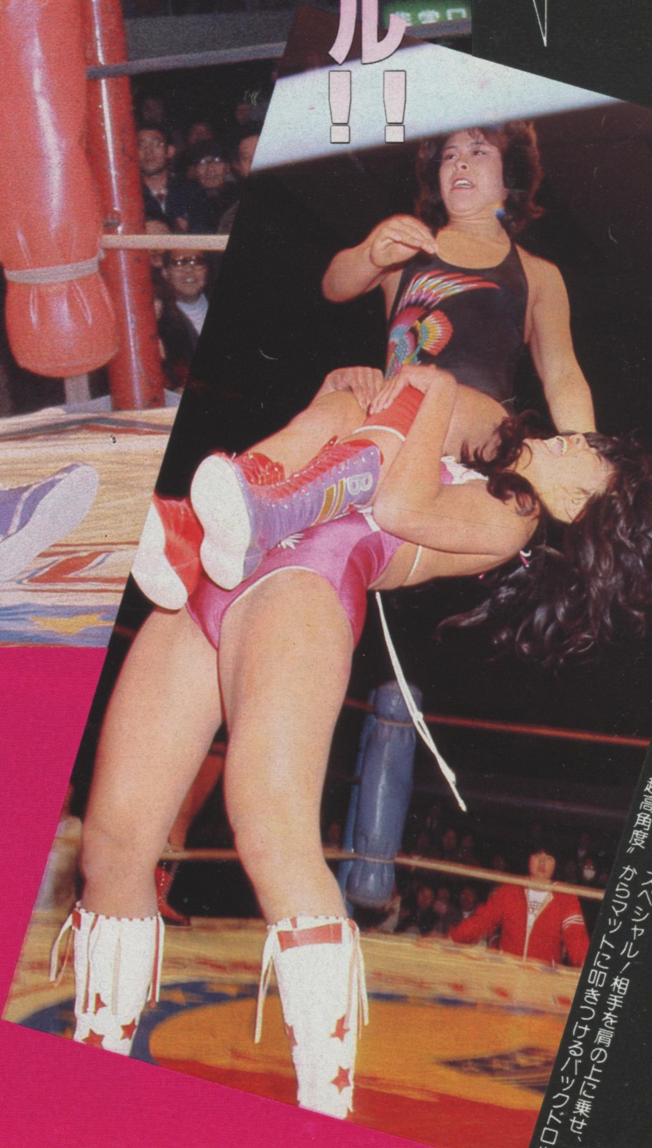
華麗と悲壮感が同居した不思議な魅力

炸裂！ミミ・スペシャル!!



まるで鳥がはばたくかのように両手を広げてフライング・ニードロップを投下する

レスラーとしては細い体を躍動させて〝ミミ・スペシャル〟が炸裂する。そこには華麗さとともに一種の悲壮感が漂っている。だからファンを感動さすのだろう。パワー派ぞろいの現代マット界において、あくまでもミミはテクニックと、あくなきプロ根性で勝負する。彼女に〝短くも美しく燃える〟気は毛頭ない。燃え尽きるまで燃える覚悟なのだから…。



これぞミミ・スペシャル！相手を肩の上に乗せ、その〝超高角度〟からマットに叩きつけるバックドロップ

大森ゆかりとの〝剛・柔〟コンビでWWWA世界タッグ王座を保持するミミ

初公開！

これがミミちゃんの"やすらぎ"ルーム

寝室に入るとパピノスケが、ミミちゃんを独占(?)していた

ミミちゃんの才能は音楽にも、いかんなく発揮されている。休日にはピアノを前にして作詞・作曲に励むことも…

ミミちゃんがプロレス・アルバムのために、初めてプライベート・ルームを公開してくれた。愛するママと愛犬パピノスケが留守を預かる部屋は、素顔に戻れる"心のオアシス"だ。「ママに1軒屋をプレゼントしてあげたい……」それがミミちゃんの切なる願いなのデス。

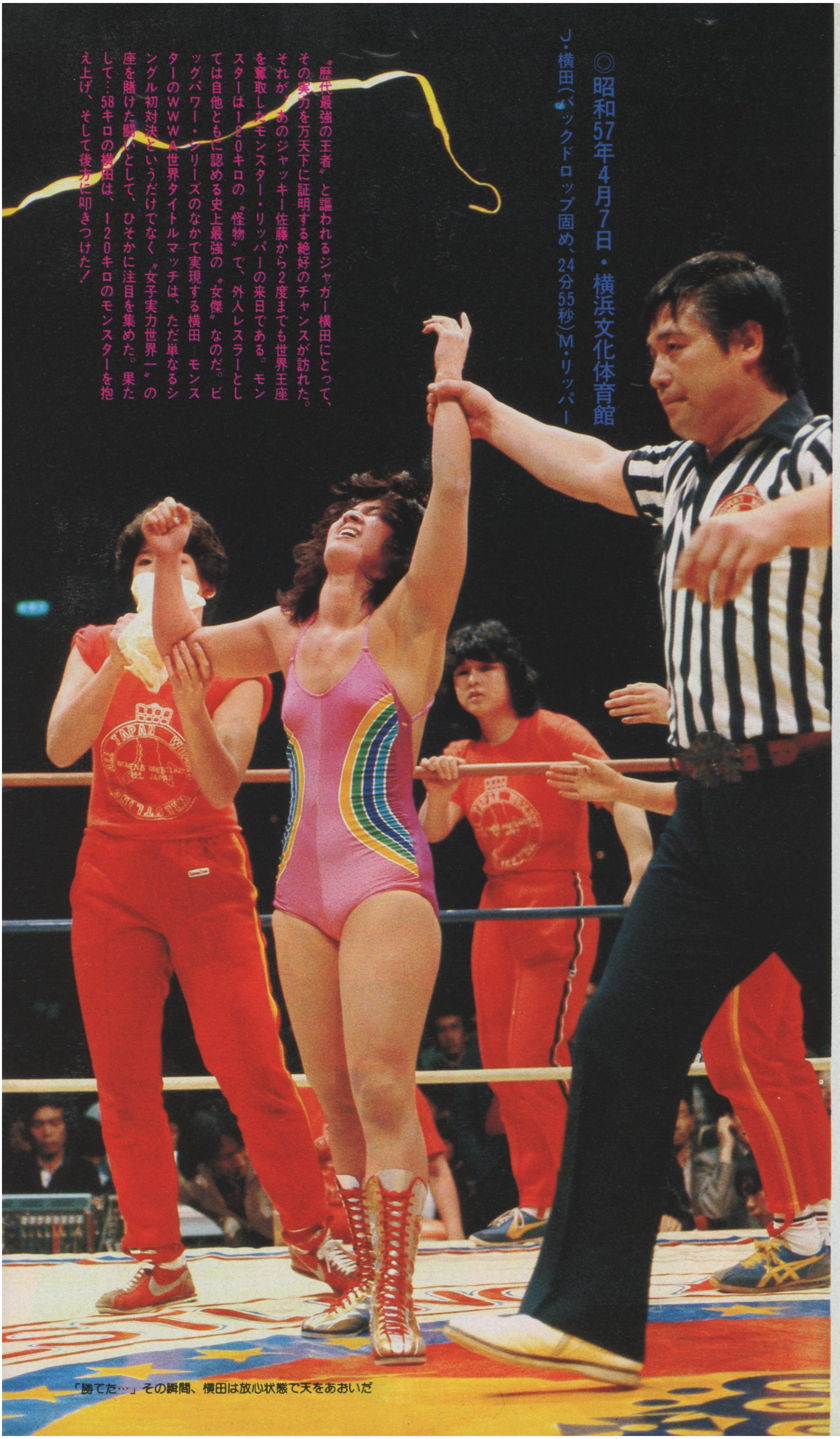
ひとときのコーヒー・ブレイク。こんな時間を大切にしたいミミちゃんです

日本で実現した女子実力世界一戦——横田が制す!!

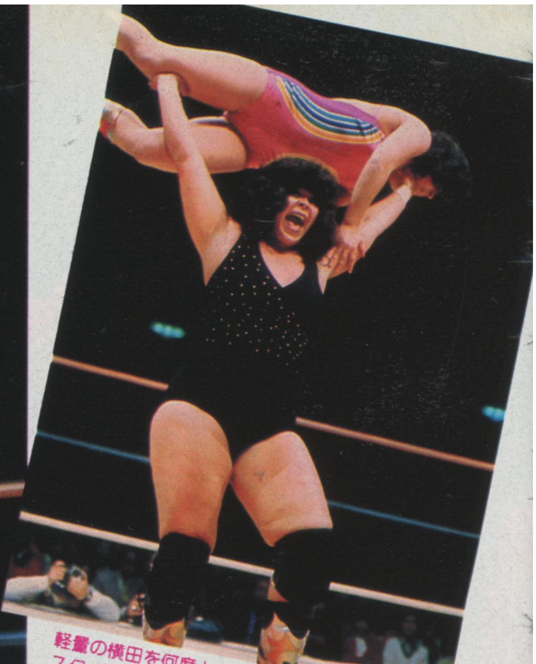
Jaguar Yokota

◎昭和57年4月7日・横浜文化体育館
J・横田（バックドロップ固め、24分55秒）M・リッパー

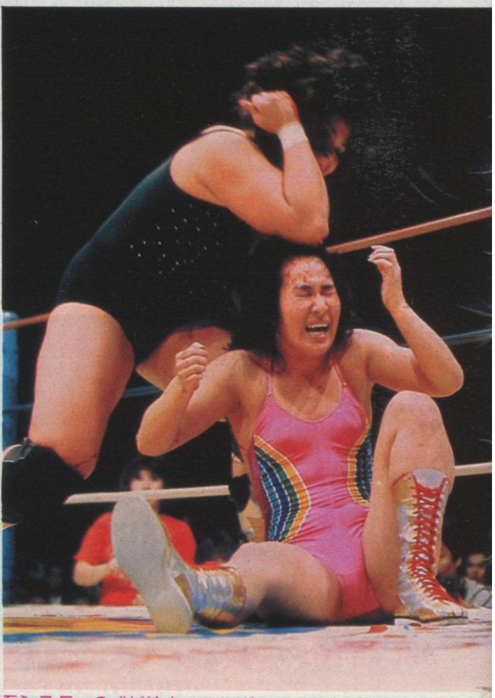
〝歴代最強の王者〟と謳われるジャガー横田にとって、その実力を万天下に証明する絶好のチャンスが訪れた。それが、あのジャッキー佐藤から2度までも世界王座を奪取したモンスター・リッパーの来日である。モンスターは120キロの〝怪物〟で、外人レスラーとしては自他ともに認める史上最強の〝女傑〟なのだ。ビッグパワー・シリーズのなかで実現する横田―モンスターのWWWA世界タイトルマッチは、ただ単なるシングル初対決というだけでなく〝女子実力世界一〟の座を賭けた闘いとして、ひそかに注目を集めた。果たして…58キロの横田は、120キロのモンスターを抱え上げ、そして後方に叩きつけた！



「勝てた…」その瞬間、横田は放心状態で天をあおいだ



軽量の横田を何度となくリフト・アップするモンスター。この怪力には横田も、お手上げだった



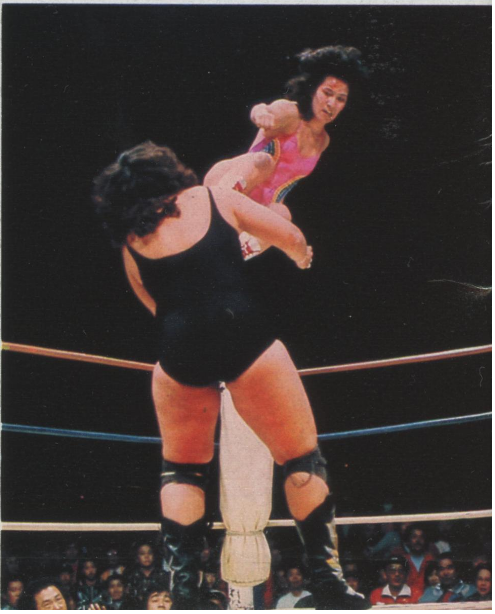
モンスターの〝ド迫力〟エルボー・ドロップに、さすがの横田も悲鳴！

驚異！モンスターをバックドロップで叩きつけ、そのまま押さえ込むフィニッシュ・シーン

場外戦で一歩も引かぬ〝気の強さ〟を見せた横田

研究熱心な横田は、この試合で、自らの限界に挑戦した

〝切札〟のミサイル・キックを連発して、横田はモンスターの突進をストップさせた



「出発(たびだち)に涙はいらない」と ツッぱった少女……それが5年前の横田利美だった。

Jaguar Yokota

5年前の昭和52年5月19日、栃木県体育館で初のプロ・テストが行われ…8人中、4人が合格のコールを受けた。感激のあまり3人は泣きじゃくったが、ただ1人だけは口をギュッと結び1点を見つめていた。それが横田利美……「これから始まるんだ、私の求めていた世界が。そんな時に何故泣けるの?」15歳の少女は、ギラギラと輝やく目で明日を誓った。

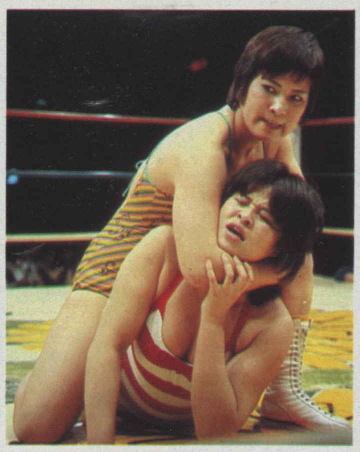
がむしゃら…ヤング・ペアのファイトは、この言葉に尽きた

〝ケンケン〟こと塙せい子(右)とヤング・ベア結成。笑顔と白い歯は、若さの証だ

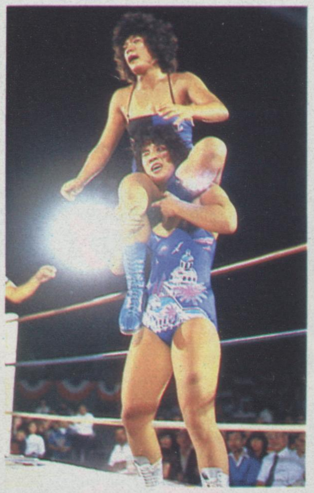
WWWA 世界王者への足跡

怒り爆発！この旺盛な闘志でタッグ・リーグ第3位を獲得（53年12月）

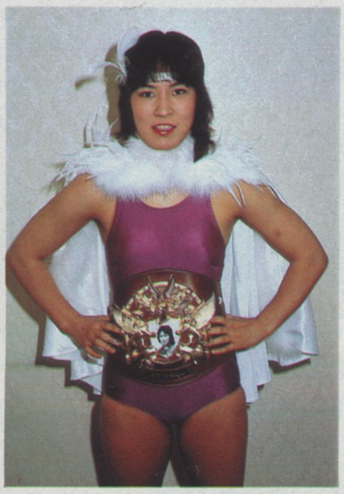
「やった！」この瞬間こそ横田時代の幕開けだ。佐藤ちのとの全日本ジュニア争奪戦に勝つ（55年１月）



名手・ビクトリア富士美との対決で技をすべて盗み取ってしまった（54年４月）

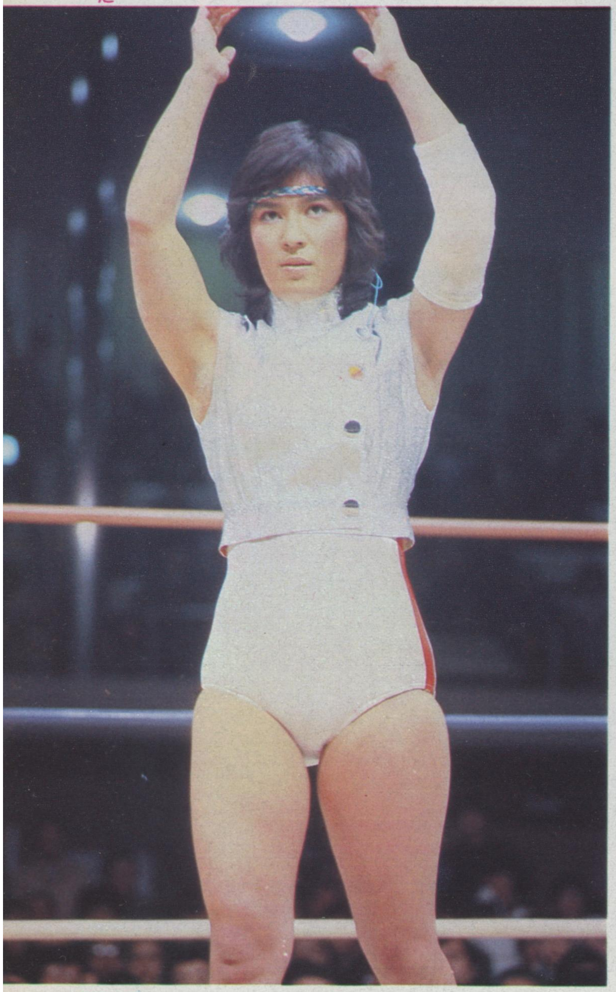


池下と60分の死闘。オール・パシフィックは横田が逃がした唯一のベルト（55年８月）

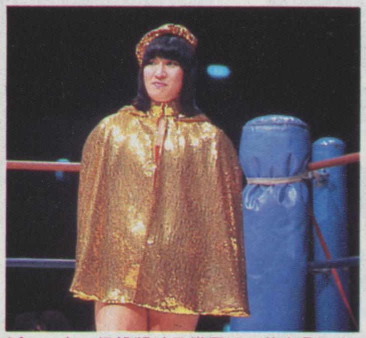


全日本ジュニアのチャンピオン・ベルト姿が初々しい

仮面舞踏会で使うマスクをつけ、ひとときの変身

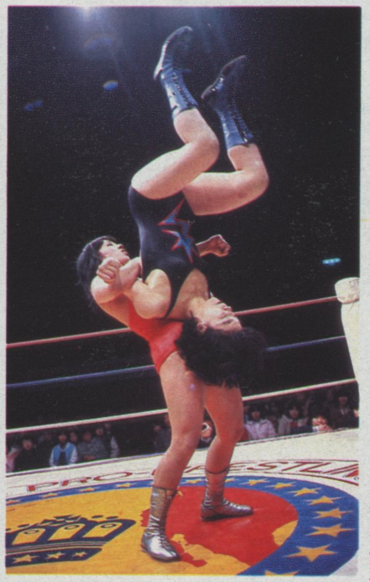


横田の目は、いつまでも遠くを見つめている



ジャッキーに挑戦する横田は、黄金色に光っていた（56年２月）

一晩でデビル、ナンシーを連破。驚異のスタミナで初代全日本王者に（55年12月）



〝世界王座奪取！〟ジャッキーを投げる横田に女子プロの将来を見た（56年２月）

横田にタッグ・タイトルはいらない。堀と獲得後、すぐさま返上（55年12月）

Jaguar Yokota

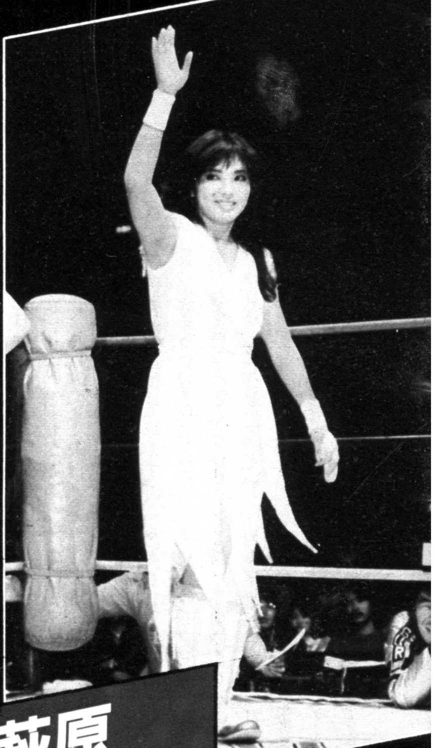
女子プロレスのチャンピオンって、わたしのことです

私服での何気ない仕種にも〝格闘者〟としての姿が生きている

ビッグ・インタビュー

3つの個性が本音を語った

ジャガー横田
ミミ萩原
デビル雅美



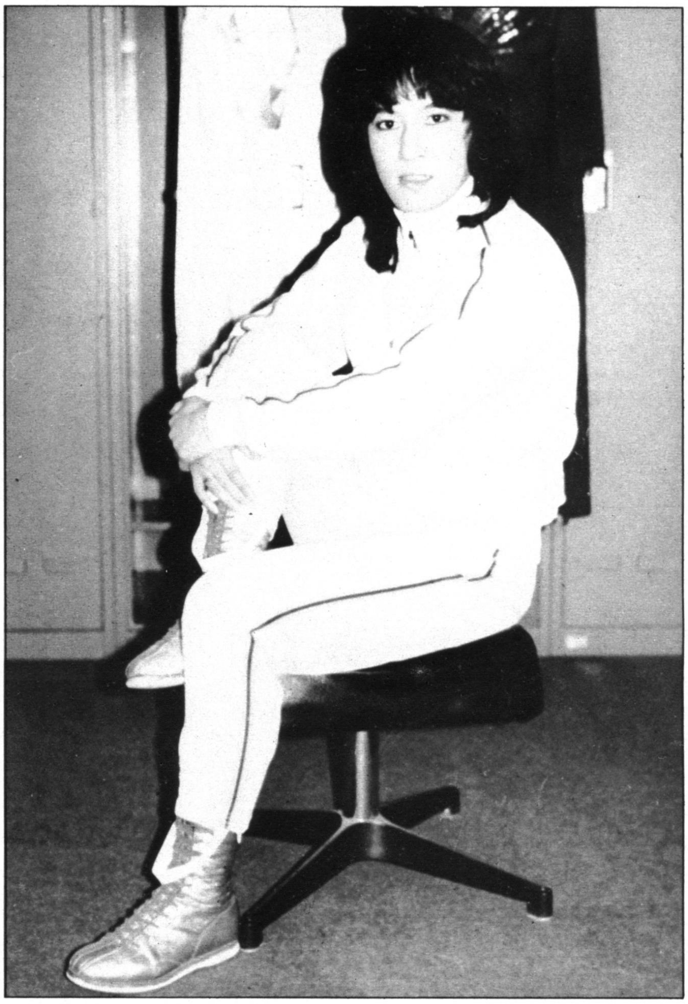
現在の女子プロレス界を支える顔…ジャガー横田、ミミ萩原、デビル雅美の３人は実力にプラスして、それぞれ強い個性と、プロレスに対するシッカリした考え方を持っている。これまで発言する機会に恵まれなかった彼女たちに、その胸中を思う存分さらけ出してもらった。

●WWWA世界選手権者 **ジャガー横田**

「中途半端な攻めをしてくる相手には、思いっ切り返してやるんですよ」

WWWA王者ジャガー横田は、まさに〝現代の顔〟にふさわしい個性派だ。あくなき勝負魂と超越した精神力。女子プロレスに青春を爆発させた、素晴らしきプロレス人生について語ってもらった。

(インタビュアー・ROSSY)



「体が大きかったら、現在の私は存在しない」

―いつも感じるのですが、闘争心ムキ出しの目をしていますね。

横田 そんなことないですよ(笑)。人からよく目が印象的だといわれるけど、自分では愛想笑いのできない、きつい目だと思っています。まあ、負けずぎらいの性格が自然と目に現われているんじゃないかなあ。目は口ほどに物を言うというでしょ。

―まさに輝いてますね。あなたのガウンに書かれている〝闘志〟という文字が、女子レスラーにはない強烈な闘いのイメージを物語っていますよ。

横田 私は、体が小さいので攻めることで、自分をカバーし、レスラーとしての存在を大きく表現しているのです。だから私は、動いて動いて攻めまくるのですよ。〝攻めるプロレス〟私にぴったりの闘いのテーマだと思いませんか?これだけ技が多用化してくると、試合の組み立てが難しくなってきています。単なる技のコンビネーションじゃなくて、肉体の限りを尽くす試合が望まれているのです。ただ慣れ合いでなく、ファンは勿論、闘う側もエキサイトするようなものを作ることが、我々の使命だと思うんですよ。そのためには常に、自分の気持ちの中に〝闘志〟を燃やしてなければできません。

―なかなか過激なプロレス論ですね。

横田 プロレスは、技術よりも精神力が第一なんですよ。いくら力のある選手でも、気が弱かったり相手に気合い負けしていたら手が出ませんからね。だから中途半端な攻めをしてくる相手には、思いっ切り返してやるんですよ(笑)。リングに上がったら、遠慮なんかしてられませんからね。

―あなたと闘う相手は大変ですね。それは、天性の運動神経が自信にもつながっているのですか?

横田 おかしいかもしれませんが子供の頃は、何に対しても目立たない子だったんです。でも不思議とスポーツをやることによって、違う自分が引き出されていくんですよ。それと、幼い時から自立心が強かったので、何でも自分で解決してきました。だから親に相談して物事を決めた記憶ってないんですよ。

―確か、中学時代は卓球の名選手だと聞きましたが…。

横田 お姉ちゃんが卓球をやっていたので、私も自然のうちにやるようになりました。中学2年で都大会に出場し団体2位、中学3年では荒川区大会で個人優勝しました。卓球というとつまらないという印象がありますけど、どのスポーツでも、それをやった者でないと良さや面白さはわからないですけどね。

―そうでしょうね。卓球をやったことはプロレスに役立っていますか?

横田 根本的には違うものですが狭いコートでのラリーはプロレスと同じですよ。

―それは、どんな点ですか?

横田 卓球は、攻め込まれていると返すのが精一杯で相手のペースにはまってしまいますね。でも相手が、ちょっとでも力を抜いたスキに反撃するんです。ちょうど私のプロレスの試合運びと同じなんですよ。それは、相手に攻められている時は、冷静に状況判断して反撃するタイミングを狙っているのです。卓球の持つキメの細かい計算されたフットワークが、今になって役に立っているように思えますね。

―卓球とプロレスの相似点は、わかりましたが、入門した時は小さな体というハンデを、さぞ感じたでしょう。

横田 今になって考えると、私が大きな体をしていたら現在のジャガー横田は存在しなかったでしょうね。私は無器用だし、練習中でも〝何でこんなに体が重いんだろう〟と感じることが多いんです。だから練習も人の3倍はやりました。練習を積み重ねることで、自分自身を納得させていたし、小さな体を克服してこれたと思うんです。もし体が大きかったら、ここまで自分の体をいじめなかったでしょうね。

―レスラーには、怪我がつきものですが、その割には怪我が少ないですね。

横田 怪我というのは、予期せぬ時に起こるもので、不注意からくることが多いです。でも私は、試合中すべての動きを頭と体に覚えさせて先々を読んでいるので、どんな態勢になっても怪我をすることがないんです。これは階段を降りることと同じことです。一段、一段踏んばりながら降りると何も起こらないけど、浅く降りたり段を飛ばして降りたりすると、ころ

んでしまうでしょ。だから、ちょっとした気のゆるみが怪我を呼ぶんですよ。

——その点ミミなどは、怪我を起爆剤のようにしているようですね。

横田　ミミの場合、芸能界からの転身ということもあって、体もできてなかったし、一口には表せない努力をしてきたと思うし、今もしていますね。練習していてもミミは自分に力がないことをわかっているので相当苦しんでいますよ。でも、一見弱そうに見えるけど、あれで仲々粘り強さがあるんですよ。まぁ彼女から粘り強さを取ったら何も残らないし、自分に喝を入れていないと精神面で負けてしまうんでしょうね。私にとってはミミを直接的にライバルだとは全然思っていませんけど……。そう思いません?

「朝、パッと目をさましたら私が世界王者」

——現在のジャガー横田を語る時全日本ジュニア選手権を獲得（55年1月）したことが、プロレス生活における大きな転機となりましたね。

横田　そうですね。それまでのデビューしてから3年間は〝出ると負けの横田〟といわれるぐらい万年前座でした。でも、これは下積みでも何でもなく新人にとっては当たり前の姿なんですよ。同期のトミーやルーシーがチャンピオンになっても〝自分はまだ若いから焦るな〟と言い聞かせていたので、辛いと思ったことはありませんでした。そんな時期に初代全日本ジュニア王座決定戦への出場が決まったんです。当時は、自分の人生におけるチャンスはプロレスの中にしかないと心に決めていました。その考えは、いまでも変わっていませんね。

——勝者をコールされた時の涙が印象的でしたよ。

横田　この世界に入って初めて泣きました(笑)。やっとレスラーとして1人前に認められたようで、さすがに自分の感情を押さえることができなかったんです。

——その後は、トントン拍子に全日本、WWWA世界タッグ、WWWA世界シングルとタイトルを総ナメしてきましたね。

横田　ジュニア王者になってから約1年間、あまりにも順調に行き過ぎて、気がついてみたら腰に世界チャンピオンのベルトが巻かれているんですよ。朝、パッと目をさましたら私が世界チャンピオンだったんです。そんな具合なのでまるで実感が湧かなかった。

——でもジャッキーに勝ったのにあまり嬉しそうな顔ではなかったですね。

横田　あんな勝ち方では、素直に心から喜べなかった。ボディスラム1発で強引に押え込んでしまった自分がプロとして恥しかったです。今だから言えますが、あの時追い込みでヒップ・アタックをすかされたんです。その時点で自分の技を出し尽くした状態だったので、これをのがしたらという気持ちが早って1発勝負に賭けたのです。

リングで見せた、最初で最後の涙。初のタイトル獲得（全日本ジュニア）で感激のワンシーン

56年度のデラプロ大賞を受賞した横田。着物姿に記念循がぴったし

——世界王者になってレスリングが変わりましたか?

横田　ジュニア選手権を取った時は油も乗ってきたし、自分にとって生き生きとしたプロレスができました。これは、ベルトによって自信がついたのです。ところが、世界チャンピオンになってしまったら、逆にベルトの重みを感じすぎて焦りが出てしまいました。ジャッキーさんが保持していたベルトということもあって、王者としてのレスリングについて考えすぎたせいかもしれません。ベルトを取ったことが苦痛で、満足のいく試合ができませんでした。だからベルトを返上したい気持ちで一杯でした。でも苦しんで、苦しみ抜くことで、その壁を乗り越えてイイ結果が生まれたと思うんです。

「今は、10の生活のうち9までがプロレス」

——振り返ってみると、チャンスを確実にものにしていますね。

横田　勝負というのは運なんですよ。我々の力関係なんて、そんな差はないですよ。だから私は、誰と闘うにしても、勝つことよりも負けないレスリングをしようと考えることにしているのです。確かに勝負ですから、勝たなければ何の意味もないけれど、それは付属的なものであって試合内容を重視して見てもらいたいですね。見にきてくれた人たちに「よくやった！いい試合だった」と言われることを聞くためにリングに上がるような毎日です。

——よくわかりました。あなたをそのような心境にさせるプロレスの魅力って何なのですか?

横田　プロレスには頂点がないんですよ。私は、これまでこれが最高の試合だと思ったことは1度もありません。プロレスを懐古的に感じるとしたら、すでにレスラーとして後退している表われですよ。それほど奥が深いし、やりがいのある仕事なんです。試合における観客の反応が手をとるようにわかるから、1試合1試合を全力投球の姿勢で取り組んでいるのです。

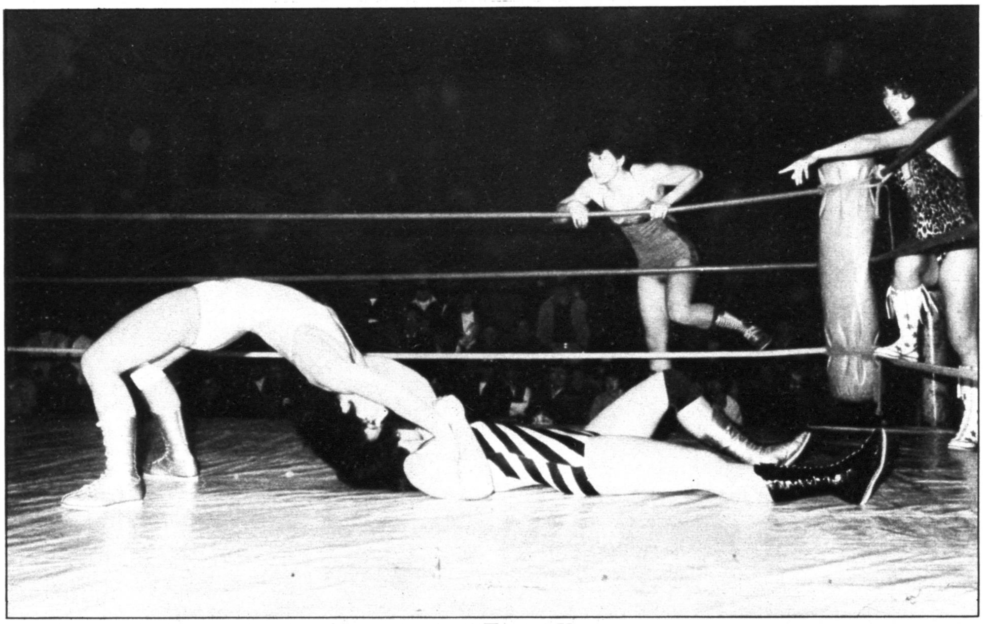
だから今は、10の生活のうち9までがプロレスにウェートを置くといった状態なんですよ。仕事を離れていても、頭の中は常にプロレス中心に回っているので、我を忘れて自由な気持ちになることを自然のうちにセーブしてるみたい。

——これからのプロレスに対するビジョンはありますか?

横田　ベルトを維持することではなく、いつまでも自分の闘志を全面に出せるような試合をやっていくことです。

——最後になりますが、ファンに対してのメッセージを聞かせて下さい。

横田　私は、いつも私を応援してくれるファンに対して〝ありがとう〟の言葉を心の中で送っています。自分は、愛想が悪く礼儀正しい人間とは思えないけど〝ありがとう〟という暖かみのある言葉を忘れないようにと心掛けているのです。


孤を描くような横田のブリッジ。女子プロでは珍しい風車固めを公開

素顔の横田は、こんなコだった

横田千恵子（東京・荒川区に住む母親）

利美は4人姉妹の末っ子で、ああ見えても小さい時は泣き虫だったんですよ。私の母（横田の祖母）が関節リュウマチという持病を煩っていたので手足が不自由でした。それを身近に見ていたので、とてもお年寄りを大切にしていましたね。だから銭湯に行くと近所のお年寄りが私に親切にしてくれるのです。

「お宅の娘さんがいつも優しくしてくれる。娘さんに返すことができないので……」そんな具合なので、まさかプロレスに行くとは思いませんでした。

それと赤ちゃんが好きで、小学校3年の頃でしたか「お母さん、ご飯をたくさん食べて妹か弟を生んでよ」とよく言っていました。末っ子だったせいもあるでしょうね。

たまに実家に帰ってきますけど、「これで人様の前で口がきけるのか」と感じるほど、すごい甘ったれなんです。一緒にお風呂に入りたがって「当分、逢えないから…」と背中を洗ってくれたりするんですよ。性格はきついと思われがちですが、家では優しい面倒見のいい子です。

横田とトミー。2人の友情は今も続く（52年グアムでのスナップ）

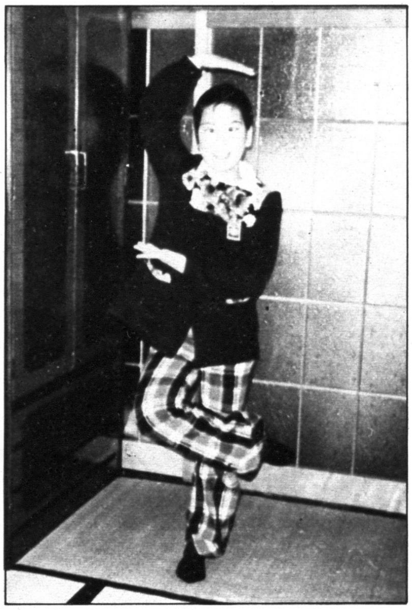
トミー青山（女子プロの同期生で大親友）

私は一匹狼的存在だったので女子プロの中では、ほとんど友だちができませんでした。でも利美だけは心を許しあえる仲でしたね。誰でも一人になりたい気分ってあるでしょ。利美はそんな時には気をつかってくれるし、必要な時にはそばにいてくれるんです。

大ざっぱで気が大きいようにみえるけど、意外と神経質なんですよ。当然勝つと思われた新人王戦でも緊張のあまり胃炎にかかり負けたほどでした。普段は後輩の面倒見がいい〝親分肌〟で、さっぱりした性格をしています。

今だから言えるのですが、私と宮もっちゃん（トミーの夫で元全日本女子プロレス営業部長）が付き合っていたのを利美だけには教えていました。手紙を書くたび、利美が会社の人にわからないように渡してくれる仲介役になってくれたのです。

今、考えると彼と私が結婚できたのは利美のおかげじゃないかと、とても感謝しています。


おどけて「シエー！」のポーズ。11歳の冬のこと

まさに横田は飛鳥の〝師匠格〟だ

ラ・ギャラクティカ1号（メキシコの覆面レスラー）

私が初めて日本に来た時、リミはまだ入りたての新人だったけど当時から根性のある、いい選手だったな。まぁ、彼女が世界チャンピオンになったというのも、うなづけることだよ。去年、再び日本に行ったけど、リミはもの凄く気が強いので試合中はガンガンやり合ったよ。私も気の強さでは負けないからね。

ある試合でお互いにエキサイトし、試合後もバスの中で口論したことがあったんだ。プロとして自分の主張を通すあたり、私とリミはよく似ているよ(笑)。それでもリミとは一番の〝アミーゴ〟だし、今度来る時は世界タイトルに挑戦してスープレックスで投げてやるよ。

ライオネス飛鳥（横田を慕う後輩）

デビューした頃から利美ちゃんには、いろいろお世話になっています。右も左もわからない新人の私に「プロレスとはこういうものだ」と身をもって教えてくれました。それに論理的に、わかりやすく言ってくれるので助かりました。

よく2人でスパーリングをやるのですが、私が押え込んじゃうことが何回もありますよ。でも、いざ試合となると私は力が発揮できないので、一時悩みましたね。利美ちゃんの勝負強さと精神力は、いつも見習わなければと一目置いています。

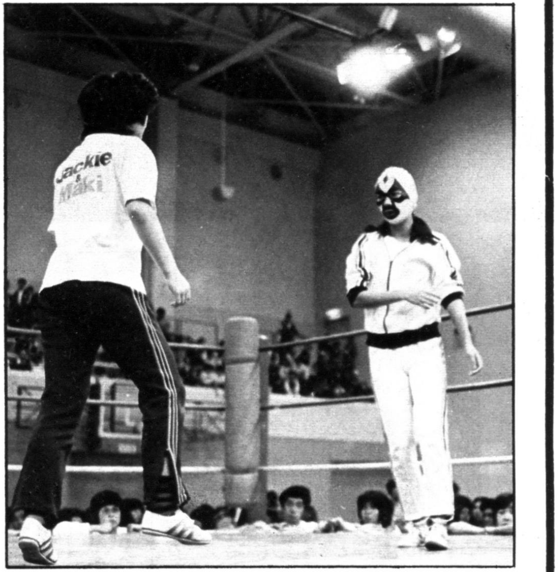
でも、映画やテレビで悲しい場面を見ると涙ぐんじゃう〝センチメンタル〟な面もあるんですよ。

ミミちゃんのインタビューに入る前に、ぜひ、彼女のこんな経過だけは知っておいてほしい。

〝プロレスラー〟ミミの足跡

最近、各マスコミを賑わすミミちゃんブーム。グラフィックな活躍ぶりはご存じの通りだが、前座時代のフォトは意外と知られていない。そこで芸能人から〝プロレスラー〟に生まれ変わりチャンピオンになるまでの足跡を簡単に振り返ってみよう。

1



練習生時代、ミミは、なぜか覆面を着け素性を明かさなかった（52年10月のプロ・テスト）

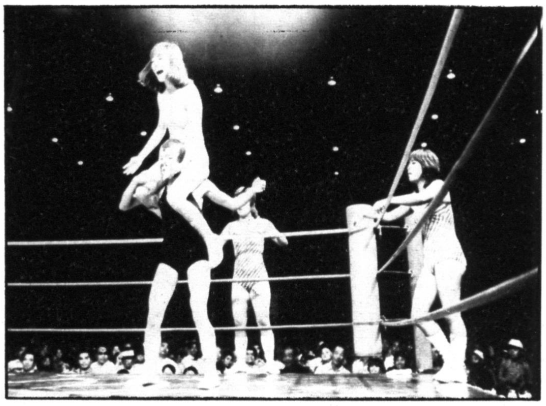
2

22歳の誕生日がレスラーとして〝待望〟のデビューだった（53年2月6日・大阪、対横田）

3

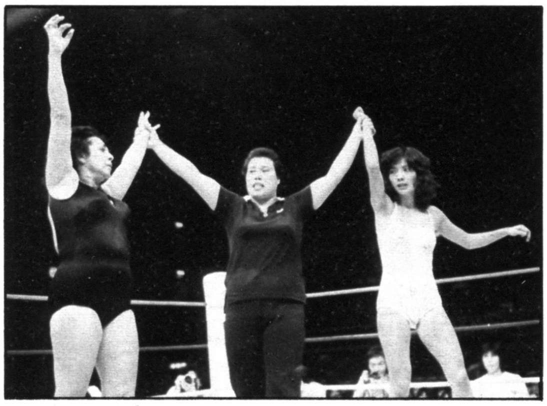
佐藤ちのとラブリー・ペアを結成しタッグ・リーグ戦参加。2勝5敗と大健闘（53年10月）

4



ヤング・ペアを従えて大ハッスル（53年11月・沖縄）

5



日米対抗リーグ開幕戦で世界王者ムーラとのエキシビションマッチに大抜擢される（54年9月・横浜）

6

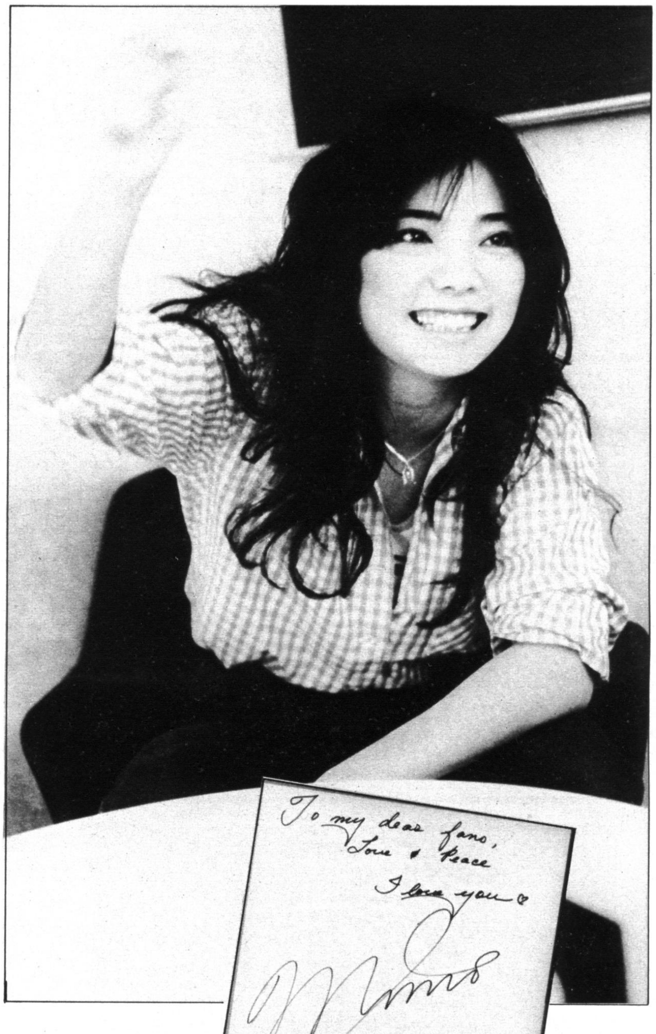
前座当時の数少ないTV出演（55年5月・フジ「ズバリ当てましょう」）

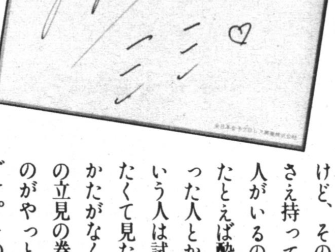
7

宙を舞うミミ…池下からオール・パシフィックを奪った嬉しい一戦（56年2月・横浜）

●アイドルNo.1 **ミミ萩原**

「ママと先生と男の子が私の友達でした!」





プロレスラーとしてすでに5年が過ぎたミミちゃん。この頃、マットをおりてもいろんなところから引っ張りだこの忙しさ。そうしたなかで最近「あと5年、プロレスラーとして頑張ってみます」と宣言。ファンにとってはうれしい発言だが、さて、このミミちゃんはいったいどんな人なのか? ミミちゃん本人にインタビューして素顔のミミちゃんにせまってみた。

(インタビュアー・二木 隆)

小さな紙切れでサインを頼まれると感激しちゃうのです

——ミミちゃんとはデラプロ誌の「ミミちゃんの知らない出会いシリーズ」でときどき、いっしょに仕事をしたけど、全然、人見知りしない人ですね。むしろ、ミミちゃんは、知らない人と出会うことを楽しんでいるみたい。だから、もし他人から「ミミちゃんて、ひとことでいうとどんな人なの?」と聞かれると、僕は以上のようなことだと思うのだけど…。

ミミ あたっているかなあ〜。それとも、あたっていないかなあ〜。でも、本当に人見知りしませんね。

——不思議ですね。

ミミ いえ、昔したんですよ。小学生のころ。人前に出るのがはずかしくてね。最近は誰でも、すぐ親しくなっちゃうんです。私はツンツンするのがイヤで、こちらがツンツンしないかぎり、どんな人とも友達になれると思います。

——そういえば、これは極端な話でたとえとしては良くないんだけど、ある人がいうには、ミミちゃんは乞食の人にも喜んでサインするそうですね。

ミミ ええ、そうです。人間には変りないし、ファンには変りないですから。

——普通、なかなか出来ないことですね。

ミミ そうですかね。それを出来ない人が、私は不思議でしかたないです。うちの会場では写真入りの色紙を5百円と2百円のを売っていて、試合が終ったあと、その色紙を買っていただいた人には、サイン会をしてサインをするのだけど、その2百円さえ持っていない人がいるのです。たとえば酔っぱらった人とか、そういう人は試合が見たくて見たくてしかたがなく、千円の立見の券を買うのがやっとなわけです。その人たちも、みんながサインをもらっているというので、小さな紙切れやタバコのつつみの箱の裏などを持って、列に並んでいるわけです。そんなとき、ここでは××の商品を買った人だけですとは、私はいえません。断わったらファンの人に失礼です。私は、私のサインの欲しい人にはどんな人にもします。会社の人が、もうバスにみんな選手が乗って待っているから、いい加減終りにしようといっても、私は全員にしちゃうわけです。

——それでも、ときどきはイヤなこともあるでしょう。

ミミ たとえば、さっきの話と逆ですが、たくさんのお金を持っている人が、私の商品を右から左へと全部買ってくれ、これだけ一杯買ったのだから、サインしてくれるのは当然だろうということを言うわけです。そういわなくても、私は全部サインするわけです。そういうのはイヤです。それなら、買ってくれなくても、こうしてずっと並んでいたんだという人のほうがいいですね。レスラーとしてありがたいですよ。

私の心のなかのミミ萩原

(大高 雅志)

「うわーっ!あーっ!」大きな悲鳴を上げてリングをのたうちまわる花車(キャシャ)な女がいた。何故か4年前に目撃した美しい女子プロレスラーに魅せられて現在に至る。

これはミル・マスカラスの初来日の時に体験した僕の心情に符合している。リングに立っているだけでも絵になっており、ただ見とれるばかりであった。心做しかミミのプロレスにおける構え方はマスカラスのそれと非常に似ていることに意外な思いをしている。しかし、マスカラスの華麗なる見て呉れ重視のプロレスも〝男〟という枠の中では既に色あせてしまっている。女だからこそ華麗さが求められて当然であり、また、そこにミミの存在がある。

デビュー戦から出ると必ず負けという状態が長い間続いていたミミであるが、昨年2月、横浜文化体育館のリング上で池下ユミという女子プロの中では抜きん出た実力派レスラーを相手にタイトルを奪取するという偉業を成し遂げてしまった。

あの時、流したミミの涙は、それまでの長い苦闘のレスラー生活を物語ってはいまいか? あの試合にしても守勢一方のミミが逆転勝利をしたわけだが、ミミに攻勢一方のハンセンのようなプロレスを求めても似合わない。ミミのプロレスは失礼ながら〝やられの美学〟であり、また弱い者が強い者を倒すという人間の奥深い意識をゆさぶるものでなければならない

小学生の頃、男の子を子分にして遊んでいました

――ところで、小さい頃のミミちゃんはどんな性格でしたか?

ミミ そうですね「ハイ、ハイ、ハイ!」でした。先生にもママにも。とにかく大人の人たちと接するのが、好きだったんでしょうね。先生やママに楽しかったんです。

「ハイ、ハイ!」というのが…。

――なるほど、ミミちゃんらしい話ですね。

ミミ なにかわからないことがあっても、私は友達に聞かないんですよね。先生に聞くのです。「先生、これあれですか、これあれですか?」と自分のほうから聞くのです。私は友達から聞くよりも先生に聞くほうが、たしかだと思ったから聞くのです。決してこれ(ゴマスリ)じゃないですよ。ほかの人からみると「あの子はこれだ」といわれますが、先生にはもの凄く可愛がられました。どんな先生にも「いい子、いい子」といわれました。私はそんな気持ちじゃないんですが、みんなから「ちいさいペット」といじめられました。

――じゃあ、女の子の友達は少なかったでしょう。

ミミ そうです。友達はみんな男の子でした。男の子を子分にしていました。みんなうちの家に遊びに来たがるんです。その頃、家も庭も広くて、お庭ごっこして遊んでくれるなら来てもいいよといっちゃったりしてね。それから、みんなで食事して、あとでみんなお母さんがうちの家に迎えに来てくれるのです。

――楽しかったでしょうね。

ミミ ほかに、男の子が私のカバンを持ってくれたり、宿題をかわりにやってくれたりしてくれましたから、それはいいんですけど、自分で宿題をやらないからテストになると全然わからなくて、逆に困っちゃいました。でも、その男の子たちが、何かあると私を守ってくれるから、すごくうれしかったですよね。たとえば、女の子が陰で私の悪口をコソコソと聞こえるように、聞こえないようにいうでしょう。その時、10人ぐらい男の子が「なんだ、いいたいことがあったら、はっきり言えよ!」と私をかばってくれるわけです。

――ホー、面白い話ですね。ママとミミちゃんの関係はどうでしたか?

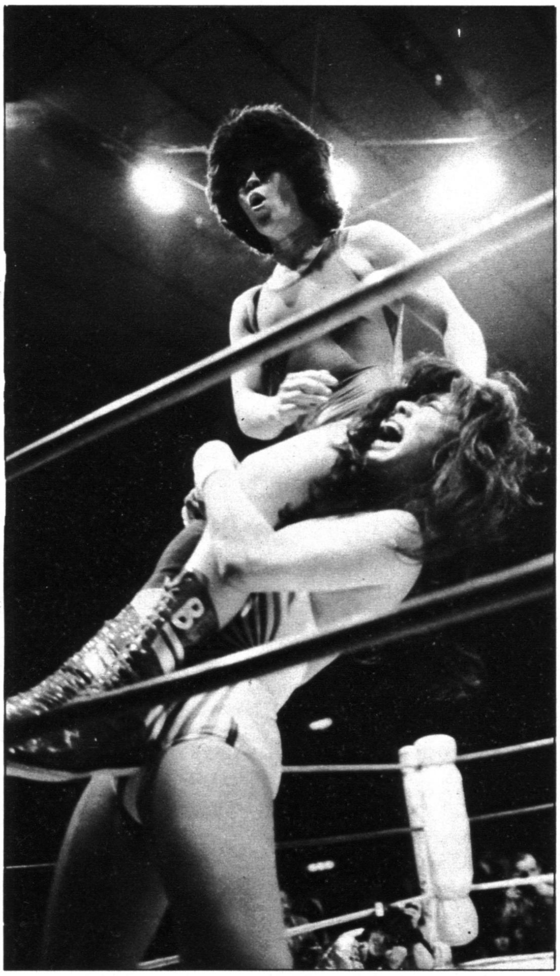
ミミ 甘ったれ屋でした。家に帰るとママのうしろにちょこんとついた"ママッたれ屋"でした。でも中学校のときは、これがまた全然違っていたんです。スイスのカトリック系の学校の寄宿舎にあずけられていたんです。そのときは勉強ひと筋で本当に真面目ないい子でした。とにかく、3年間で卒業出来なかったら日本に帰ってくるなと、きつくいわれていましたし、なにがなんでも、いい点をとって落第しないように頑張りました。

向うの国では日本人というと、ちょっとバカにしたところがあるんですよね。だから、余計に負けられないと自分にいい聞かせていました。おかげで、すんなり卒業出来ました。

私が幸わせになったらママも幸わせになるのです

――なぜ、御両親はミミちゃんをスイスの学校に行かしたのですか?

ミミ 私は動物が大好きで獣医さんになりたかったのです。お医者さんになるには、どうしてもドイツ語を勉強しなくてはならなかったのですが、ドイツだと小さな少女をひとりでやるにはあまりにもさびしいところだし、スイスだとドイツ語もフランス語も習えて安心だったんだと思います。でもスイスにいても、さびしくて泣いたこともあれば、おさな心に死にたいと思ったこともありました。しかし、ママも東京でさびしい毎日をおくっているのだなあと思うと勇気が出てきました。卒業したときは、なんですよね。でも不思議もう獣医さんになるという気持ちはなかったのですから…。



"ミミ・スペシャル" はミミが考案したスーパー・テクニック

――ミミちゃんのママはどんなひとですか?

ミミ あの人(ママ)はおたがいに人生を楽しもうというほうの人だと思います。私が20歳になるまではママが責任を持って面倒みなければならないし、だから、どんなに私にうらまれようとはずかしくない教育を身につけさせようと、ママは考えていたみたいです。マナーとか礼儀についても英国の家庭教師をつけて、私に勉強させたみたいです。

――いいですね。ミミちゃんはいいママを持ってラッキーですね。

ミミ ええ、ラッキーです。ママのような生き方をしてみたいです。ママは私のために生きているのです。私が幸わせだったら、ママも幸わせなんです。だから、私は思いきり幸わせになって、ママに親孝行しようと思っています。

――今日はどうもありがとうございました。

愛するママとTVで共演。(オールスター家族対抗歌合戦での一コマ)

……と、僕は勝手に決めつけている。

「あんなミミが何故チャンピオンに……」との向きも多い。だが、猪木がスーパースターにジャーマンを決めた時に何故「やった!」という会心の笑みを漏らしたのか? 何故ミミがタイトル奪取の瞬間に涙を流したのか? そこまで見てやることがプロレス・ファンとしての優しさであり、思いやりであり、最も大切なことではないだろうか。

以前、ジャッキー佐藤とマキ上田が引退を賭けて対決した時、ミミはジャッキーのセコンドに付いていた。その時、ミミは「折っちゃえ!やっちゃえ!」という容姿とは不釣合な野蛮な言葉を吐いていたという。プロレスラーとしては当り前のことだろうが、ミミのような美女が、あのような端(ハシ)たない? 言葉を吐くことに対して、僕は快感を覚えずにはいられない。

●ブラック軍団三代目の〝首領〟 **デビル雅美**

「決して選ばれた人間ではなく、本当は捨てられた人間だったんです…」

女子プロレスにおける悪のイメージは従来、相手をかきまわす玉砕殺法が主流だった。だが時代が、デビル雅美に革命を起こした。恵まれた巨体から突進する脅威のパワーと計算し尽くされたラフ・バウト。木刀という〝凶器〟を一つの技のように使いこなすクレバーなブレーン。何もかもが変わった。ビッグ・インタビューのパートⅢは、デビルが悪としての心境を切実に語ってくれました。

（インタビュアー・川尾宏）

「池下さんの下なら、勉強しても損はない」

——最近、木刀による過激な攻撃が、すっかりトレードマークになりましたね。

デビル 悪としての個性開眼というか、今までと違うイメージへの脱皮を考えていましたからね。おかしなもので、木刀を持ってリングに上がると拍手が湧くんです。プロとして浸透したことは嬉しいことですね。でも、試合の中で木刀を使うタイミングというのは、すごく難しいんですよ。この前もミミさんの指を折ったし、使っていて自分自身、恐ろしくなることがあります。

——あなたがリーダーとなり、ブラック軍団の顔ぶれもガラリと変わりましたね。

デビル これまでは、池下さんとかマミさんなど比較的体の小さい人が多かったけど、今、小さいのはヒロエ（ワイルド香月）ぐらいで、ユウ（マスクド・ユウ）にしてもアウ（松本香）にしても80キロ以上ありますからね。だから、体に釣り合うパワーと迫力を出さなくちゃならないので私としては責任重大ですよ。

いままで〝悪〟というと、ただ憎まれるだけだったけど、それだけでは意味がないんじゃないかと思うんです。人間には誰しも、悪の本能みたいなものが先天的に存在しているでしょ。それをうまく掴み取って、客に何かを感じさせるようなスカッと発散できるものを作っていきたいですね。

——こうして話していると、とても説得力があるし、素顔は悪とはほど遠いですね。

デビル 自分の心のスミに憎まれたくないと思う気持ちがあるのかもしれません。そうそう、私はデビューした当時はベビーフェース志向だったんですよ。本来、自分の持っている正義感が好きだったし、それをリングでも表現できたらなぁと思っていました。でも、あの頃、池下さんの試合を見るたびに、そんな気持ちが徐々に変わっていきました。この人の下なら勉強しても損はないと思うようになったんです。

——池下から、どんな点を学びとりましたか。

デビル 池下さんは、普段は本当に無口で存在感がないぐらい大人しい人なんです。それがリングに上がると人が変わったように、自分の人間性まで変身させられるんですよ。本当に仕事に徹した人でしたね。

私は、グアム（55年9月）で池下さんと初めて対戦したんですけど、まるでデビュー戦のようにあがってしまいました。何か目に見えない〝恐怖〟を感じるんですよ。ベビーフェースの気持ちが痛いほどわかりましたよ(笑)。それほど池下さんには不思議な〝神通力〟があるんです。

——話は変わりますが、レスラーになることには、どんな決意がありましたか。

デビル 決意といえるような、つき詰めたものはなかったです。学生生活もマンネリ化してきた時期だったし、最初はほんの好奇心からでした。だからオーディションに受かることは絶対にないと思っていたし、東京見物のつもりで上京したのです。私はその頃、ものすごく太っていたので体重を偽って応募しました。あまり太っていては規定にパスしないと思ったか

ミミを木刀でメッタ打ち。この猛攻でＷＷＷＡシングル挑戦権を獲得（57年３月・戸田）

らです。

ところが、合格してしまったんですよ。でも合格したことで、その時初めて〝この道〟でやり抜こうと決意しました。

——入門したての頃、一人で黙々と練習していた姿を、よく覚えていますよ。

デビル 自分でいうのはおかしいけれど、同期の中では人一倍練習しましたね。特にプロ・テストに受かるまでは必死だった。

「天神マサミには一番、愛着を持っている」

——あなたは改名するたびに大きく成長していますが、最初に本名の高橋雅美から天神マサミに変わりましたね。

デビル 自分でも知らないうちに変えられたので驚きましたよ(笑)。会場に着いてメンバー表を見ると私の名前がないんですよ。てっきり休みだと思っていたら〝天神マサミ〟になったといわれたんです。でも、この名前は一番、愛着を持っているし、今でも新人たちは〝天神さん〟と呼んで親しんでくれてますよ。

——天神マサミからデビル雅美になって大きく飛躍しましたね。

デビル 私としては変えたくはなかったのですが、姓名判断で〝天神マサミ〟では、ある一定の地点までいくが、それ以上昇ることはなく下降する一方だといわれました。だからブラック・デビルから取って〝デビル雅美〟に改名したのです。私は、いつも〝デビル(悪魔)〟になりきれるように自己暗示をかけています。

池下との試合から〝悪のイロハ〟を学びとった(55年9月・グアム)

そうすると自然のうちに私の体中に〝デビル〟が乗り移ってしまうんですよ。でも名前負けしているかなぁ(笑)。

——そんなことはありません。あなたの不敵な笑いをみると本当に〝デビル〟を感じますよ。今、とても充実していますか。

デビル 私は内面的に弱いところがあるので、もっと精神的にズ太くならなければと思うことがあります。そんな意味でもリングでは神経を集中させることを心掛けています。結果的には今、いい状態ですけど……この仕事をしていると、神経が仲々休まらないんですよ。最近になって、何でも打ち明けられる友だちがほしいって、よく感じますね。選手以外の友だちをですよ。

——毎日がハードワークだから大変でしょう。

デビル 仕事場では、どうしても自分を作ってしまいますね。仕事に対しては妥協しない方だし、他人に対しツッパっていないと、この世界では生きていけませんよ。自分でも知らないうちに、2つの顔を作っていますね。だから、自分の部屋でテレビを見たり、カセットを聞いている時間が、自分に戻れる大切な部分になっています。

「私はこれでも、意外と古風な女なんです」

——女子レスラーという立場を離れて一人の女性に戻った時、どんなことを考えますか。

デビル 人間として芯のある〝女らしい女〟になりたいですね。それには、炊事、洗濯といった家事はもちろん、男の人を助けて心の支えになれるような内面的な優しさがなくてはダメですね。私はこれでも、意外と古風な女なんですよ(笑)。そういう素直な気持ちになれるような人が早く現われることを待ち望んでいるのですが……そんな人ができれば、私は献身的に尽くすだろうし〝女〟として魅力的になるとともに仕事に対しての責任感が大きくなります。何もかもベターになるんですよ。トミさん(トミー青山)の家庭なんか理想的だなぁ。

——デビルにとって恐いものはありますか。

デビル 人間が恐いですよ。世の中すべて人間で形成されているので、人間って偉いけど恐いと、つくづく思いますよ。特に人に裏切られた時に、そう痛感しますね。

デビルの頼もしき(?)悪の子分たち

——あなたは、まだ4年足らずでもうベテランの部類に入ってしまいましたが、自分の新人時代と比較して今の新人はどうですか。

デビル 私を含めてリミちゃん(ジャガー横田)やミミさんがここまでくると誰が想像しましたか。私たちは決して選ばれた人間ではなく、本当は捨てられた人間だったんです。踏まれて、踏まれてきた、いわば叩き上げなんですよ。今の子は現代っ子すぎて、緊張することを知らないし、礼儀に欠けていますよ。それに全然、練習をしないんです。今の立場に満足してるんですよ。自分のやるべきことをもっと深く考えて、目標のために一生懸命やってほしいですね。私だってまだ若いけど、考え方が根本的に違いますよ。

——最後にズバリ、待望の横田への挑戦が正式決定(7月19日、東京・大田区体育館)しましたね。

デビル 挑戦できることは、自分が認められた証拠であり、とても光栄です。でも本心をいえば、私はまだ世界へ挑戦する段階じゃないと思うのですが……過去のチャンピオン、例えば佐藤さん(ジャッキー佐藤)なんか見ると、私など、まだまだ半分も達してないんですよ。だから実力に見合ったタイトルが、その証しとしてほしい気持ちはありますね。だけどチャンスというのは、そうそうあるものじゃないし、この機会を私のプロレス人生における大きなステップにしていこうと今、思っています。

ライオネス飛鳥 徹底比較！

昨日・今日・明日

ライオネス飛鳥

2人のライバル関係は、一昨年（昭和55年）暮れに行われた新人王決定トーナメントから始まった。それは、その年の春入門し、同期期にデビューした2人にとって初めて優劣がつく場であった。

その年…トーナメント参加者は11人いたが、関係者は〝本命はトモしかいない〟と答える人が圧倒的で、その風貌や直線的な試合の印象は、当時円熟期にあったジャッキー佐藤と似ており、実力も抜群だった飛鳥は、間違いなく将来のエースに思えた。この頃の大森は、ボディーシザース・ドロップが唯一めだつだけのレスラーだった。

さて、決勝戦には大方の予想通り大森と飛鳥が争うことになった。12月16日、大田区体育館である。試合は極度に緊張した大森が「絶対に勝つんだ」精神の飛鳥に完敗。フィニッシュ・ホールドは足4の字固めだった。だが、敗れた大森のとてつもなくサワヤカな笑顔は、彼女の明るい未来を暗示しているかのようだった。

翌年1月、後楽園ホールで、飛鳥は先輩の川上法子を下し、空位だった全日本ジュニア選手権を獲得。3月には千葉で高階由利子に防衛。向かうところ敵なしだった。

だが5月、ついに土がついた。大宮での全日本選手権王座決定戦で当時上昇気運に乗っていたデビル雅美と闘い、地元のファンの声援にも答えられずフォール負け。

「悔しかった。でも今思えば、あのとき負けたから、私は自分をゆっくり成長させる決心がついたのです」

一方の大森は、その後大きなチャンスは訪れなかったが、11月の沖縄大会でミミと組んでナンシー、堀組に勝って世界タッグ王座を獲得。この時点で飛鳥は初めて大森に抜かれた。「でも本当は同期の仲間と同じように、最初はジュニア選手権から目指して一歩一歩、歩んで行きたかった……」

そして飛鳥は今年1月、2度の防衛を果たしたジュニア選手権を返上した。それはさらに飛鳥が上のベルトを狙うための決意だった。

私が2人に取材して感じたことは、どちらも大変に素直なこと。そしてナツコは自分をきれいに見せることを意識し始めた女の子、トモは試合のクールなイメージとは違う、ホットで純真な女の子だった。

そしてレスラーとしての気の持ち方は、はっきりと違っていた。

現在、世界タッグ王者の大森が「世界シングルを必ず取るとは言わないまでも、何とか今のベルトを守っていきたい」と消極的に語れば、飛鳥は「いつか必ず横田さんを倒し、世界シングル王者になる！」と明言するのである。

最近の試合を見ていると、大森は自分を何とか成長させようと言うより、現状維持で精一杯のようだ。しかし飛鳥は大森を抜き返そうと必死だ。このプロレスに対する執着心の差は、今リング上の試合にハッキリ現われている。

のんびり屋で出遅れたが急にトップに踊り出た大森と、急成長しながらも途中でスランプに落ち込み、いま再び上昇しようとしている飛鳥。この2人のライバル関係は、どちらかが引退するまで続いていくだろう。　（江夏　純一）

大森ゆかり

① レスラーを目指した動機は？
父が格闘技好きで、中学の頃から「レスラーになれ」と奨められていたし、自分でも向いていると思い、高3の時に決心しました。

② 主なスポーツ歴を教えて
小学校の時1年間、それから高3になって再び柔道を習い、その年の北海道女子柔道選手権大会65キロ以上で準優勝しました。

③ 少女時代の思い出
小学校での授業中、父は私を車で迎えにくると早退させ、となり町の相撲大会に出て優勝したことがありました。この時何度も勝ったけど、ひとりだけもの凄く大きな中学生の男がいて、その子に負けたのがくやしかったですね。私は8歳の時、100キロを超す父をおぶれたし、11歳の時には父と母と弟の3人を背負って立てたんです。でも普段はおとなしい子でした。

④ 兄弟（弟）との思い出
よく弟と取っ組み合いをして、弟は足の骨を折っていたらしいんです。でも私は覚えていないんですよねー。

⑤ 印象深い試合を一つ挙げて。
今年1月4日のタッグ王座防衛戦(対デビル、香月組)。この時の私は本当に必死でした。

⑥ プロレスって面白い？
面白い。

⑦ それは何故？
プロレスは1人ではできない。対戦者がいて初めて成り立ち、頭を使うほど、いい試合ができる。

⑧ プロレスって痛い？
痛い。ロープで首を締められると、痛くて涙が出てくる。

⑨ レスラーにならなかったら？
就職が決まっていた札幌パークホテルで平凡に勤務していたはず。

⑩ あこがれのレスラーは？
ジャンボ宮本さん。

⑪ 貴方のライバルは？
同期の仲間全員。でもトモを新人王戦以来少し意識し始めたかな。

⑫ 貴方にとってプロレスとは？
職業です。

⑬ 聞いて笑えるお互いの悪口
トモは人にイタズラしようとして自分がコロぶおっちょこちょい。それに一見ボーッとした感じで、舌っ足らずなので「天才バカボン」に出てくるレレレのおじさん「レレレのレー」と呼ばれている。

⑭ 男性が弱く見えませんか？
そんなことはないです。やっぱり男の人には頼りたいです。

⑮ もし好きな人ができたら？

ザ・ライバル 大森ゆかり＆

トモとナツコの素顔は明るさいっぱい

プロレスはやめたくないけど、その時はきっと凄く悩むでしょう。
⑯ 普段の服装は？
ラフなかっこう。ハマトラとかは私にはだめです。
⑰ ショッピングは何処へ？
新宿マイシティ、上野ABAB。
⑱ お化粧の時のポイントは？
目です。
⑲ コスチュームを選ぶポイントは？
かわいいもの。色は赤かピンク。
⑳ きらいなものは？
ネズミ。食べ物ではつけもの。
㉑ 好きな音楽は？
サザン・ASの「愛しのエリー」
㉒ 最近読んだ本は？
「海峡物語」
㉓ 最近見た映画は？
「ブッシュマン」。でも、みんなが笑っても私は全然笑えなかった。
㉔ 好きなTV番組は？
「おじゃまんが山田くん」
㉕ 好きなタレントは？
大原麗子。
㉖ もしダンナが浮気したら？
本当はイヤだけど、がまんする。でも、そっとやってほしい。
㉗ 人生で一番嬉しかったことは？
女子プロに入れたことです。
㉘ 好きな言葉は？
「努力」「七転び八起き」
㉙ 貴方の宝物は？
両親です。
㉚ 最後にファンにメッセージを。
ひとりでも私を応援してくれる人がいる限り頑張ります。

大森ゆかり

大森ゆかり		ライオネス飛鳥
同じ	本名	北村智子
昭和36年12月21日	生年月日	昭和38年7月28日
北海道札幌市	出身地	埼玉県蓮田市
創成高校卒	最終学歴	県立蓮田高1年中退
父・重一郎(45) 母・敏　子(40) 弟・豊　　(17)	家族構成	母・幸子(47) 姉・静子(19)
55年7月(苫小牧) 伊藤浩江と引き分ける	デビュー戦	55年5月(大宮) 奥村ひとみに勝つ
WWWA世界タッグ	タイトル歴	全日本ジュニア
165センチ、77キロ	身長、体重	170センチ、70キロ
98－78－98	スリー・サイズ	98－70－100
水平落とし ボディーアタック	得意技	ジャイアント・スウィング ブレーンバスター
ナッちゃん	ニックネーム	トモ、レレレのレ〜

ライオネス飛鳥

① レスラーを目指した動機は？
ビューティ・ペアを見て、それまで格闘技に無関心だった私が、レスラーになろうと考えました。中3の時には確かに決心していた。
② 主なスポーツ歴を教えて
中3でフジTVの企画の女子ソフトボールチーム、ニューヤンキースの練習生に合格。でも私が入ってからすぐ、チームは解散してしまいました。
③ 少女時代の思い出は？
私が引っ越しのために乗った電車が駅をたつ寸前に、仲良しの男の子が手紙をくれました。それには「君が好きだ」って書いてありました。嬉しかったです。その子は今でも九州に住んでいて、私の試合を応援に来てくれたこともあります。
それから子供の頃の私は肥満児だったのです。中3の時にレスラーになるために必死にやせました。
④ 兄弟（姉）との思い出は？
子供の頃はよくケンカをふっかけていたけれど、いつも姉の方が一枚上手でうまくかわされていました。今は看護学校に通う、やさしい姉です。
⑤ 印象深い試合を一つ挙げて。
地方でナッちゃんと20分時間切れで引き分けた試合。いい試合だったと自分で納得できたんです。
⑥ プロレスって面白い？
面白い。
⑦ それは何故？
口で説明するのは難しい。とにかくまず私達の試合を見て下さい。
⑧ プロレスって痛い？
痛い。投げられれば痛いし、叩きつけられれば痛い。
⑨ レスラーにならなかったら？
レスラー以外は考えられません。
⑩ あこがれのレスラーは？
タイガーマスク！
⑪ あなたのライバルは？
大森ゆかり。でもライバルの反面よき相談相手でもあるし、協力しあって一つのもの（タッグ・タイトル）を取りたいとも思います。
⑫ 貴方にとってプロレスとは？
今の私には生きがいです。
⑬ 聞いて笑えるお互いの悪口
食事の時、私の食べている物を「これ、おいしいよー」と言って、はしやフォークに刺してナッちゃんの目の前にちらつかせると、ナッちゃんは手づかみでそれをパッと取り、口の中へ入れてしまう。
⑭ 男性が弱く見えませんか？
うーん！ 見える方が多いです。
⑮ もし好きな人ができたら？
今ならプロレスを取ります。私はまだレスラーとして上昇したい。
⑯ 普段の服装は？
スカートははきません。ダボダボのGパンとトレーナーが好き。
⑰ ショッピングは何処へ？
原宿が多いです。
⑱ お化粧の時のポイントは？
紫のアイシャドー。
⑲ コスチュームを選ぶポイントは？
ブルーが好き。デザインは直線的なものが多いです。
⑳ きらいなものは？
いもむし。食べ物ではしいたけ。
㉑ 好きな音楽は？
オフコース「YES・NO」
㉒ 最近読んだ本は？
「飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ」
㉓ 最近見た映画は？
「飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ」
㉔ 好きなTV番組は？
「笑ってる場合ですよ」など。
㉕ 好きなタレントは？
田原俊彦、渡哲也、薬師丸ひろ子。
㉖ もしダンナが浮気したら？
絶対イヤ！ 即離婚する。
㉗ 人生で一番嬉しかったこと。
プロレスラーになれたことです。
㉘ 好きな言葉は？
「根性」「冬は必ず春となる」
㉙ 貴方の宝物は？
自分が宝です。それに母。
㉚ 最後にファンにメッセージを。
いつか、応援して下さる人に必ず応えられるようなレスリングをします。見ていて下さい。

BP時代のサバイバル・・・ナンシー久美

現在〝無冠〟のナンシー久美が4・7横浜で〝昇龍〟の勢いにあるデビル雅美と引き分けたことは〝ナンシーは死なず！〟をファンに印象づけた。ＢＰ時代のサバイバル（生き残り）といわれるナンシーが、いま、どんな気持ちで闘っているのか…その〝周辺〟を洗ってみた。

この写真は、タッグチームにおけるナンシーの〝役割〟を見事に表現している。上はビクトリア富士美

BP（ビューティ・ペア）時代最後の〝サバイバル〟となったナンシー久美は、いつの間にか現役最古参となってしまった。先輩のジャッキー、マキ、池下、同僚の富士美、後輩のトミー、ルーシーらBP時代の〝遺産〟が次から次に去っていく中、ナンシーだけが、なぜか生き残ったのである。

ナンシーほど、大きなチャンスに恵まれた選手はいない。そして彼女ほど期待を裏切ってきた選手もいない。

ここ数年、いつも2番手、3番手の座をキープしていた。後輩のトミーや横田、そしてミミまでもがシングル王者になった。ナンシーは、ただ指を食わえて見ていたわけではない。彼女にシングル王者は〝重荷〟なのである。もっと気楽な立場でプロレスに接していたいのである。だから1対1で闘うシングルマッチよりもタッグマッチが得意だ。事実、ジャッキー、ルーシー、堀とパートナーを初め富士美、ルーシー、堀とパートナーを代え4度もWWWA世界タッグ王座を獲得している。

「私は古いタイプのレスラー」とナンシー自身が言うように、ミミや横田に見られるスマートな現代感覚はない。何か、背後に重い十字架を背負っているようで明るさが、もう一つ伝わってこない。

かつて、金子久美子という本名でファイトしていた頃は、今の立野記代のような、どこかいたいけな少女だった。阿蘇しのぶとのデビュー戦では、ほとんど手が出せぬまま痛めつけられ、プロレスの厳しさをイヤというほど教えられた。その阿蘇には、イスで鼻の骨を折られた苦い思い出もある。

かつては〝怪力No.1〟として名を売ったが…

当時は〝首の引っかからない〟ジャンピング・ネックブリーカードロップが唯一の〝必殺技〟であった。首を引っかけてしまったらあまりにも危険で難度の高い技だ。これはナンシーの人柄が出ている証拠でもある。

正統派レスラーに伝統的に受け継がれている〝受け〟のレスリングはナンシーの信条であり、その焦れったさに観客は、やきもきしたものだ。

新人時代から現在に至るまで一貫したレスリング・スタイルと、決してトップに上がれないことがナンシーの選手寿命を長くしている原因なのかもしれない。〝花の命は短くて〟の例えどおり、トップに昇りつめたら下ることしかない。丈夫で長持ち、ナンシーは最もレスラーらしいレスラーである。

ナンシーのテーマ曲である「アイ・ラブ・ナンシー」が会場全体に流れると、なんともいえない哀愁を感じてしまう。やるせなく、切ない屈折したメロディにさえ思えるのだ。そんな人間臭さが見る側に〝不思議な共感〟を与えるのである。人生に疲れたような、けだるさが何ともいえないのだ。

ファンサービス旺盛の女子レスラーの中で、ナンシーの取材嫌い、サイン嫌いは有名である。特に会場などでサインを求められると露骨にイヤな表情を見せる。別に人が悪いわけではないし、むしろお人良しなのだが、素顔のナンシーに対するファンの印象度はきわめて悪い。この辺がもう一つファンを惹き付けられない理由なのかもしれない。

4月7日、地元・横浜の試合では〝悪のクイーン〟デビル雅美を相手に大乱闘の末、引き分けるなど、まだまだ健在ぶりを示している。

〝女子プロレスのストロング小林〟になってしまったと酷評も聞かれるが…幅広いファンに愛されるナンシーは、女子プロレスの貴重な財産ではある。

試合前の控室で笑顔を見せるナンシー

●81年度新人王●

長与千種に魅せられた 超フィーバー狂

女子プロレス・ファンには、一般のプロレス・ファンに負けず劣らぬ〝狂的マニア〟が多い。彼(彼女)らは、女子プロレスというより〝女子レスラー〟に深い視点を置いており、思い思いの独創的な世界を形成しているのである。

ここに登場する渡辺誠一さんは、長与千種に魅せられた…まさに〝超フィーバー狂〟であろう。

長与と並ぶ〝後援会〟会長の渡辺誠一さん(右)

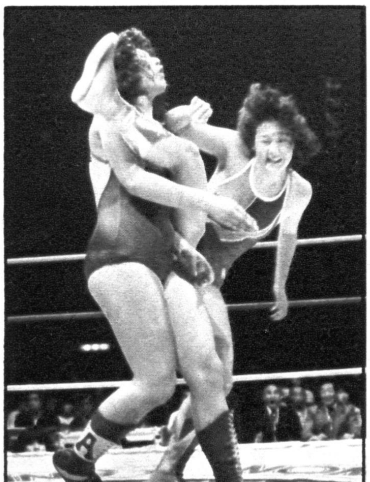
長与千種といえば、81年度新人王であり、いま最も乗っている注目のホープである。〝女・必殺拳〟といわれるシャープなカンフー・キックは彼女の最大の〝見せ場〟で、若手らしからぬ強烈なアピール度でグングンのし上がってきた。

その長与に暖かい愛情を注ぎ、精神的にも影で支える存在となっているのが、福島にある長与千種後援会だ。

会長の渡辺誠一さん(21歳)は福島信用金庫事務部システム開発課に勤務する銀行マンである。銀行員とプロレスとは面白い組み合わせだが、高校時代はボクシングでライト・フライ級の選手だったこともあり、根っからの格闘技マニアなのだ。

プロレスは、BI全盛期の44年頃からのファンであり、女子プロレスもトミー青山の〝立体殺法〟に魅せられていた一人だった。トミーの突然の引退で、一時プロレスに冷却期間を置いていた時期があった。誰でもそうだが、あまり長く見ていると、プロレスから少しだけ逃避したくなることがあるのは、ファン心理といえよう。

そんな時期、ハッと目がさめるような刺激を与えてくれたのが、長与のファイトだった。元々、血の気の多い渡辺さんだけに目の前に長与が登場したことは、何よりも衝撃的だった。



カウンターで放つ後ろ回し蹴りは最大の見せ場

相手の出足を止める前蹴り。この闘志をムキ出しにした表情が魅力の一つ

早速、渡辺さんは、私設ながら後援会を結成…応援を中心とした活動を始めたのだった。

福島県の県北地方は、公務員比率が7割と高くプロレスに限らず興行の採算が合わないところだ。あの松田聖子でさえ、郡山市で歌謡ショーを開催した際は閑古鳥が鳴く状態だったという。そんな事情もあってプロモーターも福島の興行は敬遠しがちだった。

後援会を結成したものの、本拠地である福島で興行が行われなければ、その存在も〝有名無実〟なものでしかない。当然、会員からも「なぜ、福島で試合をやらないんだ」と突き上げられる始末。どうにも体裁がとれなくなった渡辺さんは、東京の全日本女子プロレス本社に東北地区の日程を聞き出し、福島市体育館を後援会名義で予約したのである。もちろんプロモーターには無断で申し込み、使用料15万円を自費で払い込んだ。事後承諾の形で、強引に興行開催を頼み込んだのであった。

プロモーター側の条件として、前売券の販売は元より、ポスター貼りや宣伝カーによる宣伝、宿舎の手配などを後援会で全部賄うというものだった。まったく興行に対して〝ズブの素人〟が、ただ単に〝長与の試合を福島で〟という熱意だけで開催にこぎ着けたのである。

「これで、もし客が入らなければ、2度と福島に女子プロレスは来ない」後援会は解散の覚悟でがんばった。会員各3枚ずつの割り当てで、前売だけで500枚を捌き、当日は実数1800人と、まずまずの入りで成功を収めた。それは56年9月21日のことである。

この頃、長与は体調不良のため一時は辞める寸前までいった。だが、後援会の励ましにより見事！立ち直ったといっても過言ではないだろう。

現在では、会員数160名と大規模になった。福島の女子プロレス・ファンで長与の名を知らない人はいないほどだ。「福島では、ミミや横田じゃなくて、長与が主役ですよ。長与なしでは、興行が成り立ちません。今後、女子プロレスが再びブームを起こすとしたら、長与抜きでは考えられない」と、長与に対する熱い思い入れはまさに〝神がかり〟的だ。

後援会には、関連企業10社がスポンサーとなりバックアップしてくれている。これらの付き合いのため、飲めない酒も飲めるようになったという。

福島地区での試合がある時は、私設マネジャーのごとく、ラジオ局やスポンサーへの挨拶回りで忙しい。

「まだまだ子どもっぽさが抜けてないけど、最近ずいぶん自覚が出てきましたね。どんな調子が悪くても〝いい試合〟をしたいと意欲満々です」長与の話をする渡辺さんは、とても楽しそうだ。今年最大の行事は8月10日、福島市体育館における2度目の興行開催。今から頭がいっぱいだそうだ。

元担当記者"兼"テレビ解説者が綴る女子プロレスの思い出

彼女らの屈託のない明るさに女子プロの"明日"を見た!!

僕のこれまでの人生（ちょっとオーバーかな?）の中で、女子プロレスの思い出というのは、断続している。

この春までデイリースポーツ運動部のプロレス担当記者として女子プロレスの取材やフジテレビの中継で解説者（実況の志生野温夫アナウンサーには"プロレスのお兄さん"という愛称を頂いた）として割とこの4年間、深く関わりを持ってきた。この間が一番僕にとって最も長くて深い女子プロレスの思い入れがあり、言葉に出して言うにはまだ十分にこなしきれない部分がある。が、それを許してもらって女子プロレスの思い出をたどってみると——。

（佐藤匠市）

志生野アナ(左)との呼吸もバッチシだった女子プロレス解説

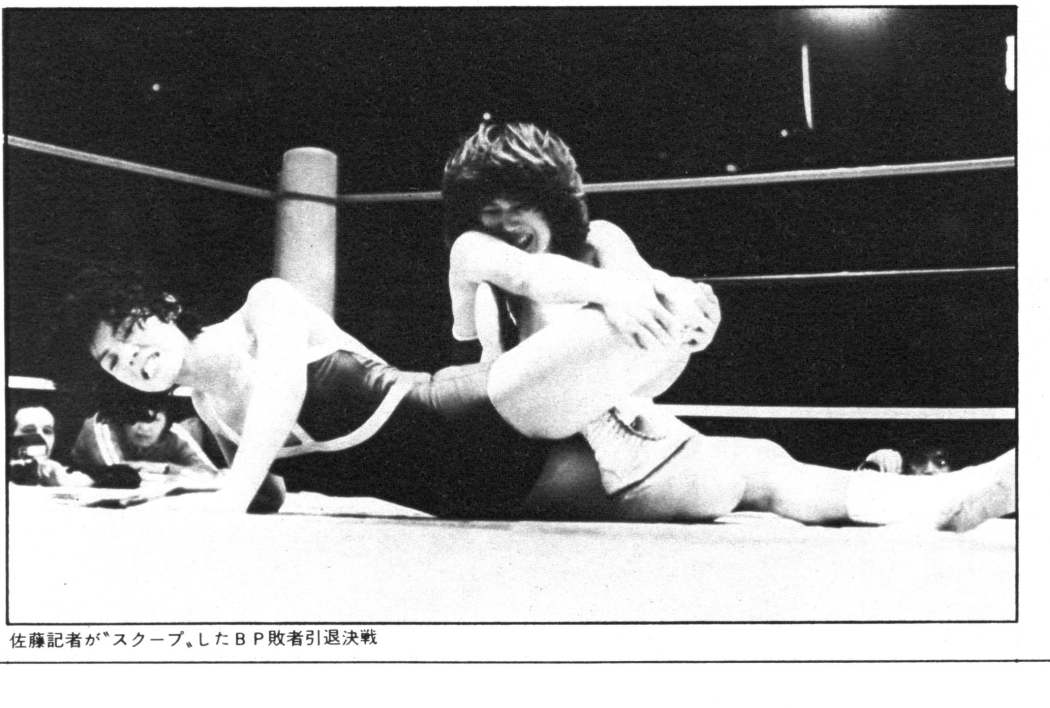
近くの空地で初めて見た女子プロ興行

一番初めの出会いは、関西地方で夏に行われる地蔵盆のころであった。日本プロレス界の祖といわれる故力道山が空手チョップで大人はもちろんのこと、子供たちまで興奮のウズに巻き込んでいた。そんな折、近くの空地に女子プロレスの興行がやってきた。力道山をもじった「力道子」（ちからみちこと呼んだのか?）がメーンエベンターだったようだ。僕は遠くで、または近くで自在に見た記憶がある。

雨後のタケノコのように女子プロレスの"団体"が出来、リングネームも男のスターの名を借用したものが多かった。全日本女子プロレスの松永高司社長の妹さんも現役時代、人気横綱の吉葉山から「吉葉礼子」と名乗っていたという。

それから中学に入って色気づいたころ、大阪・梅田のキャバレーの前に"女子プロレス"という立て看板を見つけた。スポーツというより昨今流行したドロレスのようなブラジャーはずしや小人プロレスラーとの変則マッチなどゲテものが多かった、と後で聞いた。

"スポーツ"として再度出会ったのは、大学に入ってから。東京12チャンネル（現テレビ東京）の中継で"小畑千代"という男性的な女子プロレスラーがいて必殺技つり天井（ロメロ・スペシャル＝以後、マッハ文朱も使ったが、マキ上田からナンシー久美へと受け継がれている）を知った。当時、日

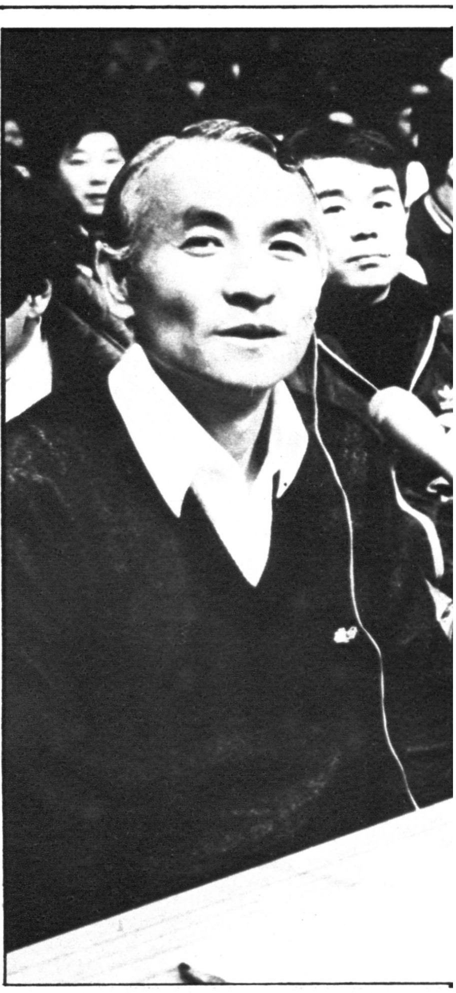

佐藤記者が"スクープ"したBP敗者引退決戦

本プロレスの馬場、猪木が最強を誇り、国際プロレスの外人レスラー、B・ロビンソンが人間風車というそれまで見たこともない華麗な技を披露、猪木も卍固めを開発するなど華々しかった。

そこに現在の全日本女子プロレスにつながってくる。

52年宝塚のベルサイユのばらが日本中の女子高生をトリコにしたのと軌を一にしたように女子プロレス界のスーパースター、ジャッキー佐藤とマキ上田のビューティ・ペアが突如出現した。「かけめぐる青春」という歌（お世辞にもうまくなかったが、当時のアイドル、キャンディーズやピンクレディもいい勝負だった。たのきんの歌うのもこれまたいい勝負である。が、今聞くとBPの歌はいい歌だった）を出すと、アレヨアレヨとヒットチャートに乗ってしまい、音楽祭の新人賞やあげくには、日本の国民的行事である、NHKの紅白歌合戦に出場（応援だったが）浅草の国際劇場でショーを打てば連日満員という有り様。社会的現象としかとらえようのない勢いがあった。

このころ僕は運動部記者としてではなく音楽担当記者としてBPを取材対象にしていたのである。



"BP対決"特ダネ獲得に異常な興奮

女子プロレスとの正式な関わりはこのBP人気にカゲリが出始めてきたころだった。テレビは隔週日曜の90分番組と、週1回のテレビ中継があり、隆盛を極めており、次々と出す新曲も、売れてはいた。

終わりというのは誰にでもあるが、2人から"引退"をかけた試合をやりたい、という言葉を聞いたのは53年の暮れ、ハワイ遠征の帰りの飛行機の中だった。ウスウス感じてはいたが、正式に聞いてみると、2人の話は真剣だった。もちろん特種（スクープ）である。こちらまで異常に興奮した。

54年2月、日本武道館で2度目の対決をした2人は、負ける気がなく（当たり前だ！）ガチガチの殺気走った試合を展開。対決前に腰を痛めていたマキがジャッキーにエビ固めに押さえられ、公約通り、マキは「女優になりたい」と夢を語って消えた。

思えば、女子プロレスに関わっていた間、僕は極めて多くのスター選手を見送った。

ジャンボ宮本（小柄だが、スコぶるつきの思い切りのいいファイトで魅了した）と組んでいた赤城マリ子（現在、東京・武蔵小山のスナックのママ）に始まって、上田、打倒ジャッキーの一番手と目されたトミー青山（現在一児の母）、そしてジャッキーの大物選手。悪役ゆえに"引退式"のなかった池下ユミ、マミ熊野も今の女子プロレス人気を盛り立てた忘れてはならない選手だったが、寂しくリングを去っていった。

現WWWA世界シングル王者のジャガー横田は、これら選手の中では新人として目だけがギョロギョロとしていたが、比較的期待もされず、目立たない存在だった。それだけに大型化する女子プロレスの選手の中で小柄ながら思い切りのいいファイトをする横田は気になる存在でもあった。まさか、100キロのデブのモンスターと女子プロ史上に残る流血戦を演じたジャッキーを倒すことになるとは思わなかった。

意外といえば今人気No.1のミミもそうだ。「いつ引退するか」といわれながらもシツコク生き残り、世界王座を狙うまでになった。日仏混血のミミは日英仏の三カ国語が話せる。キュートでかわいい女の子だった。頭もいい。ただ25歳を過ぎてヌードを披露したが、その"勇気"には脱帽するしかない。

「誰が出て来てもいい」と松永社長

禁酒、禁煙、禁男—。女子プロレスのタブーだが、スポーツ選手…特に女性にはよくない。初めて取材したときには、キレイごとだと思ったが、実際、このタブーを犯してやめていったり、やめさせられた選手を見た。

短い花の時期に犯してはならないことは犯してはならないのだ。誘惑に打ち勝ったものだけが、生き残っている。ミミもきっぱり(?)男を断った。

毎年の新人募集で多くの女の子が門を叩き、挫折して消えていった。が、残った者の中から希望の芽は生まれている。

大森ゆかり、ライオネス飛鳥、長与千種が若手の御三家。ふだんはピントのはずれたようなことを言ったり、ふざけ回っているのだが、意外とそれぞれ根にしっかりしたものを持っている。

先頭を切ったのは、飛鳥だったが、大森に追い越され、長与にも激しく迫られている。だれが残るのかは、女子プロレスの関係者でも想像はつかないだろう。

「だれが出てきてもいいんです。自力で勝ち残れない選手は所詮大した選手じゃないということです。そんな選手はいりません」

と、人情家の松永社長の口から聞いたときは驚いたが、それが本当のプロかもしれない。

女子プロレスは今、BP後遺症の長いスランプをくぐり抜け、再び脚光を浴び始めている。前回のBPと違ってミミ、ナンシー、横田のトロイカ方式なのが違っているようだ。

30年近い前に屋外で僕が見た女子プロレスと今のそれは、野外で興行することもあるという点ではあまり進歩がないかもしれない。だが、明らかに違うのは、選手たちの表情に後ろ暗さのないことだ。カゲリの時代に関わった僕としては、松永社長以下、首脳陣の暗い顔つきは何度も見た。が選手のすさんだ顔は見ていない。もちろん社長らがどん底でも選手に弱音を吐いていないからだろう。

BP時代からは一味も二味も違ったものになった女子プロレス。ジャッキーやマキがペチャパイだったのに比べ、今の選手はボインの子も多い。屈託のない彼女たちの明るさからは、女子プロレスはもう"市民権"を得たのでは、と改めて思っている。

現代っ子に昔の暗さや、かげりは見られない

“新人王”戦に見る出世度

“1位より2位が出世する”とデータには出たが…？

全日本女子プロレスでは、芸能界の音楽祭のごとく毎年、その年にデビューした新人の中から新人王を選出している。この大会は、メーンエベンターへの登龍門としての意義が大きく、選手がこの世界で初めて与えられるビッグ・チャンスだ。それは歴代受賞者の顔ぶれをみれば、よく理解できる。だが、フレッシュ・ギャルたちのホットな激突は、あまりにも“過激”でハードな勝負だ。彼女たちは、がむしゃらで“勝つ”ことだけを義務づけられているように感じるのである。

第1回は50年からスタート。12月6日、堺市金岡体育館で日米混血のユカリ・レンチがマキ上田をネック・ハンギングでKO。新人王に輝いた。レンチは、その後ジャッキー・ウエストとのペアでWWWAタッグを獲得したが、精神面の弱さがたたり脱落。マキはご承知のように、翌年ジャッキーとビューティ・ペアを結成、ブームの渦中の人となった。他に池下ユミ、阿蘇しのぶも出場、ジャッキーは怪我のため不参加だった。

51年は12月8日、越谷市立体育館でビクトリア富士美が金子久美子（現・ナンシー久美）をミサイル・キックからブレーンバスターで料理、新人王となる。後に2人はゴールデン・ペアを結成しWWWAタッグ王者となる。準決勝では、富士美と鋤崎真澄の“姉妹対決”も実現。

52年に入ると続々と大物新人が入門。8名によるトーナメント形式で行われ、12月17日、千葉総合運動場体育館で漆原幸恵（ルーシー加山）と冨高千賀子（トミー青山）が注目の対決。前日、風邪のため決勝戦出場が危ぶまれた漆原だったが見事、克服し30分時間切れ＝判定で冨高を下した。ガチガチのストロング・スタイルは新人王史上のベスト・バウトだ。漆原と冨高もクイーン・エンジェルスを結成しメキシコ遠征でハイ・テクニックを習得。帰国後、一気にスターダムへと駆け昇った。現世界王者の横田は1回戦で高橋真由美に敗れ去る。3位は小宮山忠子。

53年の新人王争いは、本命の佐藤ちのが姿を消し、小峯広子と高橋雅美（デビル雅美）で争われるハプニング？スタミナに難のある高橋は、軽量の小峯にいとも簡単に押え込まれてしまった。伏兵・小峯は新人王となったが、以後伸び悩みリングから去った。

この当時からだろうか“新人王になると壁にぶつかる”という妙なジンクスがささやかれた。事実、新人王より2位の方が、その後の台頭が著しかった。

54年の大会は12月9日、東京・大田区体育館で堀あゆみ（ジャンボ堀）が実力派の川上法子をあっさり破った。予想外の敗北をした川上は「新人王にならずに良かった」と語ったのが印象的だった。だが、堀はオール・パシフィック王者になったが川上は途中でプロレスを断念するなど明暗を分けた。

大会史上11名と出場最多数を記録したのが55年。決勝は12月16日、東京・大田区体育館で予想通り、北村智子（ライオネス飛鳥）と大森ゆかりが対戦。第2のジャッキー、北村が足4の字固めで勝ち栄光の新人王を獲得。2位の大森はいち早くWWWAタッグ王者となり一歩差をつけた。3位は本庄ユカリ（マスクド・ユウ）が大健闘。

56年に入門した新人は3名のため、55年組から高階由利子、長与千種、坂本和恵が再度出場。6名で争われたが、不振状態だった長与が見事再起、立野記代を得意の回し蹴りで下した。12月9日、越谷市立体育館でのことだった。新人王になって以来、長与の成長は目ざましい。だが2位の方が出世するというジンクスが生きているならば、次代のスター？は立野なのかもしれない。

年度別新人王受賞者			
	新人王	第2位	出場者数
50年	ユカリ・レンチ	マキ上田	4名
51年	ビクトリア富士美	金子久美子（ナンシー久美）	3名
52年	漆原幸恵（ルーシー加山）	冨高千賀子（トミー青山）	8名
53年	小峯広子	高橋雅美（デビル雅美）	6名
54年	堀あゆみ（ジャンボ堀）	川上法子	3名
55年	北村智子（ライオネス飛鳥）	大森ゆかり	11名
56年	長与千種	立野記代	6名

51年…富士美(右)と金子がペア結成前に対決

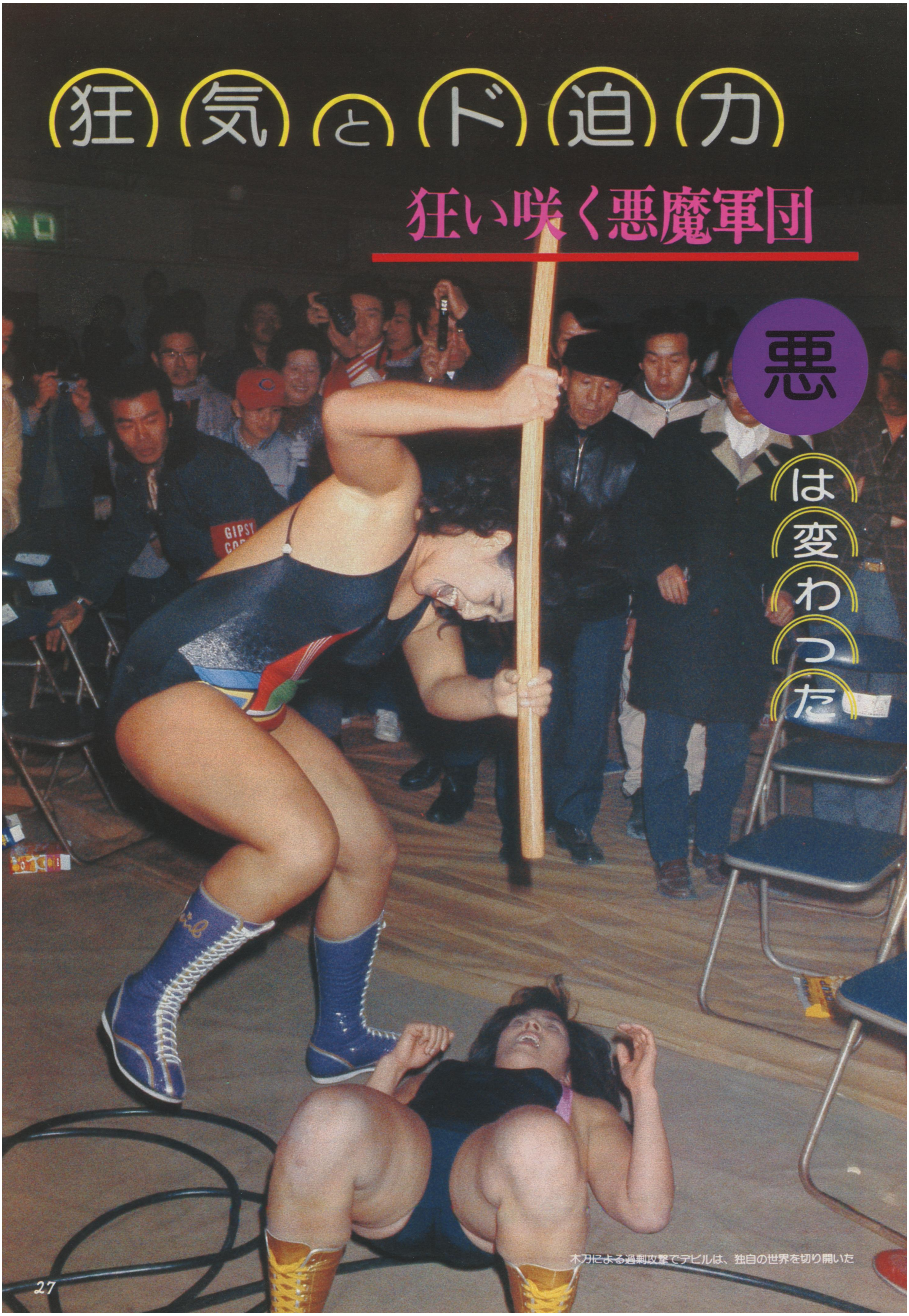
52…ベストバウトを見せた漆原(右)と富高

53年…伏兵台頭！小峯(右)が高橋雅美に勝つ

狂気とド迫力

狂い咲く悪魔軍団

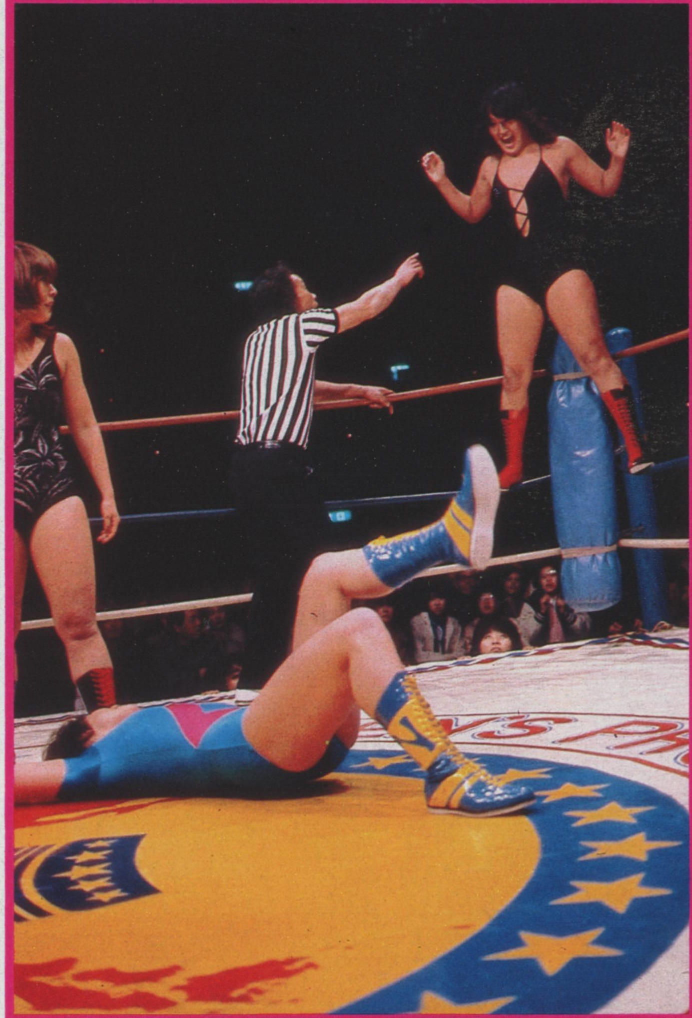
悪は変わった



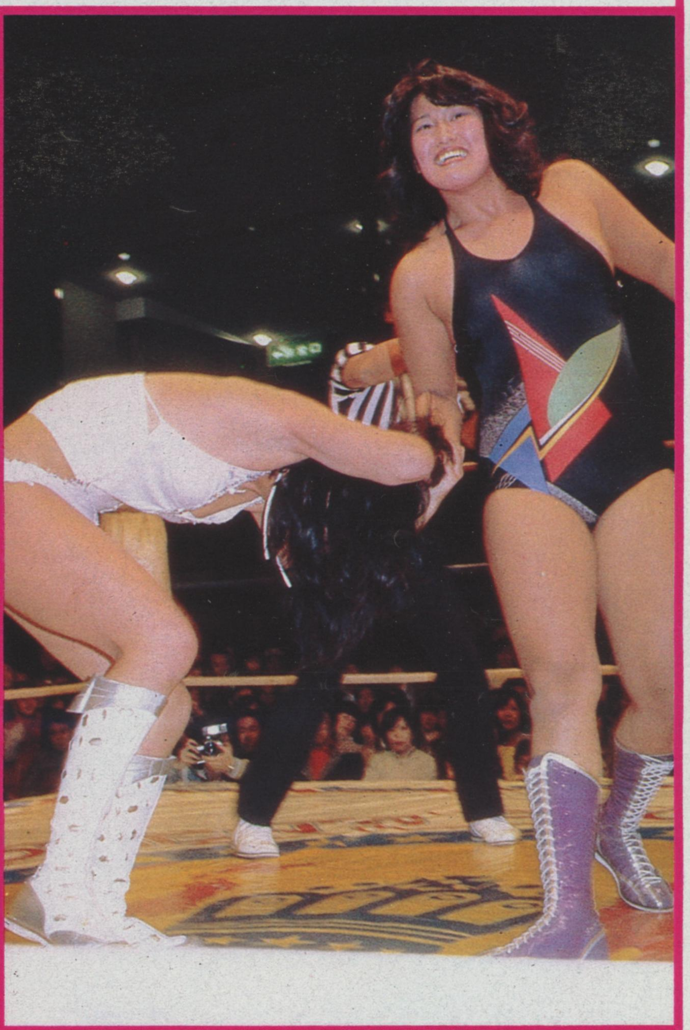
木刀による過剰攻撃でデビルは、独自の世界を切り開いた

DEVIL THE WORLD

〝悪〟って何だろう？　パワーに生きた天神マサミはパワーで終るところだった。その天神は、なぜかデビル雅美と名を変え、悪魔になった……



パワー全開！　デビルはダイビング・ヘッドバットを見事にマスター



不敵な〝デビル・スマイル〟これが出る時のデビルは異常に燃える

素顔のデビルは飾りっ気のない礼儀正しいヒト

飛鳥を踏み潰し高らかに笑う。この後、初のタイトル(全日本)を獲得、涙する

デビルに続け！ 限りない悪魔魂を…

試合巧者の香月はミミのバックを取る。２人の攻防に見せ場は多い

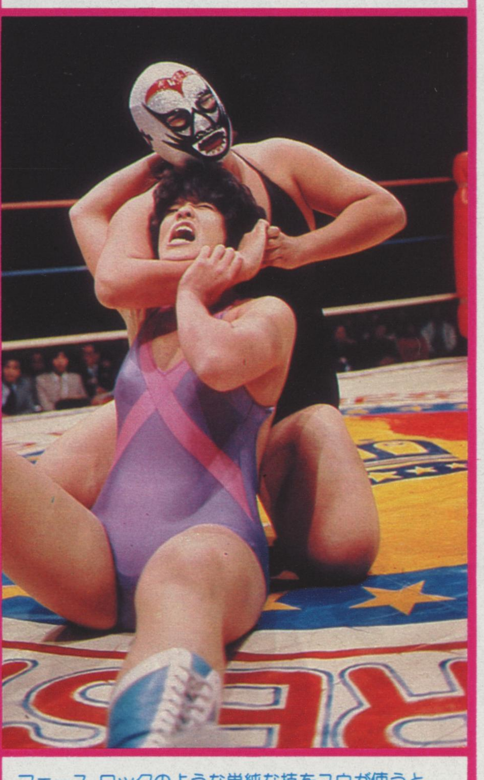
ワイルド香月

奇声を上げての表情は、まさに〝野性〟そのもの。一つ一つの確実なテクニックは、デビルの良き参謀格。だが、あまりにうますぎて迫力不足が気になる

マスクド・ユウ

太い腕、太いモモ、90キロ近い巨体……ユウは何もかもがレスラーなのだ。〝覆面取ったら、ただの人〟…そう、あの象海豹（ゾウアザラシ）のマスクがユウに〝魔力〟を与えた。女子プロで、バストよりウエストの方が太い選手。これがユウのすべてを表している。

２人がかりによる木刀での絞首刑。オーバーヒートすると〝精神〟まで変わる

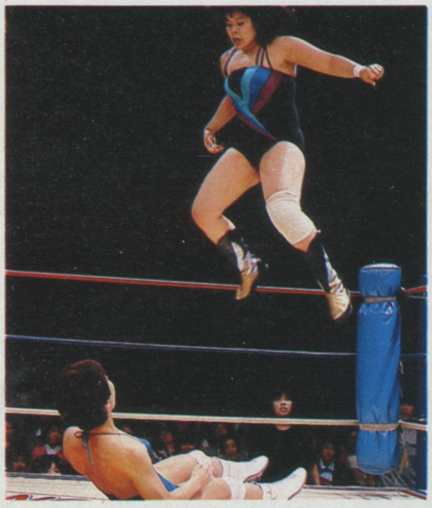


フェース・ロックのような単純な技をユウが使うと…

君は特別…　という感じさ

MONSTER RIPPER

すべてが〝ビッグ〟になったモンスター。日本で育った、この怪物は、今や世界各国で活躍する〝国際スター〟に成長した。自ら各地のプロモーターとブッキングするモンスターの生活力はもの凄い。そんな意味でも彼女は、特別なのだ。



120キロのモンスター・パワーが爆発！　この体重で落下するのだから相手はたまらない

WWWA世界シングルのベルトを肩に引っかけたモンスターは貫禄充分

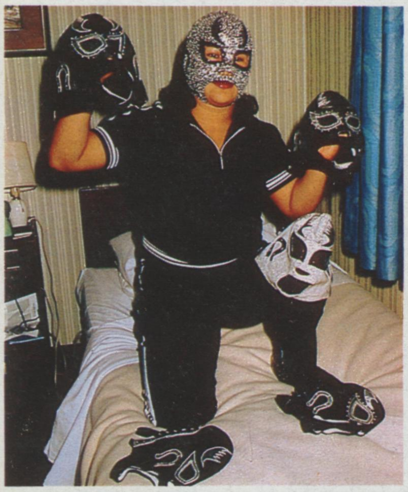
流血戦にもビクともしない強ジンな肉体が最大の強味

試合前は読書で気分転換。似顔絵入りのTシャツはお気に入りだ

個性に生きる！
外人レスラーへのラブ・コール

個性に生きる
外人レスラーへのラブコール

マスクに夢を乗せるルチャドレスたち



自慢のマスクを披露するラ・ブリオーサ。アルコン'78と結婚し、もうすぐ二世誕生とか…まさか覆面姿の赤ちゃんじゃないだろうね

メキシコといえば、言わずと知れた覆面王国。マットの花であるルチャドレスたちの中にも覆面レスラーはたくさんいる。誰しも変身願望はあるが、ルチャドールやルチャドレスは、その典型的な集団だろう。覆面を着けることは、一つの夢に通じる。奇抜なデザインは、夢の象徴だ。だから彼女たちの素顔を見てはならないし、接してはならない。

スペース時代に便乗した宇宙仮面、ラス・ギャラクティカス。I号の使うセントーンや原爆固めは、ルチャ・リブレの真髄を見せつけた

黒づくめのラ・ブリオーサ(左)とラ・ブルーハ。メキシコでも黒はルーダ(悪)を意味する。この2人は、エル・トレオの定期戦に出場するエストレジャ

〝ウルトラマン〟と〝仮面ライダー〟に変身したギャラクティカス

ニューウエーブ

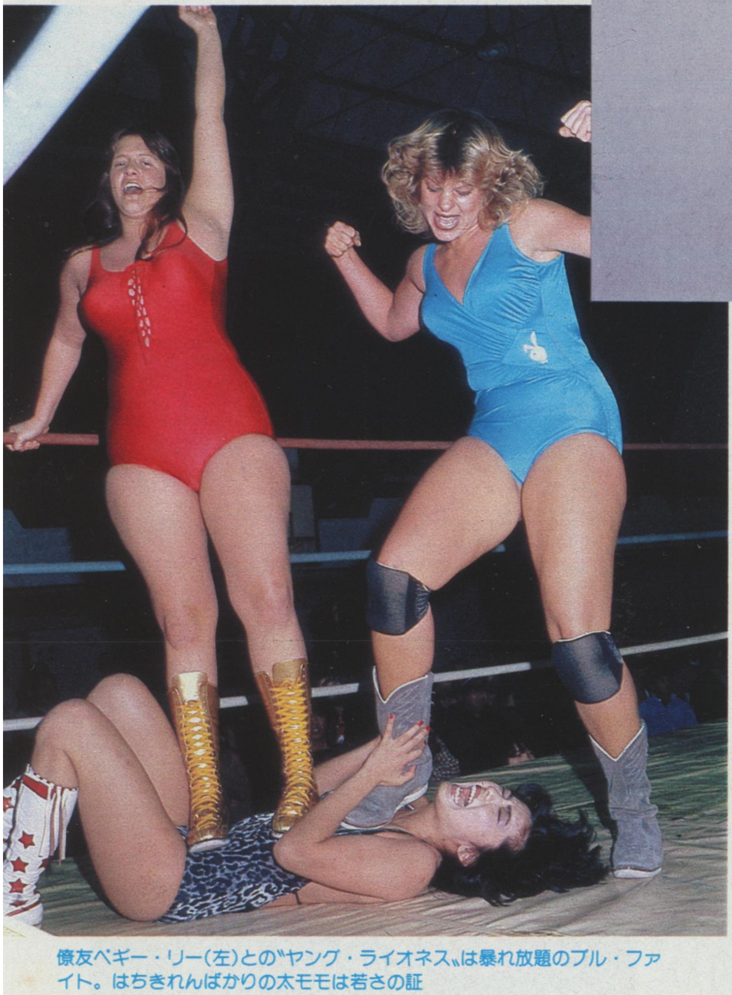
WENDI RICHTER

ウェンディ・リヒター

テキサスの自然娘…それがウェンディだ

テンガロン・ハットをかぶったウェンディの純粋な笑顔に接すると、テキサスの広い広い大草原の中で自由奔放に生きたくなってしまう。そんな野性的で、土臭さの強く残るアメリカのどこの町にでもいるような、生まれたての〝ジャスト・ナチュラル〟荒削りだが体全体を使ってのラッシング・パワーにレスラーとしての大きな可能性が潜む。彼女こそ米マット界ニューウエーブの筆頭だ。

テキサスっ子、ウェンディには〝ロングホーン〟がよく似合う!?



僚友ペギー・リー(左)との〝ヤング・ライオネス〟は暴れ放題のブル・ファイト。はちきれんばかりの太モモは若さの証

このジーンズ・スタイルと奇妙なポーズは、素朴さ丸出し

個性に生きる
外人レスラーへのラブコール

米マットちょっと変わった

SHERRI MARTEL
シェリー・マーテル

ファニー・フェースの奥に優しさを見た

①カーリー・ヘアにファッショナブル・サングラスがシェリーのトレードマーク

日本に来たことで、プロレスの楽しさを再発見したシェリー。この旅は彼女に、自信と勇気を限りなく与えた。リングのエキサイティングなフィーバーぶりも、その一つだった。帰国の日、シェリーは一つ一つの出来事を思い出すように車の中から日本の町を見つめた。じっと黙りこくったまま感傷的になったシェリー。そんな人間味あふれる素顔を愛さずにはいられない。シェリーの宝は、３歳になる愛児ジャレッド君。〝ジャレッド・イズ・マイハート〟ジャレッド君を抱くシェリーに、彼女の素晴らしき真実を見た。

カウボーイ・ハットをかぶったハンサムなジャレッド君は、シェリーの頼もしき(?)ちっちゃな恋人だ

タイガーマスクの大ファンになったシェリー。ジャレッド君へ〝虎の仮面〟をプレゼント。これぞ、まさしく〝タイガーマスク・ツインズ〟

個性に生きる
外人レスラーへのラブコール

ムーラに後継者はいらない!!

60歳に手が届こうとするムーラが堂々と世界チャンプを名乗る米国女子マット界。ムーラが女子プロレスに残した功罪は大きい。1956年に王者になって以来、この立場をひたすら守ってきた。その徹底したワンマン主義で、ムーラの王座は永久的なものになってしまったのである。だから、ムーラに後継者は生まれないし、後継者はいらない。

レイ・ラニ・カイ

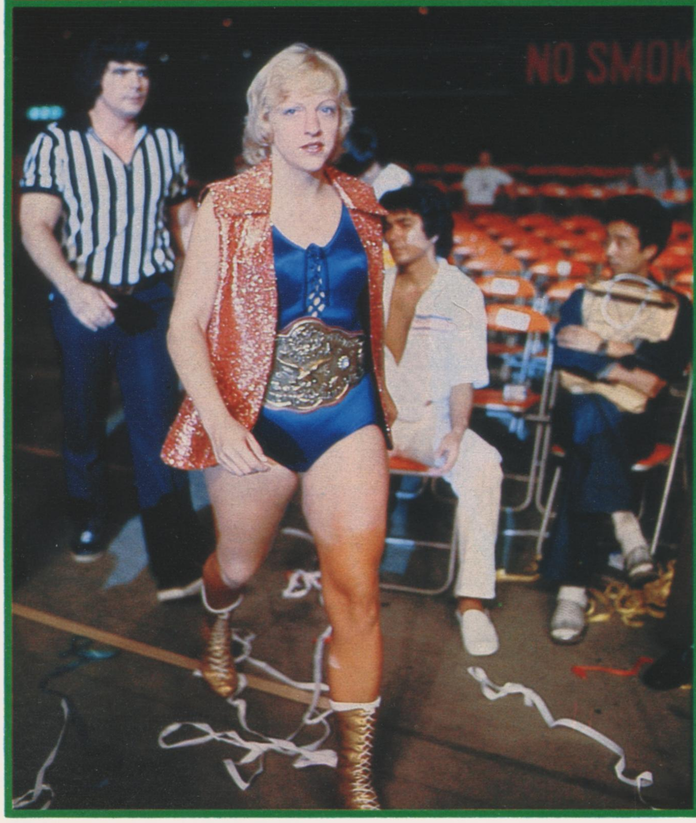
ムーラの主宰するレスリング・スクールの師範代であり、ムーラ軍団の代表格。生まれついてのショーマンシップとラフ・アンド・パワーは、日本でも大モテの来日〝常連〟レスラー

ファビュラス・ムーラ

ご存じ〝女子プロ界の首領(ドン)〟。年齢の限界(？)に挑戦する〝生涯〟世界王者

ビッキー・ウイリアムス

ムーラの下を去り、メキシコに定着してしまったが、UWA世界王者になるなど彼女の実力はピカー。ベアフット(素足)とクールな目が印象的な〝孤独なクイーン〟

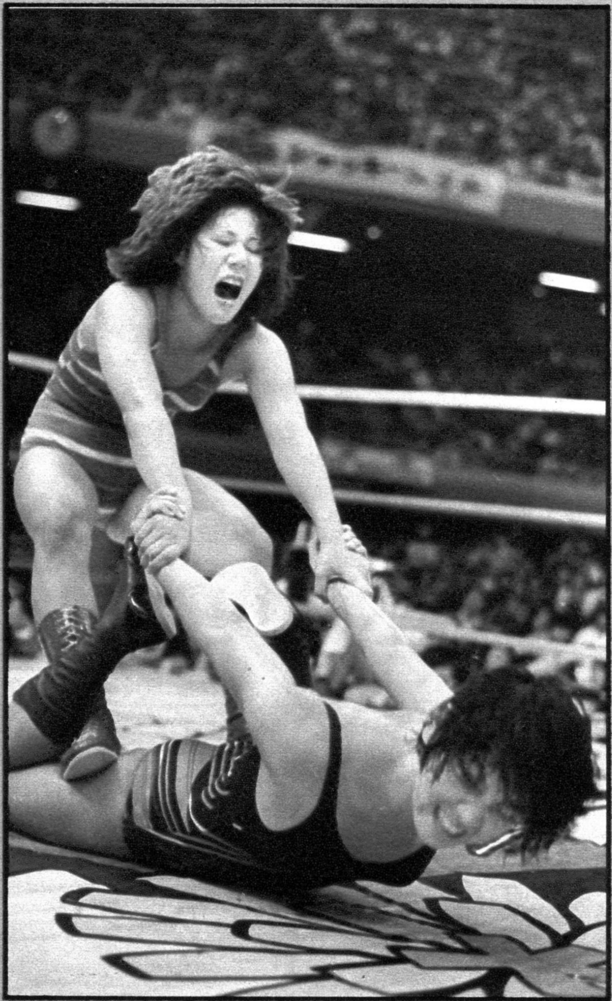


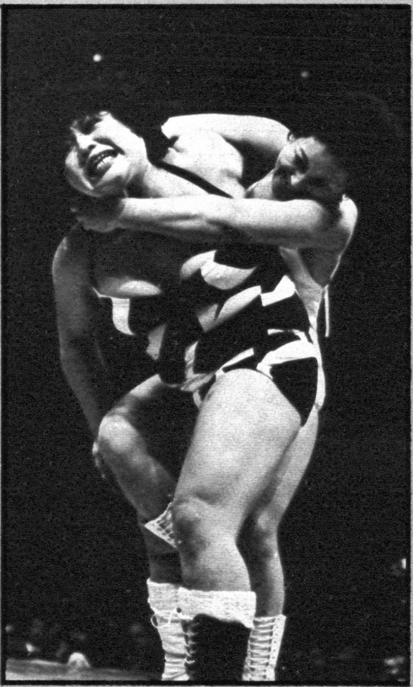
ジョイス・グレーブル

かつてのビッキー・ウイリアムスとのペアで世界タッグ選手権を保持していた美人ファイター。今では渋さを増し、巧さの目立つベテランの域に到達

〝さよなら〟は新しい出会いの言葉さ

今年7月、創立15周年に突入する全日本女子プロレス





出会いには、必ず別れがある。女子レスラーとの出会いには、別れがつきまとう。彼女らを愛することは悲しみの前兆だ。でも〝さよなら〟だけは言いたくない。いや〝さよなら〟は新しい出会いの言葉なのかも……。

女子プロレスの見方、始まります!

少女が消えていった時、僕はいつもリングに足を運んでいた…

女子プロレスの会場に行くと、こんな可愛い子供たちに出会うことがある。この子供たちの目が女子プロレスを一番よく語っている

男のプロレスもいいが、女子プロレスはもっといい。なんといっても若い女の子が、僕たちを楽しませてくれるからだ。いや、本当は悲しませてくれるのかも知れない。もし、女子プロレスの見方があるとしたら、それはその日かぎりの試合を楽しまないことです。あなたが、レスラーの名前をひとりでも憶えたら、もっと面白くなってくるでしょう。なぜなら、彼女たちはいつのまにかあなたの前から去っているからです。

街の奥へ行って やっと少女に会える

街の銭湯などに行くと番台の上で、偶然にも女子プロレスラーの写真を見つけることがある。銭湯代を10円玉でチャリンと置くと、そのそばに″女子プロレスの割引券″があるのだ。

真っ赤な色をしてレスラーの顔が円でいくつも並んでいる。この券を持って会場に行くと、通常の入場券よりも千円安くはいれる。裸になって湯にはいろうとすると、場末の映画館のポスターの横に、女子プロレスラーのポスターがいっしょに貼られていることもある。

こうして千円の割引きの券を持ち、会場に行ってみる。だが、場所がなかなかつかめない。とにかく、女子プロレスは男子プロレスと違い、日本全国、実に小さい町、小さな村でやっているのだ。

え、こんな場所で? というのが多い。しかも、体育館でやるよりも、比率からいうと圧倒的に屋外が多いのだ。いわゆる××広場とか××市場とかいうやつである。

これがまた、プロレス観戦に新鮮なイメージを与える。昼間の場合も夜の場合も…。テントをはって青い空、または夜空のなか、少女たちの嬌声が観衆をつつむ、なんともいえないムード。

体育館の試合もいいが、屋内でやるのは、どうもきゅう屈で解放感がない。試合が終ってアリーナを出たとき、初めて解放感がやってくるのだ。それに比べると、女子プロレスの屋外プロレスは、すべてが解放感に満ちていて、気持がいい。プロレスの本質からいっても、体育館での興行が屋外での興行より上とは絶対にいえないのだ。ただ、座る椅子とか設備の面で、少し弱いだけである。

こうして、僕たちは小さな街の小さな駅に降り、やがて苦労しながら、どんどん街の奥へ奥へといったところに、女子プロレスの会場を見つけることが出来る。そして、そこには、僕たちが楽しみにしている少女たちがいるのだ。

無名の少女たちによるプロレス!

会場にくると、まず、パンフレットを買ってみよう。どんなレスラーがいるのか、すぐになかを見てみる。なぜか? 僕は女子プロレスを見るとき、必ずといっていいほど、選手の名前をつとめて憶えるようにしている。

女子プロレスの載っているプロレスの専門誌も、欠かさず買って読むようにする。最近はデラックス・プロレスが精力的にウーマン・プロレスを取り上げてくれるので、楽しみが多い。あとは″週刊ファイト″に情報をたよる。

だから、僕は前座のレスラーから、全部、レスラーの名前を知っているのだ。もちろん、顔も。普通、女子プロレスの試合に行くと、ほとんどの観客は、彼女たちレスラーの名前を知らずに、実に素直に彼女たちのプロレスを楽しんでいる。

顔も名前もわからずに、どこが面白いんだという反論を受けるかも知れないが、お客は女子プロレスという全体の雰囲気を楽しんでいるのだ。プロレスがおらが街にやって来た。その人たちには、プロレスを見ることが、そもそも非日常的な話なのである。

だから、彼女たちのプロレスはプロレスがテレビの電波で放映されていないところのほうが、いいわけである。また、そういうところを選んで彼女たちも、旅から旅へとサーキットを続ける。

というわけで、そうした小さな村へ行くと、彼女たちはいつも、″無名の人″としてリングに上がる。そうだ、女子プロレスはいつも無名の人たちによる表現なのである。名前を憶えられることがほとんどないところで、彼女たちは青春をリングの上に燃焼させていく。

そんなとき、こちらが、彼女たちのリングネームを憶えてやると、僕たちはどんなに孤独な楽しみを持てるか、はかり知れない。みんな必死で彼女たちの名前を知って欲しいのだ。

青春の叫びはいつも激しく短い

なぜ、こんなことをくどくどと書くかというと、僕たちが会場に行ってみると、僕が頭の中に入れていたレスラーが、誰かひとりいなくなっているのだ。要するに、プロレスをやめているのだ。

ああ、少女たちはどこに行って

しまったのだろうか？ プロレスをやめてどんなことをしているのだろうか？ 僕はひとりで悩んじやってしまうのだ。マミ熊野ちゃん、あなたのやさしい顔を僕はおぼえています。足を故障し、しばらく休んで少々太目の体に出てきたとき、髪が長く、本当にいい感じだった。

マミちゃんだけでなく、いろいろなレスラー（少女）が、僕の知らない間に消えてしまっている。僕はそんな彼女たちに会いたい。感傷的になってしまうのだ。このセンチメンタルな気分が、僕も何度も女子プロレスの会場に足を運ばず、大きな原因になっているのだ。

誰も僕に彼女たちの消息を教えてくれない。教えてくれなくても僕は記憶は、どうしようもなく、はっきりしている。だけど、そんなことを話す女子プロレスのファンは僕のまわりにいないのだ。

いや、男のレスラー、女のレスラーにかぎらず、リングを降りてプロレスをやめた人には、あわないほうがいいのだ。彼らが、僕たちと違う日常を生きているから、僕たちはこのプロレスの世界へのめりこんでいく。レスラーが普通の世界で普通の人として生きていたら、なんの意味もムードもない。

そんなことを、思いめぐらしながらリングをみると、相変らず激しい動きと、彼女たち独特の高い声の嬌声が聞えてくる。僕にはあの声が、青春のやりきれない叫びに聞えるのだ。青春にはありあまるほどのエネルギーがある。

だが、誰もそのエネルギーとパワーを正確に使った人はいない。僕だってそうだった。彼女たちの嬌声と同じように、激しくイライラし、せわしなく時間をすごし、わけもなくエネルギーを消費してきた。青春はいつも無名で、その大切さは、自分にしかわからない。

リングの彼女たちもそうに違いない。そう思うと僕は、よけいに彼女たちのプロレスが好きになってしまうのだ。早く青春がなくなってしまうから、人は叫び続ける。

だから僕は彼女たちに会いに行く

女子プロレスを見始めてすでに6年。もちろん、男子プロレスも同じように何回となく見てきた。正直、男子プロレスは僕にとって親近感に乏しい。彼らはプロレスを一生続けていくのだから、僕は彼らのプロレスをファンの立場から、女子プロレスのような危機感とある種のこわれやすさを持ってみることはないのだ。

安定感のある男子プロレスは、いま、すぐに見に行かなくても別に大丈夫なわけである。絶対にすぐになくなったりしないし、そのシリーズに来日していたレスラーは、ときがたてばまたやってくる。日本人のレスラーも同じだ。失われていくものがないから、僕たちはカードを選んで男子プロレスの会場へ足を運ぶか、アントニオ猪木のように、特別な期待感をもよおさしてくれるレスラーを見るために、試合を見に行く。

しかし、女子プロレスは、いま、今日、見に行かないと、僕はあるものを失ってしまう予感と危機感にさいなまれてしまうのだ。あの少女はまだレスラーをやっているのか？ やめてはいないのだろうか？ もしやめていたら、僕の心はまたひとつ、さびしくなっていく。早くいかなければ、急がないと僕は少女たちを見失なってしまう。

そして、少女たちに会えたときのなんと安心することか…。僕のようなアブノーマルなセンチメンタリストには、女子プロレスのハードさは耐えられない。あそこまでやらなくていいのにと心の中で叫んでしまう。

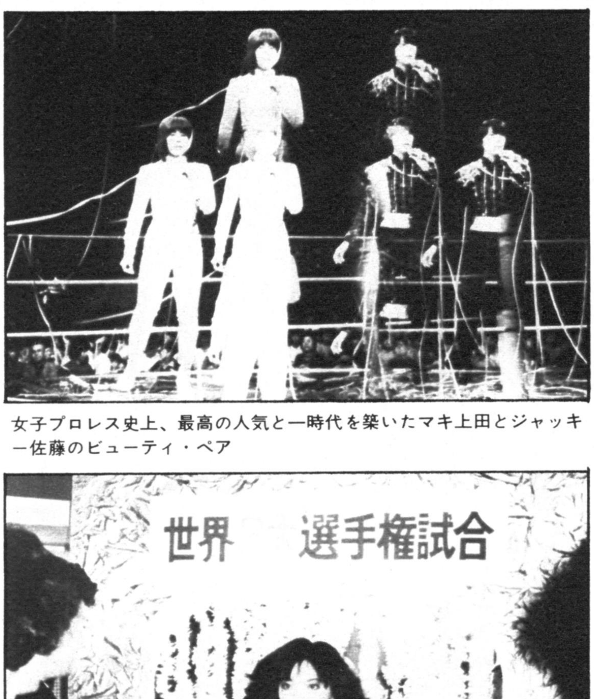
でも、女子プロレスがハードでなくなったら、僕は、もう彼女たち、少女たちのプロレスを見にいかなくなるだろう。彼女たちは不思議なのだ。あんなに叫び、痛みをこらえていながら、試合が終って5分もすると、トレーニングウエアに着がえ、もう、なにもなかったようにしてセコンドについている。

僕は「え！」いったいどうしたのだろうかと、自分の目を疑うが、彼女たちの回復力は素晴しいのだ。この、なんともない感じの試合後の彼女たちの表情を見るのも、僕のおおいな楽しみのひとつである。僕をあせらせ、僕に感傷をおこさせ、最後に安心させる。だから、僕は女子プロレスが好きで好きでしかたがないのです。

モンスター・リッパーの鉄柱攻撃で頭部を強打したジャッキー佐藤。セコンドのトミー青山のいたたまれない表情が実に印象的だ

右ひざに弱点を持っていったジャッキー佐藤 。たびたびリングで膝が抜けた

トミー青山とルーシー加山のクイーン・エンジェルス。スターになりきれなかったけど、忘れられないコンビだ



女子プロレス史上、最高の人気と一時代を築いたマキ上田とジャッキー佐藤のビューティ・ペア

現代の女子プロレスを支えるスター、ミミ萩原。彼女のプロ根性、プロ精神、ファンサービスは飛び抜けている

30歳のチャンピオン

「女子プロレス中継」実況アナ・志生野温夫の 私と女子プロレス

現在、土・日曜に不定期で放送されているフジテレビの「全日本女子プロレス中継」――その実況を昭和50年のスタートから担当しているのがベテランの志生野温夫氏（フリー・アナウンサー）だ。下手な記者顔負けのプロレス観と知識、情熱を持つ同氏に女子プロレスの思い出や意見、希望を、ざっくばらんに語ってもらった。

▲ 女子プロ実況中継を始めて、もう７年。ソフトな口調で今日も熱の入ったアナウンスをする志生野氏（左はミミ萩原）

女子選手は感情の起伏が激しく見る側にとっては面白いですよ

昭和50年にジャンボ宮本の試合の実況を初めて担当して以来、１度の休みもなく現在に至っています。つまり、フジテレビの女子プロレス中継は僕〝一代〟で、やらせてもらっているというわけです。

僕は元々、野球やボクシング、あるいはブームのときのボウリングなどプロスポーツ専門でしたが、プロレスもまた、力道山時代から好きで、実は短期間ですが〝男〟のプロレスを担当したこともあるんですよ。

そんなことから最初に話があったとき、プロレスということに抵抗は全くなかったのですが〝女子プロレス〟というのは見たことがなかったし、正直いって自分の心の中に抱いていたイメージは良いものでなかったから、いろいろ不安やら戸惑いがありましたね。

ところが会場の日大講堂に行ってみると、これが１万人もの客が入って、試合内容も真剣だし、お客さんはプロレスを大いに楽しんでいる。この日はスペシャル番組だったのですが、結局これが好評らしく、その後レギュラー化したわけです。

「思い出に残る名勝負」（志生野氏）赤城マリ子ＶＳジャンボ宮本の試合後、勝者・赤城にインタビューする志生野氏

最初のうちは、どうしても目が…つい行っちゃうんですよね（笑）。でも、男にしろ女にしろプロレスを〝スポーツ〟として〝格闘技〟として放送する姿勢は持っていましたから、せいぜい女子プロならではの技の名称に戸惑ったぐらいで、ことさら女子プロということで気を使ったことはありませんね。

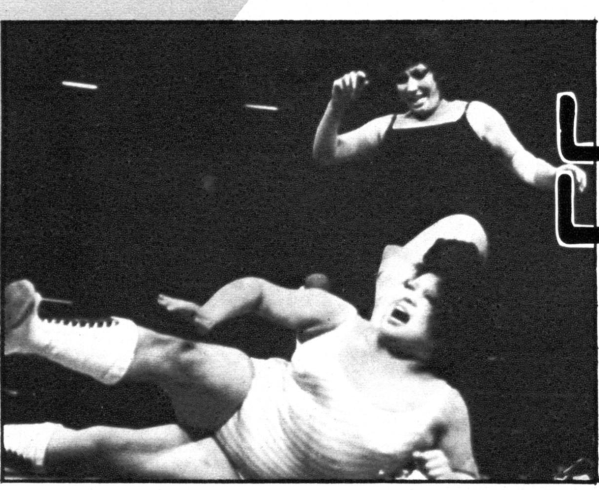
〝ＢＰ全盛〟の頃は、ちょっとやりにくかったなぁ。というのは、応援している彼女たちはジャッキーが出てくるだけで「キャーッ」。試合なんか、そっちのけってカンジでしたからね。会場は沸きに沸いているのですが、スポーツ中継としてはやりにくいこともありました。

ところで女子プロレスの魅力ですが…スピードやスタンド技での華麗さは文句なし、しかも若い娘のスピーディーな動きというのは僕らには何とも言えぬ魅力があります。と同時に、女の子として一番純粋な時期に入ってプロレスに打ち込むというのは「いいもんだなぁ」と思いますね。それから、これは格闘技としてイイか悪いかわからないけど…女の子だから男と比べると感情の起伏が激しいでしょ。それが未熟な点として映るときもあるし、本当に真剣なものとして映るときもあるし、一長一短あるでしょうが…そういった生の人間味というか、出てくるのは、僕は好きですね、放送していて。そういうものはなるべく見えるようにしたいし、放送の中で表現したいと思っています。これは、見る側にとっては、女子プロの楽しみ方の一つじゃないでしょうか…。

若い層に受けているだけではダメいつか10年選手が出てきてほしい

よく「女子プロレスなんかショーだ」と言われますが、これには断固、反発したいですね。やはり女子には女子の面白さがあるわけで、たとえば女の子の耐久力、我慢強さというのは男を上回るものです。最近でもマラソンで増田明美さんという方が出てきましたが、長距離などは、むしろ女の方が肉体的にも精神的にも強いんだそうです。

出でよ…円熟した



志生野氏が初めて実況を担当した50年11月・日大講堂でのジャンボ宮本vsベティ・ニコライ（当時NWA・US王者）

なんて言うのかなぁ…ハードな状況で耐えるっていうのは女の方が上だって言うんですよ。プロレスなんか、まさにそれでしょ。横田やミミなんか、その典型だし、男だったらココまで耐えてこられたか…というケースを何度も見ていますよ。それに彼女たちはケガに強いですね。そういった点を浮き彫りにしていくと、女子プロって凄いものだし、見る価値が高いと思いますよ。

今でも私が忘れられないのはモンスター・リッパーと田園コロシアムで戦ったときのジャッキーの初めての出血ですね。それは凄い血の量でした。終わって、すぐに控室に担ぎ込まれたのですが、救急車の到着が遅れたこともあって何ですか…出血多量で、もう少し遅れたら生命が危ないところだったと聞きました。何しろ控室の中は文字通り〃血の海〃で、オーバーではなくドアの外にまで流れ出てきていたんです。

さらに驚いたことには、翌日、ジャッキーは試合場に姿を見せていましたからね。もちろん試合は出来ず、挨拶だけでしたけど…。

ジャッキーの話が出ましたが、ビューティ・ペア全盛期というのは、それこそ語り尽くせぬ思い出があります。あの爆発的なブームは計算されたものじゃなくて、しかも予想もしないファンがついて…とにかく関係者一同、ボウ然としていましたよ。プロレスに対して嫌悪感を持っていた女の子の足を会場に運ばせたという点では、女子プロの功績は大きいと思います。

ただ、その後ブームが去って、関係者も足が地につかないって言うんでしょうか、ちょっと甘い汁が忘れられないようなところもあって「やれば作れる」という、まるで芸能プロダクションがタレントを売り出すような生き方をしすぎたんじゃないかなぁ…「ここを売れば」とか考えすぎて、本当は試合が基本なのに、他のことを画策しすぎたのが、もう一つ人気を取り戻せない原因だと、僕は思うんですがね。

たしかにBP人気は凄いものでそれは良かったのですが、そのファンは小・中学生から高校生までの女の子でしょ。やはり、赤城マリ子のファイトに熱狂したような大人のファンを呼び戻したいと思いますね。あんまり若い選手が若い層だけに受けるというプロレスが続いたために、本当の意味での個性が生まれてこないのは残念です。個性というのは10年ぐらいやって出てくるもので、これからは会社側も10年選手を出せるようにしていきたい、など方針を変えてきているので、それは私も賛成なんですよね。20歳ぐらいで引退というのは寂しいし、ただ若さや美しさだけで売るのではなく、円熟した30歳のチャンピオンが出てもいいと思いますね。

ブラック軍団の暴走ぶりには、テレビ局も苦労が絶えません

これからはパワー、ガッツ、テクニックと三拍子そろった選手に出現してほしいと思います。そういった意味で悪とはいえ、デビル雅美には期待が大きいのですが、彼女…試合中は放送席を急襲したり凄いことやるんだけど、すぐに「悪かった」という気持ちを持ってしまう。いろいろ、つき合いもあって難しいと思いますが、もっと私生活にも厳しさを持って徹底するぐらいでないと、本当の〃首領らしさ〃は出ないと思いますね。

あの子は、それが出来ないんですよ、気がやさしくて…。もっとも女の子としては〃救い〃なんでしょうけど…（笑）。

ブラック軍団の初代〃首領〃だった池下ユミなんか、私たちに会っても挨拶もしなかったですから…。

ブラック軍団といえば、彼女らの暴走ぶりには頭を痛めているんですよ。彼女らはマイクを引きちぎったり放送器材をメチャクチャにしてしまいます。それで、いま各局ね…とくに地方なんか行きますと、女子プロの放送っていうと嫌がるんですよ（笑）。マイクなんかカラオケで使っているのとは違いますから1本〃ン〃万円するわけです。それを、いとも簡単にこわされたんじゃたまりませんからね。局側でも防御策を考えて、それこそ何千万円もするミキシングの機械などは場外乱闘の及ばない2階に置くとか…マイクは、誰も使っていない古い型のを持ってきたり…アナウンサーとしては性能が悪いので困るんですが（笑）。いろいろ苦労していますよ。

まぁ私自身、女子プロレスには深い思い入れを持っていますね。ビューティ・ペアの人気は、それはそれで素晴らしかったけど、今度は本当に女子プロらしいテクニックや試合の面白さで〃黄金時代〃を築いてほしいですね。

そして願わくば〃市民権〃を…。あんなに素晴らしい試合をやっているのにまだまだ興味本位で見られているのは…寂しいという気がしますね。彼女たちのテクニックや根性は他のスポーツに比して決してヒケをとるものではないし、そういった素晴らしさが伝わって

〃黄金時代〃を迎えたとき、ぜひ実況をやりたいと思います……また日本武道館でね。（4月15日、ホテル・ニューオータニ内レストラン「アゼリア」にて収録）

志生野氏が絶対に忘れられないというジャッキー佐藤VSモンスター・リッパー戦での大惨事。ジャッキーは危うく命を落とすところだった！

ジャッキー佐藤

強くなりたい➡プロレスラー➡ビューティ・ペア➡個人主義➡考える人➡孤独➡引退

自分にしか興味なかったから、プロレスがくそ真面目に好きになったジャッキーマキ上田と正反対！――☆

コンビとかペアというのは本当にいいものである。男同士の友情に近いコンビものの映画をみるとあとで気分そう快になる。

古い映画で申しわけないが「スケアクロウ」「真夜中のカウボーイ」「狼たちの午後」「大統領の陰謀」など、コンビを組んでいっしょに無駄な時間をすごしたり、同じ目的のために仕事をしたり、ときには犯罪（共犯）さえ犯したりする、面白い話の数々。

まあ、しかし、これは男の世界だけの特権だと思っていたら、ビューティ・ペアなる女性2人によるプロレスラーのコンビが出現したのだ。しかも、このコンビは異常な人気を得、テレビにラジオと秒きざみの芸能活動をこなしていったという。まったくもって、世の中は変ったものだ。

その中で、何が変わっていたかというと、ビューティ・ペアの男役の扮装をしていたジャッキー佐藤だろう。彼女は、とにかく、自分にしか関心のない、まったく個人主義の徹底した人間だった。

あの、甘さのまったく存在しないジャッキー佐藤の冷たいファイトがなかったら、ああまでビューティ・ペアは人気を爆発さすことはなかっただろう。ペアであるマキ上田のだらしなさを、ジャッキーの冷たさがこよなくひきしまらせていた。

そう、彼女はだらしない精神が一番嫌いだった。「私は私だ！」という考えが徹底していて、どんなことでもつきつめて物事を考えようとした。こちらが本気になって話すと、彼女はそれに対して、きわめて真面目に答えようとする。真面目に物を考えることが、なによりも彼女は好きだったのだ。

マキ上田は何も考えない人間だったから、ジャッキーにとってはビューティ・ペアというのは、この上なく苦痛だったに違いない。ずぶとい神経、いや無神経なマキ上田と、論理的に物事を考え、行動し、処理しようとしたジャッキー佐藤。

おそらく、イライラしたのはジャッキーのほうだったろう。なにせ、マキ上田が手を抜いた試合をすると、パートナーであるジャッキーは、くやしくて、ホテルに帰って泣いたというのだから、その精神の持ち方は、たとえようがないほど、禁欲的だった。

引退式のとき、同僚の選手に担がれて〝別れ〟のリングから引き揚げていく…

自分にだけ興味――☆

おおよそ、感傷的になって涙を流すことなど、絶対にありえないのがジャッキー佐藤という人間である。感傷に流されるだけヒマがない、というのが彼女の生き方でもあった。まわりの人間は、おそらくジャッキー佐藤が女性であるなんてことは、これっぽっちも思っていなかっただろう。ヘタなことを言えば、必ず論理の矛盾を彼女はついてきた。

そして強さへのあこがれというよりも強さへの信頼感というのが、彼女のもうひとつの生きる手ごたえだった。うまくなろう、上手になろう、お客に受けようなんて、彼女は一度も考えなかった。強ければそれでいい。それ以上の何が必要なのか？ これがジャッキー佐藤のプロレス哲学だった。

弱くなったらそれで終り。あとは、この世界からさっさと消えていくだけ。だから、何が強くてどこが強くて、誰が強いか、彼女ほど、そういうことが明確にわかっていた女子プロレスラーは、ほかにいない。

ということは、今だからこそいえるが、他人に興味のなかったジャッキーは、ファンのこともまったく気にもとめなければ、半分、どうでもよいとさえ思っていた。

それよりも、いま、自分がどうすれば、強くなれ、新しい技を獲得出来、そして、自分の弱点をカバー出来るのか、そのことしか考えていない毎日をおくっていたのだ。

なぜ、彼女はこんな風になったのか？体を痛めるからだ。体を傷つけ、負傷し、ときには血さえ流すこともある。自分の体は自分にしかわからないと同じように、だから、プロレスという格闘技に、ジャッキー佐藤をさらに個人的な人間にしていった。いや、プロレスには個人的なものが多いから、彼女は、さらにプロレスが好きになっていったのかも知れない。

「プロレスラーは孤独です。だから私は練習し、考えます」とはジャッキーの名言である。いま、彼女はプロレスラーをやめて何をしているのか？ おそらく、プロレスにかわる個人的な競技を求めているにちがいない。

個人的なあまりに、個人的な作業と世界こそ、ジャッキー佐藤が人生で一番求めているものだからだ。

大学中退➡エリートコース➡トミー青山

海外遠征➡2冠王➡右膝負傷➡引退➡結婚

プロレス界のほこりをかぶらなかったトミー青山の幸運な人生（二木 隆）

55年10月、グアム遠征で〝最後〟の試合を終えて控室でソックスを脱ぐトミー青山。この瞬間、レスラー生活に別れを告げた

不敵な練習生の出現——☆

今から4、5年前のことだろうか？ 私は大阪の府立体育会館で、ひとりの〝野性的〟な練習生を見たことがある。試合が始まるには、まだ相当な時間があり、会館の中はリング作りの忙しそうな動作だけが、目についていたときだった。

リングサイドにいたその〝野性的〟な練習生の自信に満ちた顔。なによりも、そのレスラーらしくない、というよりも、この世界のほこりを一度もかぶっていない彼女の表情に魅かれたのだ。この世界のほこりを充分過ぎるほど体に浴び、レスラーらしくなっているレスラーは、あまり魅力ない。

彼女は不敵な表情をしていた。ほこりにまみれたレスラーなど、一足飛びに乗り超えてみせる、というような自信がみなぎっていたのだ。

たしかに、レスラーはいろんなほこりを吸収することによって、プロレスラーとして成長していく。ほこりが即、そのままそのレスラーの表現となり、顔となっていくのだ。

ハーリー・レイスなどはほこりの凄さによって、この世界の顔役になったようなものだ。だが、ある日、突然、突風のようにしてこの世界のほこりを一掃してくれる人間が出て来てもいいような気がする。

そういう意味の〝新風〟を、プロレス会場に足を運ぶたびに、私はひとりで願っていた。

だから、私はその〝野性的〟な練習生が気に入ったのだ。粗末なトレーニング・ウエアに化粧の無さが、さらに私をのめりこませていった。

派手なコスチュームはなくても、髪はバサバサでも、志向するものにパワーとエネルギーがあればこの世界は自由にくずせる。とにかく、その練習生の名前は冨高千賀子といった。

冨高千賀子という名前で充分に勝負出来る。と私は考えていたが、しばらくすると彼女は、〝トミー青山〟という、リングネームをつけ、この世界に根をはろうとしていた。

トミー青山はルーシー加山というもうひとりの新人とペアを組み、〝クイーン・エンジェルス〟と名乗っていた。

ポスト・ビューティ・ペアは彼女たち〝クイーン・エンジェルス〟だという期待感で付けられた名前であった。

元の彼女に逆もどり——☆

その頃から、彼女に存在した不敵さが消えていった。きらびやかなリング・コスチュームなど、彼女には何の役にも立たないのに、トミー青山は次から次へと真新しい衣装を見せるようになった。少しずつ、彼女はこの世界に組み入れられるようになったのだ。約束された世界と階段を登っていくことは、いつでも、自分のなかに納得するものが必要だ。

こうして、彼女はほこりのある世界へ足を踏み出したのだが、不思議なことに、まったく彼女はそのほこりを浴びなかった。足の負傷で不運に引退をよぎなくされるまで、彼女は一度として、この世界のほこりをかぶらなかったと私は思っている。

不敵さが影をひそめ、約束された階段を静かに登り、それでいてこの世界に染まらなかった女性。

名前が売れれば売れるほど、彼女の顔は小さくなり、声さえも小さくなっていった。化粧もいっこうに彼女の顔に密着しなかった。ロスとメキシコに遠征し、WWWA世界タッグ・チャンピオンと、オール・パシフィック・チャンピオンの2冠王になったトミー青山。

ジャッキー佐藤の牙城をあと一歩でくずせるところまでいきながら、挑戦することさえなく、引退してしまったトミー青山。

だが、トミー青山は幸せだった。彼女はビューティ・ペアという偉大なる太陽系のなかの一衛星として、その恩恵のもと、ほんの一瞬だったが、華やかな時間をすごした。初めからビューティ・ペアを抜けるとは夢にも思っていなかったし、やがて、ビューティ・ペアの光が消えていくことも知っていた。

そして、この世界のほこりを一度もかぶることのなかった彼女は、ごく自然に、元の彼女に帰っていくことが出来たのだ。聞くところによると、彼女は幸福な結婚をして田舎に帰り、子供まで生まれたという。

結局、彼女がプロレスで使ったエネルギーの中身は、平凡なものだったのだろう。平凡というよりも平均的で普通のエネルギーだった。他の多くの女子プロレスラーは、かなり屈折したエネルギーをマットにぶつけるため、プロレスをやめたあとの人生に調和を欠いていくタイプがとても多いのである。

その上、トミー青山は立派だった。不敵な魂の賭けには破れたが、もうひとつの人生では、幸せの確実さをつかんだのだ。

ザ・チャンピオン

「一度でいいから〝チャンピオン〟と呼ばれたい」この世界に入った者は誰しも、こう願う。選ばれた者の限られたチャンス、栄光の座は遠い。全日本女子プロレスは現在、5つ（シングル4）のタイトルを認可している。そこで〝強者〟の証明であるシングル王者の歴史を見てみよう。

●WWWA世界シングル

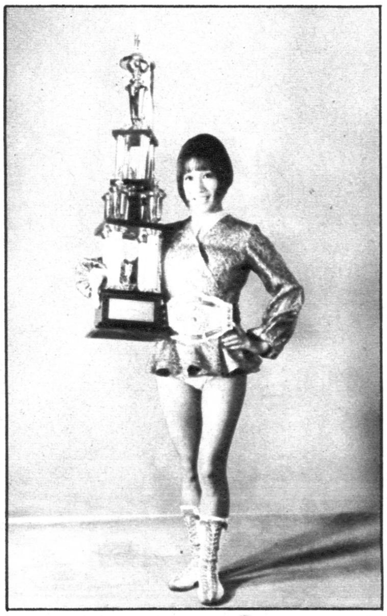
WWWA（ワールド・ウイメンズ・レスリング・アソシエーション）は、ロサンゼルスに本部を置き、米、日、欧、メキシコと世界に広がる女子プロレスのみの団体。会長は生涯不敗のまま引退したミルドレッド・バーク。

バークは最初の女子プロレス世界王者で、無敗のまま引退。その栄誉を称え「永世WWWA世界チャンピオン」の称号とベルトが贈られた。バーク引退後、1970年に秘蔵っ子のマリー・バグノンが2代目王者を継ぐ。この年の10月にバグノンが京愛子に敗れ、王座は日本に定着した。京は1年半の間に連続22回防衛という大記録を達成。京に続いたのが、本格派の星野美代子。星野はジャンボ宮本と初の日本人同士の世界戦を行い話題を集めた。だが宮本のパワー殺法に屈し王座を明け渡した。安定した王者・宮本は12・14・16・18・20代と5度も王座につき通算防衛23回を果す。75年3月には16歳の新星、マッハ文朱がデビュー8カ月で世界王座に君臨。だが僅か2週間の短命に終った。

76年に入ると、宮本と赤城マリ子、マキ上田が3つ巴で激闘を繰り返した。赤城から王座奪回したマキに挑戦したのがジャッキー佐藤。2人は〝格闘技の宿命〟として77年11月、日本武道館で対決。60分時間切れ＝判定でジャッキーが勝つ。79年2月にも、ジャッキーは再度マキを倒し〝サバイバル〟決戦に勝ち残った。

ジャッキーの前に現われたのが怪物モンスター・リッパー。ジャッキーはモンスターと相性が悪く2度も王座を奪われた。そして81年2月、時代の交代ともいうべき横田利美が新王者に就いた。

長い激闘の歴史だが、ベスト5を選ぶとすれば、歴代順に京愛子、ジャンボ宮本、ジャッキー佐藤、モンスター・リッパー、ジャガー横田だろう。



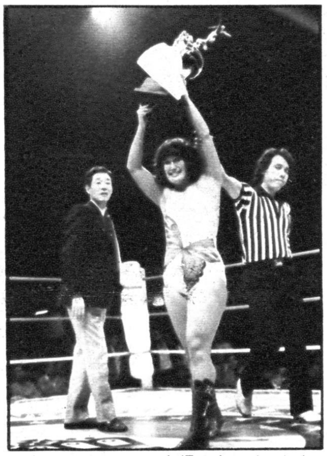
〝華麗〟さ100パーセントの京愛子。世界王座獲得が女子プロのイメージを変えた

●WWWA世界シングル・歴代チャンピオン

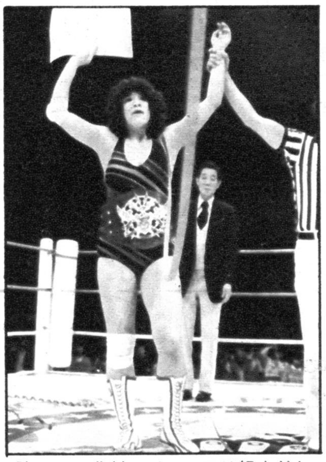
	王者名	在位期間	防衛回数
初代	ミルドレッド・バーク	1937 ～1957	?
2代	マリー・バグノン	1970.8～1970.10	?
3代	京　愛子	1970.10～1972.3	22
4代	ジーン・アントン	1970.3～1972.3	0
5代	京　愛子	1972.3～1972.4	3
6代	サンデー・スター	1972.4～1972.5	1
7代	京　愛子	1972.5～1972.7	0
8代	サラ・リー	1972.7～1972.7	2
9代	星野美代子	1972.7～1973.5	8
10代	サンデー・パーカー	1973.5～1973.7	0
11代	星野美代子	1973.7～1973.9	4
12代	ジャンボ宮本	1973.9～1974.3	2（返上）
13代	バンビ・ボール	1974.3～1974.3	0（返上）
14代	ジャンボ宮本	1974.3～1974.4	0
15代	ジャッキー・ウエスト	1974.4～1974.4	0
16代	ジャンボ宮本	1974.4～1975.3	10
17代	マッハ文朱	1975.3～1975.4	0
18代	ジャンボ宮本	1975.4～1976.3	10
19代	赤城マリ子	1976.3～1976.4	1
20代	ジャンボ宮本	1976.4～1976.6	1
21代	マキ上田	1976.6～1976.11	1
22代	赤城マリ子	1976.11～1977.7	2
23代	マキ上田	1977.7～1977.11	0
24代	ジャッキー佐藤	1977.11～1979.7	2
25代	モンスター・リッパー	1979.7～1979.9	0
26代	ジャッキー佐藤	1979.9～1980.3	0
27代	モンスター・リッパー	1980.3～1980.8	0（返上）
28代	ジャッキー佐藤	1980.12～1981.2	0
29代	ジャガー横田	1981.2～	4

●オール・パシフィック

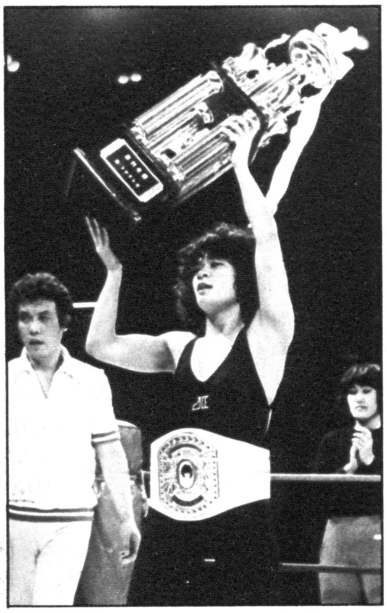
WWWA加盟国のうち太平洋沿岸に面する、すべての国が対照となるタイトル。新設当時は、ハワイアン・パシフィックなる名称で呼ばれていた。同王座は、全日本女子プロレスのナンバー2的レスラーが常に保持。負傷による返上が多く、もう一つ定着し切れない。



レスラーとしての自信を与えたデビルの全日本奪取



強い！　北村にジュニアは軽すぎた



ジャッキーの永遠のライバル池下は常にオール・パシフィックを死守

●オール・パシフィック・歴代チャンピオン

	王者名	在位期間	防衛回数
初代	池下ユミ	1977.9～1978.5	2（返上）
2代	シャベラ・ロメロ	1978.5～1978.8	0
3代	マキ上田	1978.8～1979.2	2（返上）
4代	トミー青山	1979.9～1980.2	1（返上）
5代	池下ユミ	1980.2～1981.2	2
6代	ミミ萩原	1981.2～1982.1	1（返上）
7代	ジャンボ堀	1982.1～	1

●全日本女子

全日本ジュニアと並び、全日本女子プロレス・コミッションが認定するタイトル。

初代王者は〝タイトル泥棒〟横田利美。WWWA世界王座獲得で返上後、デビルが2代目に就く。そのデビルも先日返上し、現在は空位になっている。5月15日、大宮でのL・飛鳥対M・ユウの勝者が3代目王者になる。

●全日本女子・歴代チャンピオン

	王者名	在位期間	防衛回数
初代	横田利美	1980.12～1981.3	1（返上）
2代	デビル雅美	1981.5～1982.4	1（返上）

●全日本ジュニア

若手の育成を目的に設定され年齢が20歳までと制限されている。

〝若さのシンボル〟同王座の初代は横田利美。横田はこのタイトルを広めるとともに大きく台頭。2代目は〝横田イズム〟の後輩、北村智子が就き2度防衛後、返上。現在、3代目を決めるリーグ戦開催中だが、本命は81年新人王の長与。

●全日本ジュニア・歴代チャンピオン

	王者者名	在位期間	防衛回数
初代	横田利美	1980.1～1980.8	2（返上）
2代	北村智子	1981.1～1982.1	2（返上）

消えていった アイドル候補生

女子プロレスを見る楽しみの一つに、自分の彼女にしたいような〝マイ・アイドル〟を探しだす面白さがある。でかくて、強い女だけがレスラーだという定義はない。だから、歌手やモデルにいるようなキュートで愛らしい女子レスラーの出現を待ち望んでいるのは私だけではあるまい。（大河益久）

毎年、何人かの少女が女子プロレスに入門してくるが、時々、ハッとするような美少女と出逢うことがある。彼女らを見つめることは、我々にとって一般のアイドルと同一の価値感を与えることになり、また一歩深く女子プロレスにのめり込む原因にもなる。

その中には、デビュー前から、〝次代のスター〟を約束されながら、なぜか消えていったアイドル候補生もいた。それらの美少女たちを年度順に思い出してみよう。

まず52年組では小宮山忠子がその1人だった。彼女は、ビューティ・ペアの超過剰人気に便乗するように行われた第1回新人オーディションの合格者である。この大会は〝女子プロ版スター誕生〟ともいうべき、いわば新人の登龍門なのだ。この大会からは、ジャガー横田やルーシー加山が生まれているが、当時ポスト・ビューティ・ペアの1番手として注目されたのは彼女らではなく、静岡県御殿場市出身の小宮山であった。横田はやたらギラギラした目以外は、さして目立つ選手ではなかったし、ルーシーにいたっては、いかにも〝ツッパリ風〟でスケ番そのものといった感じだった。だが、中学卒業したての女子プロ1年生の小宮山は15歳とは思えぬ167センチ、59キロという見事な発育ぶりと、色白でまだあどけなさの残る美人顔は、初々しいほのかなお色気が漂っていた。この小宮山と売り出し中の本格派、トミー青山にコンビを組ませ、海外修行させるという異例のエリートコースが用意されていたのだった。だが、この計画は、思わぬ誤算で一転した。小宮山はプロレスの基本である〝受け身〟が充分にとれないという致命的な欠陥があったのだ。小宮山に代わって渡米した悪のホープ漆原幸恵（のちのルーシー加山）がベビーフェースに転向し、トミーとのクイーン・エンジェルスを結成したのは皮肉な現実だった。小宮山は、彼女らが旅立つ5日前、突然女子プロレスを辞めていった。

53年に入ると練習生から佐藤ちのがプロに昇格した。ちのは劇団ひまわりのオーディションに合格したこともある女優志望の才女？だった。新人ながらミミとの〝ラブリー・ペア〟でタッグ・リーグ戦に抜擢されブラック・ペア（池下・熊野）を破る大金星をあげるなど、将来を嘱望される。チャイナ風ガウンを着こなす姿は肉感的であり〝隠れファン〟の中年男性をシビれさせた。だが元来のムラッ気と故障がちな体が災いし〝前座の華〟どまり。ペアを組んでいたミミとは決別し以後、抗争（？）を繰り返した。ちのは18番のフロント・パイルドライバーでミミを3度に渡り病院送りにするなど二人の憎悪は深まるばかりだった。

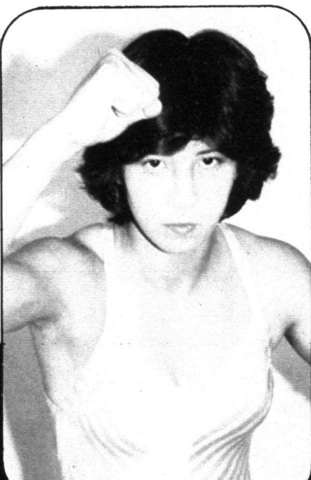
56年2月、中堅選手としては、〝異例〟の盛大なる引退式で第一線から退いた。

54年には、アイドル候補生の本命〝ミーナ〟こと高橋三奈が女子プロ入りした。練習生時代にスタッフが彼女につけたニックネームは〝お嬢さん〟――およそ女子レスラーらしくない、普通の世界にいる新鮮で清潔感あふれる美少女だった。彼女は、あまりに純真すぎて現実の屈折した世界とは無縁のけなげな存在だった。が内面は人一倍自立心旺盛で何よりも芯が強かった。しかし相手を殴る、蹴るといった格闘者に必要不可欠な精神は微塵もない。まぁ、普通の世界には、このような〝行為〟はないのだから彼女は必然性を感じなかったのかもしれないが……。

〝普通の女のコ〟がレスラーになる意外性はあったものの、やはりプロレスをやるには当然、無理があった。心身ともに女子プロの生活に疲れを感じてしまったのだ。その頃だろうか、何の前ぶれもなく彼女も我々の前から去っていった。いかにもプロレスラー的個性集団にあって高橋三奈の素顔に接することは、従来の女子プロレスに対する別世界への逃避だったのかもしれない。

おかしなもので、高橋三奈と入れ代わるように新たな美少女がデビューした。奄美大島出身の師玉美代子だった。彼女は都会の色に添まることのない素朴で〝さわやかな青空〟そのものだった。何よりもレスリングにおけるセンスと才能は類いまれな逸材であり、我我の望む理想像に最も近かった。いつしか見た、奥村ひとみとの試合はデビューしたての新人とは信じがたい熟練されたハイレベルの展開だった。2グループ制興行を実施していたため、師玉は手薄なBグループで連日、長時間の試合を余儀なくさせられた。デビューして5カ月が経過する頃だろう、女子プロの生活そのものに疑問を抱き旅先から抜けるように消えていった。まさに〝消えていったアイドル候補生〟を地でいったのである。

女子プロレスの長い歴史の中にさりげなく通り過ぎていった美少女たち……彼女たちは〝思い入れ〟の世界に生きる永遠の恋人たちなのだ。



彼女たちこそ可憐に咲いたアイドルなのだ。（写真は上から）小宮山忠子、佐藤ちの、高橋三奈、師玉美代子

プロレス

世界のプロレスの中でも、ひときわユニークなのが〝ルチャ・リブレ〟と称されるメキシコ・マット界だ。ここは〝軽量王国〟〝覆面王国〟と異名をとり、女子プロレスもまた盛んである。そこで、メキシコでの取材活動が長かった坂井圭也樹氏（週刊ファイト紙）に〝ルチャ・リブレの女子プロレス〟を紹介していただいた。

酢いも甘いも知っているベテランが活躍!!

イルマ・ゴンザレス(右)は文字通り〝メヒコの顔〟娘のイルマ・アギラル(左)もチャンピオンに成長

UWA派で1興行1、2試合 イルマを筆頭に20年選手の巣

〝プロレス王国〟メキシコでは女子プロレスもまた、なかなかに盛んである。

女子レスラーの数の多さも日本の比ではない（地方都市の試合にそれもごくたまにしか出場しない選手も多いので、総数をつかむのは難しい）が、日本のように女子プロの試合だけで一興行を行うのは年に数回程度で、普通はアメリカなどと同じく、男子レスラーの試合の中に、女子の試合を一つか二つ組み入れるシステムだ。

メキシコマットの勢力分布がUWA（F・フローレス代表）、NWA（S・ルッテロール三世代表）の二派に大別できることは周知の通りだが、現在のところNWA派では女子の試合は行われず、もっぱらUWA派の会場で見ることができる。

UWAでは女子世界王座を設置しているが現チャンピオンは〝怪魚仮面〟フィッシュマンの夫人としても知られるローラ・ゴンザレス。フィッシュマンは現在、UWA世界ライト・ヘビー級王者なので、夫婦揃ってのタイトル・ホルダーというわけだ。

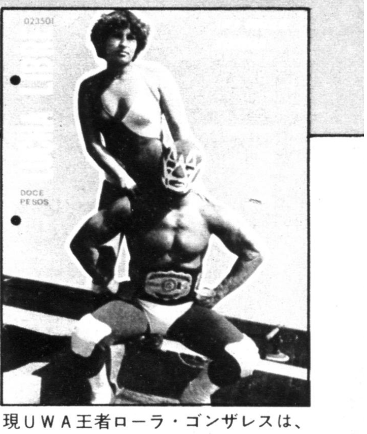
ローラは「メキシコ女子マットに久々に現れたオーソドックスな選手」といわれる本格派でもある。

〝日本の星〟クイーン・エンジェルスもメヒコに登場（53年7月・トレオン）

しかし、現王者のローラ以上に忘れてはならないのが〝メヒコの女王〟と呼ばれるイルマ・ゴンザレスだ。ローラとは同姓だが血縁関係はない。75年の初来日以来、何度か全日本女子プロレスのマットに上がっているおなじみの選手。顔だち、体型などが小づくりのため、一見、若そうに見えるが、実際は娘のイルマ・アギラルが現役レスラーとして活躍しているほどのキャリアを持っている。

UWA世界王座こそ、若いローラに任せた形になっているが、今だにメキシコのファンはルチャドーラ（女子プロ）といえば、イルマのことを連想する。

10代の選手がほとんどという状態の日本女子プロ界では考えられない40代半ばを過ぎた〝女王〟だが、親子タッグを組んでライバルのチャベラ・ロメロやエステラ・モリーナと闘うなど元気いっぱいだ。



現ＵＷＡ王者ローラ・ゴンザレスは、夫のフィッシュマンと「ルチャ・リブレ」の表紙を飾る

娘とはいえ、アギラルも子持ちなのでイルマは孫までいるわけだ。立派なものである。

相手が女性なので、正確な年齢を聞くのは失礼だし、たとえ尋ねたにせよ、まともに答えてくれないだろうが、ロメロ、モリーナをはじめ、マリーナ・レイ、チャリート・シルバ、ビウダ・ネグラなど、イルマと同年配でがんばっている女子プロは多い。当然、キャリアの方も20年を超えており、わずか数年で引退していく日本の女子プロとは大きな違いがある。

日本の女子プロを軽快なロックのリズムに例えるならば、メキシコの女子プロはオバさんたちのバラード、といったところだろうか。

もちろんミミのような美人タイプは少なく、テーマ曲に乗って登場することもない。しかし、メキシコ人にとって庶民派スポーツの代表であるルチャ・リブレの泥くさいイメージには実によくマッチしている。

流血戦が多く、覆面もいて過酷な試合形式に人気！

メキシコシチーだけでも一週間に何十カ所という会場でプロレス

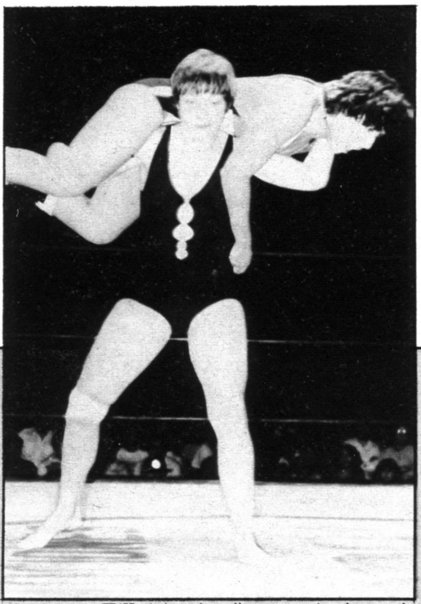
ルチャ・リブレの女子

興行が行われているのは有名な話だが、大半のファンはまるで縁日か何かのように毎週毎週、足を運ぶ。娯楽が少ない（最近は異常インフレで、さらに生活が苦しくなった）人々にとって、本当に楽しみな一日なのだ。

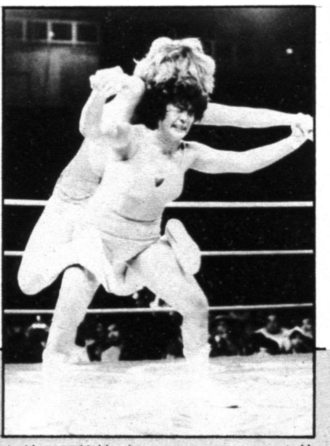
そこでワイワイ騒ぎながらリンピオ（ベビーフェース）とルード（ヒール）の攻防を心ゆくまで楽しむわけだが、そこに女子プロの試合が入っていれば、さらにゴキゲンというわけである。そんなムードの中ではカワイ子ちゃんレスラーよりも、酢いも甘いも知っているベテランの方がピッタリというわけだ。

女子プロとはいえ、メキシコ名物のマスクマン（マスクウーマン?）も多い。来日したこともあるラ・ブリオーサ、ラス・ギャラクティカスなどが有名だが、必然的にマスカラ・コントラ・マスカラ（マスクはぎマッチ）も行われる。最近では79年にメキシコシチーのエル・トレオで行われたラ・ブリオーサとラ・メドゥーサのマスカラ・コントラ・マスカラ（ブリオーサが勝ち、メドゥーサはリング上でマスクをはがされた）がファンを熱狂させた。

マスクはぎマッチと共に人気のあるカベジェラ・コントラ・カベジェラ（ヘアーマッチ）も容しゃなく行われ、同じくエル・トレオでアメリカ人のビッキー・ウイリアムスとローラ・ゴンザレスが髪の毛を賭けて闘い、地元のローラが大流血戦の末敗れたときには、会場全体がパニック状態になって、リング上でローラの髪にバリカンを当てるのが中止されたほど。女子レスラーにとっては耐えきれないほど過酷な試合形式だが、〝プロレス王国〟の掟は女子プロに対しても情をかけない。



女子でも外国選手の進出は著しい。ビッキー・ウイリアムスはその代表



伝統の関節技ゴリー・スペシャルを使うエステラ・モリーナ

女子プロの試合に流血戦が多いのもメキシコの特徴だろう。全部の選手がベビーフェース、ヒールにはっきり色別されているため、どうしても対抗意識が強くなってしまうようだが、熱狂的なラテンの血を持つメキシコのファンにはぴったりとマッチしているといえよう。

男子の場合、メキシカンといえばトペ、プランチャに代表される華麗な空中殺法があまりにも有名だが、女子の場合は意外にスピードのある選手が少ない。ベテラン選手が多いこと、ウエートが日本人選手よりもかなり重いことなどが、その原因だろう。

〝まだ見ぬ強豪〟オユキ（左）。長与との空手対決は見ものだ

日本選手の来襲を待望するメキシコ女子マット界

UWAの選手が全日本女子プロレスのマットに送り込まれるようになって以来、日本とメキシコの交流はなかなか盛んだ。

といっても、日本からメキシコに遠征したのはルーシー加山とトミー青山のクイーン・エンジェルスだけ。

メキシコ・サイドとしてはジャッキー佐藤、ミミ萩原、ジャガー横田らの招へいに何度か動いたことがあるが、ルーシー、トミーからメキシコの過激な？ 実体を聞かされた選手たちの方が尻込みしているようだ。

それとは対照的に、アメリカの女子プロが日本を中継点にしてUWAのマットに上がることは多い。ビッキー・ウイリアムス、レイ・ラニ・カイ、ジョイス・グレーブル、モンスター・リッパーなどが何度となく遠征している。

中でも悪名？ を高めたのはウイリアムスとリッパーの2人だ。ウイリアムスは79年、UWA王座奪取に成功し、イルマ親子、ローラなどの挑戦を一蹴して愛国心の強いメキシカンの憎悪をかった。

〝最後の切り札〟としてエステラ・モリーナがエル・トレオで挑戦した試合は、なんとドス・カラス、アニバル、エル・ソリタリオといったビッグスターたちの試合を前座に回しメーンエベントとして行われ、マリアッチ（メキシコ名物の辻音楽師）の一団がリングサイドに陣どって、モリーナの攻勢になると愛国的なメロディーを奏でてモリーナを励ました。2万人の大観衆が興奮のルツボと化したのは言うまでもない。

期待に応えたモリーナが見事なプランチャを決めてウイリアムスからベルトを奪い返した瞬間、エル・トレオ全体は異常な大歓声に包まれた。

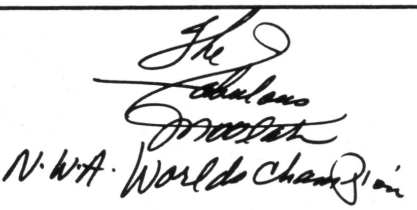
今、メキシコの女子プロ関係者は言う。

「やはり外人との対戦はファンのエキサイト度が違う。これからは日本からも選手を送り込んでほしいものだ」と。

日本の女子プロの力を見せるために熱狂と興奮の地へ遠征してやろう、と決意する選手は出てくるだろうか。

「人に最も大切なのは愛と勇気」と語る"現"NWA世界王者

"首領(ドン)"が語る告白



ファビュラス・ムーラ

54年秋「日米対抗リーグ戦」に軍団を率いて特別参加したムーラ

私はサウスカロライナ州コロンビアで、兄12人、弟1人という大男系家族の中の唯一の娘として生まれました。そして母が天国に召されたのが、私が8歳の時。だからいつも男の子の中で男の子のように育ち、それが本当に楽しかったのを覚えています。

その後テネシー州ナッシュビルに移り、中学生の頃はカントリー&ウエスタンを演奏していました。私の担当はギターとベースで、唄も歌っていました。ナッシュビルはカントリー&ウエスタンのメッカなのです。もし私がレスラーになっていなかったら、今でもそこで音楽活動を続けていたでしょう。

そして14歳で中学を卒業し、すぐに結婚。私の夫はジョニー・ラブというプロレスラーで、15歳になると私は彼にレスリングを習い始め、南アフリカのヨハネスブルグでデビュー戦を行いました。私の本名はリリアン・エリソンですが、リングネームをファビュラス(豪勢で神話的な)ムーラ(権威のある女性の名)と、自分で命名しました。

南アフリカには、プロボクサーを目指していた弟が交通事故に遭い、その静養のために訪れていたのですが、5年たって私達は米国へ戻り、そして1956年9月18日、メリーランド州ボルチモアでジュディ・グレイブルを破り、NWA女子世界チャンピオンになりました。人生で一番嬉しかったこの日を、私は生涯忘れられません。

その頃のライバルとしては、ペニー・ベナー、ロレイン・ジョンソン、ジェーン・バイヤースがいますが、何と言っても最強の敵はジュディ・グレイブルでした。彼女には私は本当に苦しめられ、何度も何度も負けそうになりました。でも、アメリカの女の子達がレスラーになると世界王者になりたいと必ず夢見ますが、その夢がかなえられた唯一の女性が私で、今でも王座を保持し続けています。

また1972年、それまで女子プロレスを認めなかったニューヨークMSGの定期戦に初めて出場したのも私でした。(対戦相手はビッキー・ウィリアムス。ムーラは今年の3月にも出場した)

日本には1968年初来日し、ユキコ・トモエのことをよく憶えています。日本での最後の防衛戦は1979年10月17日、カワサキ・スタジアム(川崎球場)での対ナンシー・クミ戦。私のひとり娘ぐらいの年頃の女の子でしたが、彼女はとてもパワーがあり強く、反則勝ちでタイトルを守れました。

現在、私は生まれ故郷のコロンビアに住んでいますが、仕事を離れた人生で、人に最も大切なことは、友情と愛だと考えています。だから私は、少ない自由時間をさいて身体障害者のための組織で働いています。自分でもひとつ設立したし、私が現役を引退したら、すに購入してある50エーカーの土地に施設を建てようと思っています。

また私は女子レスリング学校も経営していて、プロレスラーを目指す女の子をコーチし、ブッキング・オフィス(契約事務所)の社長として、全米と日本に女子レスラーを派遣しています。

私のレスリング学校の女の子はみな女子(ガール)レスラーと言うより淑女(レディー)レスラーと言った方が正しいでしょう。彼女達は禁酒、禁煙、禁ナイトクラブです。レスラーは誠意を持ち、健康に注意して、訓練を積まねばならないので、それも当然のことですし、私自身もそうやってきました。

しかし、そんな私にも、人生の試練がありました。それは私達夫婦の問題なのですが……。私がチャンプになり、レスラーだった夫の格が私より下になったのが、彼が私に嫉妬を持ち始めた原因でした。それが私達夫婦の離婚する最大の理由でもあったし、私の人生の最大の家庭問題でもありました。

現在の私は平和で、家に面している2つの湖で釣りや水上スキーをして、毎日がハッピーです。

いま思うことは、私に日本語が話せたらなぁ、と言うことです。日本と日本の人々が大好きだと言えるのにじゅうぶんなほど、話ができたらと思います。

いつかまた日本を訪れた時には、今までと変わらない御声援をお願いします。

54・10・17川崎でナンシー久美に反則勝ちして王座防衛

女優のエリザベス・テーラーに似ているムーラ

「日本の女子プロが羨ましい」と語る"初代"世界王者

米マット界2大

Mildred Burke

ミルドレッド・バーク

全日本女子プロレスと提携しているバークは松永社長と堅い握手

月日の経つのは早いものです。こうして目をつぶって記憶をたどっていくと、まるで昨日のごとく数々の思い出が鮮明に鮮ってくるのです。

私はカンザス州コフィービルで6人兄姉の末っ娘として生まれました。父は、滑らないチェーンや石けんの製造法を発明し、生活費はこれらの発明の特許料で賄っていたのです。

私が最初の夫と結婚したのは1935年、17歳の時でした。当時は不況に見舞われ生活もひどく大変苦労しました。それが原因ではないのですが、私たちは離婚する結果になったのです。

その頃、ビリー・ウルフがミズーリ州のライト・ヘビー級王者、兼プロモーターでした。レスリングに深い興味を持った私は、機会あるごとにビリー・ウルフと逢うようにしたのです。彼はいつも「女がやる仕事じゃないよ。やったとしても金を払って見に来る奴はいないから忘れた方がいい」と言って入門を認めてくれませんでした。私は常に男がやれることは女にもできる。しかも女の方がうまくやれる—私が証明しなければと思っていました。ビリーは、私が男性を練習中にピン・フォールしたことによりレスリングを教えてくれるようになったのです。

その後、私とビリーはカーニバル・ツアーを組みました。25ドルを賞金に対戦相手を募集しましたが、200人以上の男性の挑戦を受け、誰も25ドルを持っていくことができませんでした。

プロ入り後も男性と試合をすることが多かったですね。ジム・ロンドス、トム・マローン、ダノ・オハホニーらが活躍していた懐かしき時代ですよ。

ところで、私の生涯において忘れることが出来ないのが、初代世界チャンピオンになったことです。1937年のことでした。増えてきているとはいえ、全米でもせいぜい70人ぐらいだったでしょうか。その中から私も含めて20名の精鋭が選ばれ、オハイオで世界チャンピオンを決めるトーナメントを行いました。私は順調に勝ち進み、決勝でウィルマ・ゴードンを破り初めての世界チャンピオン・ベルトを締めることができたのです。その感激は、なんて説明していいかよくわかりませんが、神が私に味方してくれたと信じています。

いま流行の女性ボディービルダー顔負けの肉体美を誇った全盛期のバーク

そのタイトルは、1957年に引退するまで20年間保持していました。約6000回余り試合をしましたが、私は1度も負けませんでしたよ。ベストバウトといえば1948年にボストンで対戦したジェーン・バイヤースとの試合が今でも脳裏にはっきりと焼きついています。それからルイスビルでのスノッド・グラス戦も印象的でしたね。

現役時代の得意技といえば、ピン・フォール…エビ固めですね。それからヘッドシザース、この二つを主に使っていました。ピン・フォールは"アリゲーター・クラッチ"と呼ばれていたんです。ヘッドシザースは、首筋に足をカギのように掛け、相手の首をツイストするように締め上げる技で"クルックト・ヘッドシザース"と名付けられていました。現在のような立体的な攻撃は、想像もできなかったことです。

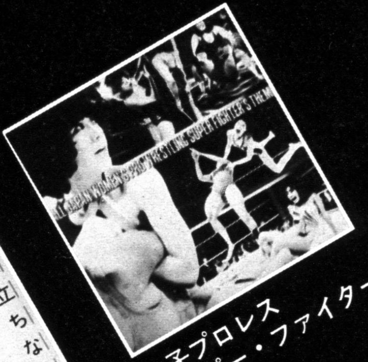
私は5フィート2インチ、130ポンドと体も小さかったので、すべての面で人一倍の努力をしてきました。だから現役を退いた今でも、選手の育成を生涯の目的にレスリング一筋の人生を歩んでいます。

アメリカ・マット界も昔とはまったく変わってしまいましたね。今ではどうも女子プロレスは、あまりプロモーターからは好まれてないようで、試合数とか形式でもずいぶん冷遇されているのが残念でたまりません。私が現役の頃はいつ、どこでもメーンをとっていたのですが、今じゃそんなこと考えられないじゃないですか。だから私は常々、日本の女子プロレスが羨ましくて仕方ないのです。その意味でも私は努力しなければなりません。

私が気になるのは、日本のレスラーの寿命が短いという点です。日本とアメリカの考え方の差と言ってしまえばそれで済んでしまうのでしょうがね。まず、アメリカはビジネス・ライクの国です。プロレスというのも立派な職業なんですよ。ものには順序というのがあって、いまは何かその場限りの見せかけが多いような気がします。例えば、1年そこそこでチャンピオンになってしまうようなことなど。私はそれを憂いているわけです。だから私のところでは、まず手始めに3～4年はプロレスというからに捕われず、あらゆるトレーニングを課すのです。その上で私が認めた選手がデビューするという課程になっています。それからね、やはり選手を大切にして、結婚してからもまだまだファイトが続けられるように"いい仕事"を与えてあげたいと私は、毎日のように飛び回ってますよ。

女子プロレスとレコードは、大衆へのパブリシティとして〝密接〟なつながりがある。このページは、女子プロレスラーが吹き込んだ思い出のメロディーを〝すべて〟紹介します。（詩恵里 真輝）

ゴールデン・ペア
●ソーダ水のむこうに
（コロムビア＝53年4月）ホストBPをめざしたGPの第1弾。フォーク調で、ひとりずつのソロがうまく入っているフレッシュなデュエットだ。作詞・作曲は小泉まさみ



女子プロレス スーパー・ファイターのテーマ
（キング＝55年11月）男子レスラーのテーマLPで当てたキングが発売「ファンとのディスコ大会」などのキャンペーンを実施。本格的な入場テーマ曲として今も使用されている

ジャッキー佐藤
●もしも旅立ちなら
（RCA＝55年4月）歌手ジャッキーが、さりげなく語りかけたラスト・シングル。この曲のように、突然〝知らない世界〟に旅立ってしまい多くのファンを悲しませた

ジャッキー佐藤
●ポケット一杯のなみだ
（RCA＝54年9月）ジャッキーには珍しい？ 明るいイメージ。日米対抗リーグ戦記者会見で報道陣に初公開。〝君のことは忘れないよ〟と優しくアピール。ステップがかわいかった

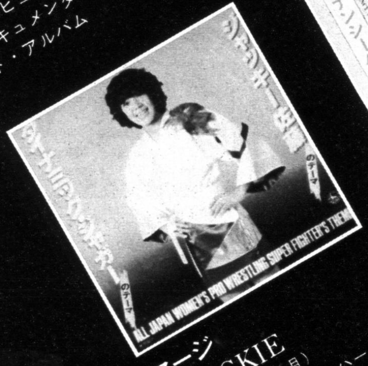
ジャッキー佐藤
●美しい決意
（RCA＝54年5月）デュオからソロへ、ジャッキーの第1弾。BPを解散して1人立ちした心境をうまく歌いこなしている。アリスの「チャンピオン」に似たニューミュージック

ビューティ・ペア
●2.27フェアウェル・ビューティ・ペア
（RCA＝54年4月）1979年2月27日、日本武道館における引退決戦試合の模様を中心に、ビューティ・ペアの1日をドキュメンタリーに綴ったラスト・アルバム

ミミ萩原
●愛（アイリーン）鈴
（オレンジハウス＝57年3月）ブロードウェイ・ドリームとの両A面で発売。いみしんな歌詞はミミの女としての優しさと生き方そのものだ。自分でデザインした衣裳がひときわ華麗さを加えた

ミミ萩原
●スタンド・アップ
（オレンジハウス＝56年9月）元歌手ミミのプロレスラーとしての1作目。メルヘンタッチな面とアップテンポの曲でセクシーアイドルに成長。大胆なアクションはお色気たっぷり

ナンシー久美
●アマゾネス女王
（フィリップス＝56年5月）ナンシーの4年ぶりのソロ。自らリーダーであるレッド・フェニックスの若手5人をバックコーラスに従えて登場。振り付けはピンク・レディーを育てた土居はじめ



マージ
●JACKIE
（キング＝55年11月）女子プロレス〝スーパー・ファイターのテーマ〟からシングルカットされた。同時にナンシー久美、池下ユミのテーマもシングル盤で発売

女子プロレス ディスコ・グラフィー

マッハ文朱
●花を咲かそう
（テイチク＝50年3月）
女子レスラーが吹き込んだ初めてのレコード。日劇でのワンマンショー、2本のCM出演と大活躍し"女子プロレス"を、お茶の間に定着させた功績は大きい

ビューティ・ペア
●かけめぐる青春
（RCA＝51年11月）
ご存じBPのデビュー曲。40万枚突破の大ヒットとなり、大ブームに火をつけた記念すべき作品。新宿音楽祭の敢闘賞をはじめ各音楽祭の新人賞を独占

ビューティ・ペア
●真赤な青春
（RCA＝52年7月）
同名タイトルの映画も東映で上映され、この曲で人気の頂点に達した。ファンによる"ジャッキー！マキ！"といった迫力のあるバック・コーラスが効果的

ビューティ・ペア
●青春にバラはいらない
（RCA＝53年2月）
浅草・国際劇場での2回目のショーのメイン曲となった。"バラの花はいらない"という歌詞とともに二人が客席にバラを投げるのが見せ場だった

ビューティ・ペア
●バン・バババン
（RCA＝52年10月）
BPの第3弾。軽快なリズムの曲だったが、前2作と比べるともう一つパンチ不足だ。この年の暮れNHK紅白歌合戦に応援ながらプロレスラーとして"初めて"出演

ビューティ・ファンクラブ
●がんばれビューティ・ペア
（CBSソニー＝52年8月）
ビューティ・ファンクラブの女のコが唄ったビューティ・ペアの応援歌。最初のBP武道館決戦の入場テーマに使われ、感動した人も多いはず

ナンシー久美
●夢みるナンシー
（コロムビア＝52年8月）
女子プロ界の山口百恵といわれた"アイドル候補生"。ナンシーの処女作。BPの妹分として一躍人気者になり、コロムビアの新人奨励賞を受賞した

ゴールデン・ペア
●ミステリー・ラヴ
（コロムビア＝54年4月）
イントロで"バキッ！バキッ！"という奇妙な音が出るのが特徴。QAに対抗し黒づくめのファッションでクール？に迫った。

クイーン・エンジェルス
●ローリング・ラブ
（CBSソニー＝54年3月）
当時、流行のディスコ・サウンドでダイナミックに歌い踊った。振り付けは、かのジョン・トラボルタを教えたジェフ・クータッシュ。知る人ぞ知る最高の名曲

ビューティ・ペア
●愛のけものたち
（RCA＝53年10月）
青春路線に沿ったアップテンポのメロディー。再度のビューティ・ペア決戦のため、この曲を最後にBPは解散。マニアなら、ぜひ持っていたい貴重な一枚だ

ビューティ・ペア
●シーサイド急行
（RCA＝53年7月）
この頃から歌唱力もつき、A・B両面をたった2時間で吹き込んでしまった。湘南サウンド的なさわやかさを感じる。日本武道館の10周年記念興行で初披露

The California Dolls

MGM映画「カリフォルニア・ドールス」の日本公開近し！

女子プロレス・ファンには絶対に見逃せぬアメリカ映画がやって来る。その映画には、ミミちゃんとジャンボ堀が〝レスラー〟として堂々と出演しているのだ。女子プロレス・アルバムのラストページは、近々日本で上映される「カリフォルニア・ドールス」を、公開に先がけてチラリと〝誌上〟でお見せします。　（伊賀　仁）

ピーター・フォーク（中央）と仲良く記念撮影に収まる〝日本チーム〟

ミミちゃんが出演した映画をひと足お先に〝誌上〟公開!!

ミミちゃんがハリウッドで撮影した映画が、いよいよ日本で公開される！

題名は「カリフォルニア・ドールス」――アメリカでは「オール・ザ・マーブルズ」というタイトルで上映されたが、今一つ意味がわかりにくいため、日本では主役のタッグチームの呼び名をとって前出のものとなった。

この作品は、その若さのすべてをプロレスに賭けた2人の美女が全米を転戦しながら〝アメリカン・ドリーム〟を手にするまでを、笑いと興奮で描いた最新娯楽大作である――とまあ、配給元のCICの宣材の解説を拝借すれば、こうなるのだが…とにかく〝女子プロレス讃歌〟の映画であり、日本のように女子プロだけの興行は成り立たず男子の前座として組み込まれるだけのアメリカで、よくぞ作ったものだと感心するほどだ。

主演の〝カリフォルニア・ドールス〟には、ミュージカル女優のビッキー・フレデリックとモデル出身のローレン・ランドンという2人が起用され、スタンド・インなしの体当りで女子プロレスラーという〝難役〟を熱演している。

このタッグチームに未来を賭け売り出しに躍起となるマネジャー役が、あの「刑事コロンボ」のピーター・フォーク。また「ロッキー」のバート・ヤングが、ズル賢いプロモーターを演じ、またまた〝名脇役〟ぶりを見せている。

映画はオハイオ州アクロンの試合場から始まり、いきなり熱狂の〝プロレス風景〟が映し出される。アメリカのフィーバーぶりは日本のそれと比較にならぬほどの凄さだ。C・ドールスは地元レスラーに勝ち、P・フォーク演ずるハリーの運転する車に乗って次の町へと旅を続けて行く。車のナンバープレートには〝TAG TEAM〟とある。

プロレスラーの生活…とくにアメリカでのそれは想像以上の厳しさだ。言いがかりをつけて約束通りのギャラを払おうとしない悪徳プロモーターがいたり、試合を終えて泊った安ホテルのベッドでフトこみあげてくる寂しさ、やりきれなさ…またはやり手のプロモーターに売り込むが、すげない返事で一蹴されてしまう。

もっとヒドイのになると、立ち寄った小さな町のカーニバルでは女ならではのショー〝泥レス〟にまで出る破目となる。かと思えば、旅先で「レスリング・マガジン」を買い、自分たちが載っている記事を見て狂喜する。

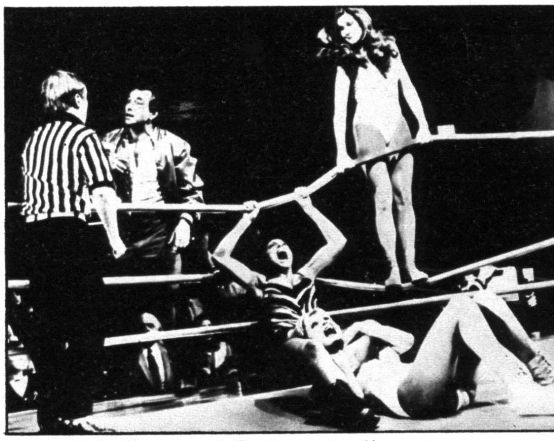
あるときには、レフェリーの陰謀で勝てる試合を落としてしまい悔し涙にくれ、また結果を不満とし控室で相手チームと掴み合いの喧嘩をおっ始めるなど……プロレスラーの〝裏の表情〟を鮮やかに浮き彫りにしている。プロレスがきれいごとだけですむはずはないわけで、むしろレスラーの悲哀や職業としての厳しさ、難しさにスポットを当てたことに、私としては〝好感〟を持った。

ミミちゃんは主役のC・ドールスにレスリングのコーチもした！

クライマックスは〝定石〟通りC・ドールスが〝因縁の相手〟トレド・タイガースに挑戦する北米タッグ選手権試合。これが延々30分に及ぶ死闘となり、ドールスは出血させられピンチ、残り時間は刻々と迫るが…。

ところで、肝心のミミちゃんとジャンボ堀の出演シーンだが、正直な話…登場するのは2、3分といったところ。それも前半10分以内だから、ミミちゃんファンには物足りないが、そのレスリング・シーンは圧巻で、とくに堀などは〝さすが本物は違う〟と唸らせる迫力を見せてくれる。観に行く方は、くれぐれも前半10分の間にトイレなど行って見逃すことのないように…。

この映画は5月下旬か6月上旬（これを書いている時点では未定）に、東京は東劇、新宿京王、渋谷東急の3館で封切られる。



映画の中で、ふんだんに登場するレスリング・シーン

さらば ブームを飾った名優たち

青春をともに過ごしただ〝いい顔〟があった。ブームに生き、ブームに燃え尽きた恋人たち。嗚呼！懐かしの再会よ、思い出は永遠の彼方に！

名優たちが華やかに競演した54年秋の日米対抗リーグ戦。まるで同窓会のように、大半の選手が思い出の中に消えていった

不滅のスーパー・アイドル
ビューティ・ペア
ジャッキー佐藤◉マキ上田

ビューティ・ペア――この名前なくして女子プロレスを語ることはできない。その常識外の大ブームは、プロレスのフレームを大きくはみだしビューティ・ペアという〝固有名詞〟の世界を築いた。その功績は大きい

偉大なるスーパースター、ジャッキーはまさに〝女子プロレスの顔〟そのものだった。超越されたコンピューターのようなレスリングは〝努力〟の結晶で不世出のパーフェクト王者である

2度に渡るビューティ・ペア決戦は、いずれも日本武道館で行われ〝異常人気〟を証明した（54年2月、調印式にて）

WWWAシングル、タッグ、オール・パシフィックと唯一の3冠王を獲得したマキは独自の〝守りの世界〟を切り開いた。ビューティ・スペシャルは、マキの極めつけの技である

ルチャ・リブレから舞い戻った彗星！

クイーン・エンジェルス

トミー青山◉ルーシー加山

横田やミミがいくら〝空中殺法〟を売り物にしても、この2人にはかなわない。後にも先にも例のない海外修行という〝超エリート〟として育てられメキシコでルチャ・リブレを習得。帰国後、初公開されたクイーン・ロケット（プランチャ・スイシーダ）の衝撃は凄かった。勝つことだけを義務づけられた華麗なる彗星だった

ハイ・ジャンプからのヒップ・アタックが爆発。トミーのレスリング・センスと運動神経は秀逸のマト

思い切りの良い派手な大技は、ルーシーの魅力。エンジェル・スペシャルが見事に決まる

53年暮れのタッグ・リーグ戦では、ビューティ・ペアを倒し優勝。文句なしの最強タッグだった

〝タッグ黄金期〟ナンシーは富士美を指名

ゴールデン・ペア

ナンシー久美◉ビクトリア富士美

〝ポスト・ビューティ・ペア〟の一番手として結成されたのがナンシー久美とビクトリア富士美の同期生コンビだった。人気者同士のペアに期待が賭けられたが、後輩クイーン・エンジェルスの台頭で、その座を奪われてしまった。〝大試合に弱い〟というモロさが祟り大物になれずじまいで空中分解。ナンシーは今でも孤軍奮闘中！

柔の富士美に剛のナンシー。2人は、新人時代からの〝良きライバル〟でもあった

空手殺法の先駆者は〝空手金太郎〟ビクトリア富士美。鋭角的なジャンピング・ニーバットもその一つ

女子プロで大流行のボディリストは〝かつての怪力〟ナンシーの得意技だった

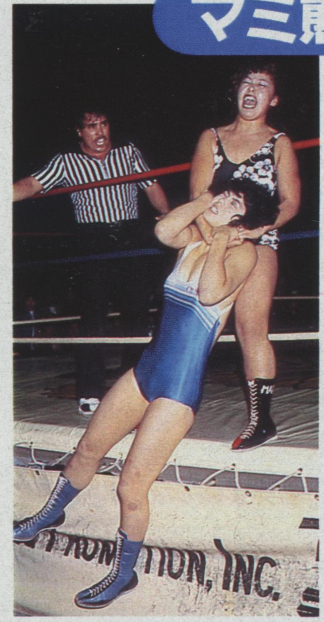
君は覚えているだろうか…ビューティ・ペアとともに
〝素晴らしき時代〟を支えた恐るべき悪のパワーを！

BP時代に暴走した〝悪〟のバラード

池下ユミ

寝てよし、立ってよしの最高のテクニシャンだが、なんとも陰湿で不気味なムード。ジャッキーの永遠のライバルとして、ブラック軍団を引っぱってきた真の実力者。文字通りの〝悪の女王〟だった

マミ熊野



恐怖の〝人間絞首刑〟たった一つで、一躍トップに躍り出た華麗なる悪魔。ねちっこい凶器攻撃は、ファンの憎悪を浴びたが、素顔は女っぽく陽気な〝ワル〟だった

阿蘇しのぶ

150センチそこそこの小型ながら、人を喰ったような、ふてぶてしい表情とスパナを使っての狂暴ファイトでビューティ・ペアを〝いじめ〟抜いた悪の元祖。池下との初代ブラック・ペアは懐かしい限り

赤城マリ子

元世界王者・赤城の晩年は情け容赦のない徹底したラフ・ファイターだった。ナンシーや富士美が何度、泣かされたことだろうか…

シルバー・サタン

覆面をつけ、赤城とのシルバー・ペアを結成。だが、後輩の台頭で苦闘の連続だった。本名の鋤崎真澄に戻ると〝富士美の姉〟としての存在しか無かった

歴史を語るポスターコレクション

プロレス興行において、ポスターの持つ〝宣伝効果〟は大きい。そして写真の配列は人気・実力の大きなバロメーターでもある。そこで今回は、ビッグマッチを中心に見た〝看板スター〟の移り変わりをポスターによって振り返ってみた。この中で、あなたが観戦した試合のポスターは何枚あるかな？

初の海外遠征はハワイ・ＮＢＣアリーナでの２連戦（52年８月）

世界各国の強豪が集結…第２回ワールド・リーグはジャッキーが優勝（51年10月）

まさに女子格闘技最高のカード。ＢＰ決戦は60分、判定でジャッキーに軍配（52年11月）

16歳のマッハが史上最年少王者に。だがリターンマッチで宮本は奪回(50年３月)

デビュー１ヵ月でマッハがタイトル初挑戦！　だがニコライの壁は厚く惜敗（49年８月）

新春を飾るメーンは、やはりスーパースター・ジャッキー（53年１月）

Ｍ・バションの妹ビビアンが初来日。赤城が宮本を破り短期間だが王者に（51年３月）

10周年記念興行は、豪華世界３大選手権試合。新星ＱＡがメキシコから凱旋（53年８月）

ビューティ・ペア人気で話題騒然の女子プロレス・ビッグ・フェスティバル（52年７月）

赤城の執念が爆発、マキを失神させせ界王者にカムバック（51年11月）

当時、流行の異種格闘技を女子プロでも開催、レンチは米ボクサーにＫＯ負け（51年７月）

因縁の３大決戦／　トミー対ルーシー、池下対熊野の夢のカードも実現（54年12月）

女子プロ版〝日米大戦争〟ジャッキーがＶ・ウイリアムスを下し優勝（54年10月）

タッグ・リーグのオープニングは、ＢＰ対ＱＡの公式戦（53年10月）

２度目のグアム遠征はジョージ・ワシントン・ハイスクールで開催（55年８月）

ジャッキーが大流血。レフェリー・ストップでモンスターが新王者に（54年７月）

地元出身者用に作られるＢ３判のポスター。女子プロならではのアイデアだ（57年２月）

２グループ時代、Ｂ班のポスター。フレッシュな顔が目立つ（55年10月）

敗者は引退／　ルールでビューティ・ペアが再度の激突（54年２月）

ミミが〝看板〟として登場した最新作。デザイン、配色もバッチリ（57年５月）

ジャッキー、池下が総倒れ。新時代の夜明けを象徴した貴重な一枚（56年２月）

ムを!!

〝ＢＰ全盛〟のスターが次々に消えていき、一時は低迷していた女子プロレス界も、昨年夏あたりからジワジワと人気を盛り返しつつある。その最先端にいるのがジャガー横田、ミミ萩原、デビル雅美である。そして、前出の〝３本柱〟を崩そうと頑張っているのが、ここで紹介する〝パワーに生きる〟３人だ。

↑ロープからハネ返ってくる相手を水平に落とす攻撃は大森の十八番
↖マスクの良さはピカー！　大森の登場でリング上が華やぐ
←ミミのパートナーとして初のタイトル（ＷＷＷＡタッグ）を保持する

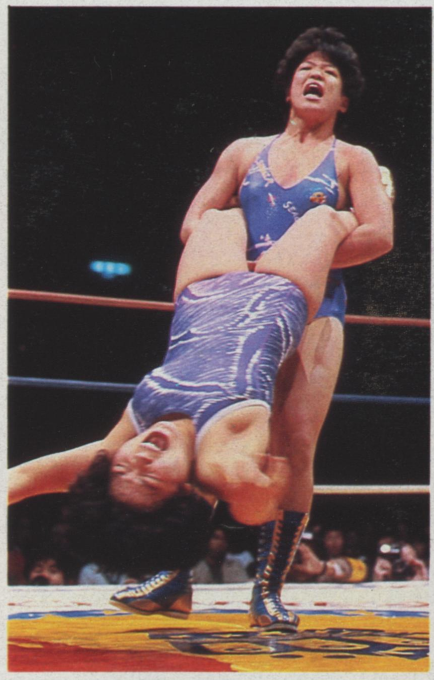
大森ゆかり

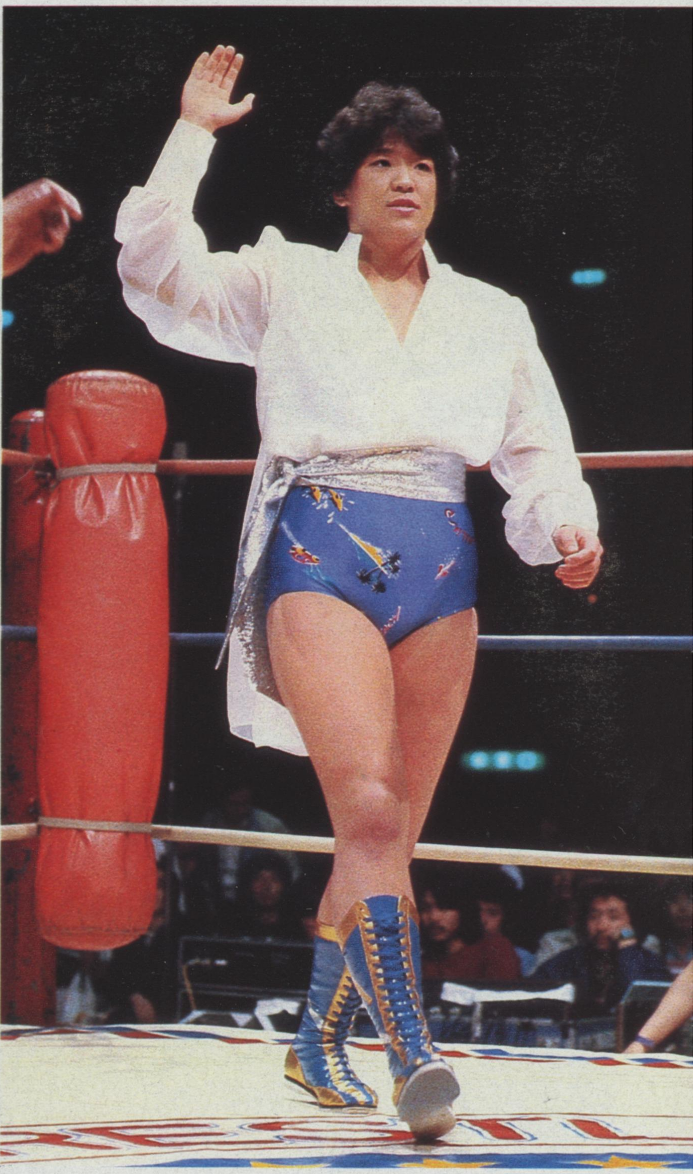
レスラー向きの体、整った顔立ち…それだけでスター性は申し分ない。おまけに鏡山親方（元横綱・柏戸）が後見人でプロ入りという恵まれたスタートを切った。半ひねりを加えた体当りは〝大森パワー〟ならではの豪快さ。ちょっと不器用なところが目につく。

若い力で巻き起こせ…新たなるブー

ライオネス飛鳥

もし、アマチュア・レスリングに〝女子の部〟があったなら、必ずやオリンピック候補選手に躍り出るだろう…飛鳥のレスリング・センスは抜群なのだが、強すぎて上手すぎるがゆえに、ファンへのアピール度は今ひとつ。だが〝ストロング派〟として貴重な存在ではある。





↑天性のセンスでダイナミックなファイトを展開する飛鳥。得意技はズバリ…トミー青山ばりのジャイアント・スイング
→ジャッキー佐藤に〝最も近い〟ムードを持つ飛鳥。実力派の最右翼として期待の逸材である

←オール・パシフィック王座に君臨する堀。スケールの大きい素材である

ジャンボ堀

日本人としては恵まれたボディーの持ち主である堀。ことに180センチという上背が魅力だが、せっかくの素質を開花させられずにいる。とかく〝大男・大女〟は、人がよすぎるのだ。気は優しくて力持ち…とは、よく言ったものである。見かけによらず(?)端々に〝女らしさ〟がのぞく堀…それがまた魅力なのかもしれない。

↑〝スーパー・ジャンボ〟の本領発揮！堀のファイトは、相手を叩きつける荒ワザを主体とする

若鮎の明日に栄光あれ!!

小柄ながらハッスル・プレーが、ファンにアピールしている

長与千種

81年度新人王獲得がチコに〝力〟を与えた。新人らしい、闘志をムキ出しにしたファイトはプロとして合格。空手殺法は派手かつ破壊力抜群だが、プロレス技の決め手がほしいところ。

高階由利子

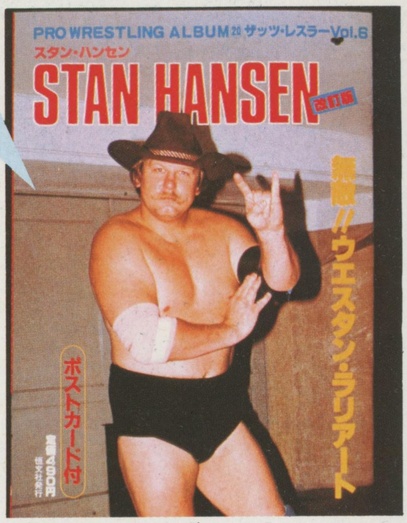
可愛らしいマスクに似合わぬ猛烈ファイトは新人離れしている。それもそのはず横田と同時期にオーディションを受けるという〝経歴〟を持つ。ちょっと個性に欠ける。

立野記代

あどけない表情と〝ぶりっ子〟の甘い声、ちょっぴり太目の体つきは〝女の子〟を感じさせるのに充分。反撃のときに発する高い大声は〝若さ〟以外の何物でもあるまい。キャリアを積むにつれ、どんなタイプに成長するか楽しみ。

闘う男の愛と勇気をキミたちに伝えることができたと信じます！

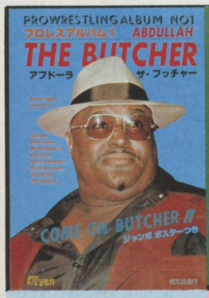
最新刊！



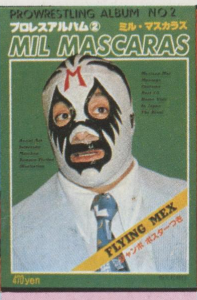
プロレス・アルバム No.⑳ ポスト・カード付
ザッツ・レスラーVOl 6
スタン・ハンセン
改訂版

PRO WRESTLING ALBUM

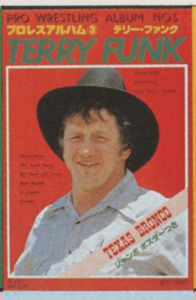
バックナンバー 絶賛発売中



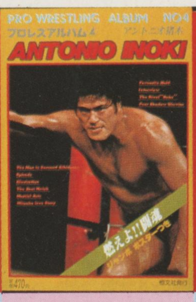
プロレス・アルバムNo.①
アブドーラ・ザ・ブッチャー
★品切れ



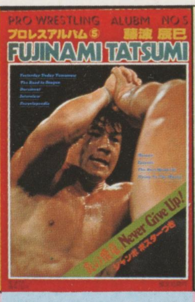
プロレス・アルバムNo.②
ミル・マスカラス
★好評重版



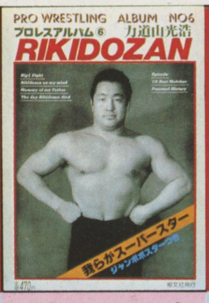
プロレス・アルバムNo.③
テリー・ファンク
★好評重版



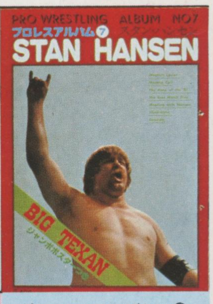
プロレス・アルバムNo.④
アントニオ猪木
★好評重版



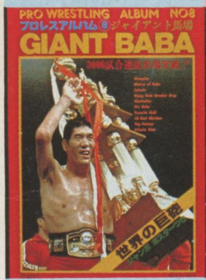
プロレス・アルバムNo.⑤
藤波辰巳



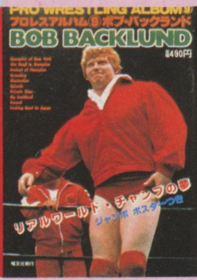
プロレス・アルバムNo.⑥
力道山光浩



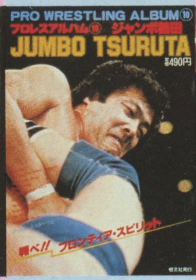
プロレス・アルバムNo.⑦
スタン・ハンセン



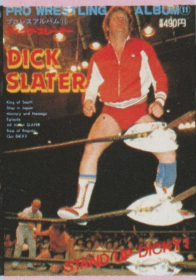
プロレス・アルバムNo.⑧
ジャイアント馬場



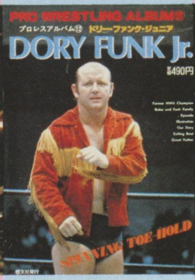
プロレス・アルバムNo.⑨
ボブ・バックランド



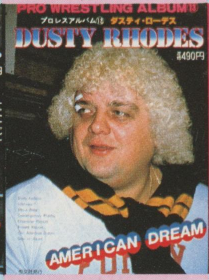
プロレス・アルバムNo.⑩
ジャンボ鶴田



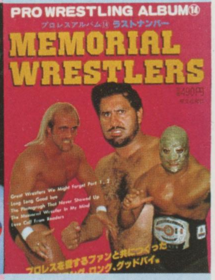
プロレス・アルバムNo.⑪
ディック・スレーター



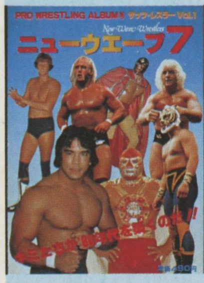
プロレス・アルバムNo.⑫
ドリー・ファンクJr.



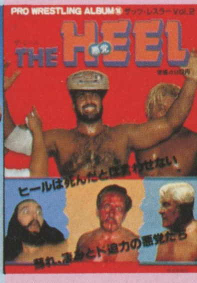
プロレス・アルバムNo.⑬
ダスティ・ローデス



プロレス・アルバムNo.⑭
メモリアル・レスラー

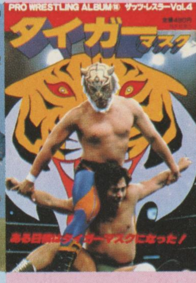


プロレス・アルバムNo.⑮
ザッツ・レスラーVOl 1
ニューウエーブ7



プロレス・アルバムNo.⑯
ザッツ・レスラーVOl 2
ザ・ヒール

プロレス・アルバムNo.⑰
ザッツ・レスラーVOl 3
ザ・アマリロ



プロレス・アルバムNo.⑱
ザッツ・レスラーVOl 4
タイガーマスク

プロレス・アルバムNo.⑲
ザッツ・レスラーVOl 5
アントニオ猪木と過激なる軍団

①～⑥定価470円／⑦～⑱定価490円No.①～No.⑭ジャンボ・ポスター付No.⑮～No.⑳ポスト・カード付／最寄りの書店でお買い求め下さい。書店にない場合でも、注文されれば取り寄せてくれます。直接当社へお申し込みの方は代金と送料200円を添えてお送り下さい。

恒文社 東京都千代田区神田錦町3－3

プロレス アルバム No. 21
ザッツ・レスラー Vol. 7

昭和57年6月1日発行 第3巻 第4号 通算21号

編集兼発行人 池田恒雄 発行所 〒101 東京都千代田区神田錦町3—3 (株) 恒文社
電話(〇三)(二九一)代表七九〇一番 振替口座東京五—三五八二四番

定価四九〇円

雑誌67773—21